古轡通りＢ遺跡・古轡通り古墳群発掘調査報告

２０００年９月

三重県埋蔵文化財センター

序

このたび、県営ほ場整備事業に伴って消滅していく古轡通りＢ遺跡と古轡通り古墳群の一部を発掘調査いたしました。

当遺跡は櫛田川右岸に所在しますが、この地域では近年の発掘調査によって郷土の歴史を究明するうえでの重要な成果が蓄積されております。

今回の調査結果を概観いたしますと、古轡通りＢ遺跡からは古墳時代の地方豪族の祭場と考えられる掘立柱建物や井戸などが、また古轡通り古墳群としては４基の古墳が発見されました。このように当地域の沿革を追究するうえで貴重な資料を得ることができました。消滅した遺跡に代わり、発掘調査の成果が郷土の歴史ひいては文化を伝え、活用されていくことを切望いたします。

なお、文末ながら、事前協議から発掘調査にかけて多大のご理解とご協力をいただいた県農林水産商工部ならびに松阪地方県民局農林商工部、松阪市教育委員会をはじめ、発掘調査にご助力をいただいた地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成１２年９月

三重県埋蔵文化財センター

所　長　**藤　澤　英　三**

例　　言

1　本書は、三重県松阪市早馬瀬町字古轡通りに所在する古轡通（ふるぐつわどお）りＢ遺跡・古轡通り古墳群の第１・２次調査の発掘調査結果をまとめたものである。

2　調査によって確認された４基の古墳については、古轡通り古墳群として報告する。

3　調査は、２ヶ年にわたっている。調査の体制は以下の通りである。

〈第１次調査〉

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
　　主事　坂倉一光、技師　大川　操
調査期間　　平成10年９月16日～10月29日
調査面積　　６５０㎡

〈第２次調査〉

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
　　主事　奥野　実、主事　田上　稔、技師　金子智子
土工担当　　（財）三重県農業開発公社
調査期間　　平成11年５月10日～９月20日
調査面積　　２，４００㎡

4　本書の編集は奥野が担当した。執筆は奥野実・田上稔・坂倉一光が行い、文責は目次と文末に明記した。

5　写真図版の遺物番号は、出土遺物実測図の番号と対応している。

6　当報告書で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。
ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝　　ＳＥ：井戸　　ＳＫ：土坑　　ｐｉｔ：柱穴、小穴

7　本書で示す方位は、すべて真北を用いた。なお、磁北は約６°30′西偏（平成９年度、国土地理院）している。

8　本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9　本調査は、平成10・11年度県営ほ場整備事業（漕代地区）に伴って実施したものである。また、調査費用は、その一部を国庫補助を受けて三重県教育委員会が、他を三重県農林水産商工部が負担した。

10　調査にあたっては、地元在住の各位、漕代土地改良区、松阪市教育委員会、県農林水産商工部農業基盤整備課、松阪地方県民局農林商工部にご協力をいただいた。

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　　言 …… （奥野　実）……1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… （田上　稔）……3
Ⅲ　基本層序と遺構 …… （奥野　実・坂倉一光）……12
Ⅳ　遺　　物 …… （奥野　実・坂倉一光）……23
Ⅴ　結　　語 …… （奥野　実）……40

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 5
第２図　遺跡地形図 …… 6
第３図　調査区位置図 …… 6
第４図　調査区地区割図 …… 7
第５図　調査区土層断面図 …… 8
第６図　調査区平面図 …… 9・10
第７図　ＳＢ42実測図 …… 12
第８図　ＳＢ42柱穴配置図 …… 13
第９図　ＳＥ53遺物出土状況図 …… 14
第10図　ＳＫ18土器出土状況図 …… 15
第11図　１号墳実測図 …… 16
第12図　２号墳実測図及び土層断面図 …… 17
第13図　３号墳実測図及び土層断面図 …… 18
第14図　４号墳実測図及び土層断面図・ＳＫ27実測図・pit１土器出土状況図・pit５土器出土状況図 …… 19
第15図　ＳＫ１土器出土状況図 …… 20
第16図　ＳＢ54実測図 …… 21
第17図　ＳＥ51実測図 …… 22
第18図　出土遺物実測図１ …… 23
第19図　出土遺物実測図２ …… 24
第20図　出土遺物実測図３ …… 25
第21図　出土遺物実測図４ …… 26
第22図　出土遺物実測図５ …… 28
第23図　出土遺物実測図６ …… 29
第24図　出土遺物実測図７ …… 30
第25図　出土遺物実測図８ …… 32
第26図　出土遺物実測図９ …… 33
第27図　掘立柱建物類例 …… 40
第28図　ＳＢ42の曲尺推定例 …… 41
第29図　ＳＢ42・ＳＥ53位置図 …… 42

表　目　次

第１表　溝・土坑一覧表 …… 11
第２表　出土遺物観察表１ …… 35
第３表　出土遺物観察表２ …… 36
第４表　出土遺物観察表３ …… 37
第５表　出土遺物観察表４ …… 38
第６表　出土遺物観察表５ …… 39

図　版　目　次

図版１　調査前風景・第１次調査Ａ地区全景 …… 44
図版２　第１次調査Ｂ地区全景・第２次調査区西方全景 …… 45
図版３　第２次調査区西方全景・第２次調査区西方全景 …… 46
図版４　ＳＢ42・ＳＢ42 …… 47
図版５　ＳＥ53土器出土状況・１号墳 …… 48
図版６　２号墳・３号墳 …… 49
図版７　４号墳・ＳＤ13 …… 50
図版８　ＳＫ１土器出土状況・ＳＥ51 …… 51
図版９　ＳＥ51断ち割り後・作業風景 …… 52
図版10　出土遺物１ …… 53
図版11　出土遺物２ …… 54
図版12　出土遺物３ …… 55
図版13　出土遺物４ …… 56
図版14　出土遺物５ …… 57
図版15　出土遺物６ …… 58

Ⅰ　前　　言

1　調査の契機

古轡通りＢ遺跡は、三重県松阪市早馬瀬町字古轡通りに所在し、松阪市遺跡番号651の周知の遺跡である。当遺跡は、砂利採取に伴い平成６年１月に松阪市教育委員会により試掘調査が実施された。調査の結果、弥生時代から室町時代の遺物が確認されたため事業は中止され、遺跡は保存された。

その後、平成10・11年度県営ほ場整備事業（漕代地区）が計画された。これを受けて、遺跡保存に向けて松阪地方県民局農林商工部と文化財保護の協議を重ねた。その結果、事業に伴い保存不可能な部分について調査を実施し、記録保存することとなった。

2　調査の経過

(1)　現地調査経過の概要

調査は２ヶ年にわたって行われた。第１次調査は、農道予定部分の650㎡を対象範囲とし、平成10年の９月16日から10月29日にかけて行った。調査区は北側の400㎡をＡ地区、南側の250㎡をＢ地区とした。また、第２次調査は、現況が畑地の部分2,400㎡を対象範囲とし、平成11年の５月10日から９月20日にかけて行った。排土の置き場確保のため調査区を半分に分けて調査を実施した。

現地調査にあたっては、地元地区在住の方々に補助をしていただいた。記して感謝します。

〔第１次調査〕

青木香代子、岩田　　修、岡山富美子、奥井　久雄
奥田　松代、楠木　和江、田所きぬ子、橘　とし子
橘　　とみ、中井　稔子、永崎　幸美、中西美奈子
中西八重子、中野　栄美、中村みちよ、西村津弥子
藤木千寿子、前田きみ子、三浦　正代、脇田　房子

〔第２次調査〕

青木　一訓、岩田　　修、岡山富美子、奥井　久雄
奥田　松代、阪井　邦好、阪井志津子、澤　みちる
柴田きぬ子、鈴木　和代、鈴木　久子、田替藤いつ子
田所　　勇、田所きぬ子、田所智佐子、田所　好子
田中　義一、辻　　妙子、中井　稔子、永崎　幸美
中西　時男、中西　敏雄、中西　　賢、中野　栄美
藤木千寿子、前田きみ子、松田　市子、三浦　正代
山際　哲也、渡辺　忠雄

(2)　調査日誌（抄）

〔第１次調査〕

1998年

９月17日　重機による表土掘削を開始する。

９月25日　表土掘削を終了する。地区設定。

９月29日　掘削作業開始。Ａ地区から始める。排水を兼ねたトレンチを掘り、下層を確認したが遺構・遺物なし。ＳＫ１からロクロ土師器がまとまって出土する。

10月１日　大雨。調査区水没する。

10月６日　Ａ地区の写真撮影を行う。

10月９日　Ａ地区遺構実測を終了する。

10月12日　Ｂ地区の掘削作業を開始する。漕代幼稚園の遺跡見学が行われる。

10月13日　ＳＤ11・ＳＤ13・ＳＤ14を掘削する。古墳時代の壺などが出土する。

10月20日　石組み井戸ＳＥ16を掘削する。

10月21日　小雨の中、Ｂ地区写真撮影を決行する。

10月26日　Ｂ地区遺構実測を終了する。

10月30日　松阪地方県民局農林商工部に引渡す。

1999年

３月８日　地元住民対象にスライド上映会を開催。

〔第２次調査〕

1999年

５月10日　重機による表土掘削を開始する。

５月13日　表土掘削を終了する。

５月14日　地区設定。発掘用具を搬入する。

５月17日　掘削作業を開始する。

５月20日　１号墳を検出する。

５月28日　ｇ６区で多数の pit を検出する。

６月１日　残りのｉ１～ｋ８区の重機による表土掘削を行う。

６月２日　ＳＤ30から土製支脚が出土する。

６月３日　ｈ５～７区でも多数の pit 列を検出する。何か特殊な建物か？

6月8日　県政レポーターの取材を受ける。
6月10日　掘削作業を終了する。写真撮影を開始する。
6月11日　途中にわか雨にあうが、写真撮影終了。
6月14日　遺構実測を開始する。
6月18日　遺構実測を終了する。
6月21日　前半部分の調査区の埋め戻しを開始する。
6月28日　埋め戻しを終了する。後半部分の調査区の重機による表土掘削を開始する。
7月2日　表土掘削を終了する。地区設定。
7月6日　掘削作業を再開する。
7月8日　北壁の土層断面図を作成する。
7月12日　3号墳を検出する。
7月15日　4号墳・SD48を検出する。
7月29日　教員研修の7名が参加する。
8月9日　SE51・53を検出する。
8月16日　排土の一部を西方の畑地に移動する。
8月17日　SE51の遺構実測を開始する。
8月19日　SE51の遺構実測を終了する。
8月22日　掘削作業を終了する。
8月23日　写真撮影を開始する。
8月24日　遺構実測を開始する。
8月26日　遺構実測を終了する。
8月27日　SE51の断ち割りを行う。SE53の補足調査を行い、検出面より深さ約2.5mの所で、井戸枠を確認する。
9月1日　松阪市政記者クラブで資料提供を行う。
9月2日　SE53の井戸枠の掘削を開始する。枠内にほぼ完存する土師器壷などを確認する。
9月4日　午前中の雨もあがり、午後2時から現地説明会を開催する。110名の参加を得る。
9月7日　大雨のため、SE53が水没する。
9月13日　SE53の井戸枠の取り上げを行い、掘削を終了する。
9月14日　テントの片付けなどを行う。本日で現場作業を終了する。
9月20日　松阪地方県民局農林商工部に引き渡す。

(3) 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官あてに行っている。

〔第1次調査〕
・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
平成10年9月14日付農基第78－4号（県知事通知）
・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
平成10年9月30日付教生第1031号（県教育長通知）
・遺失物法にかかわる文化財発見・認定通知（松阪警察所長あて）
平成10年11月17日付教生第8―28号（県教育長通知）

〔第2次調査〕
・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
平成11年4月12日付農基第201号（県知事通知）
・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
平成11年5月10日付教生第322号（県教育長通知）
・遺失物法にかかわる文化財発見・認定通知（松阪警察所長あて）
平成11年10月18日付教生第4―25号（県教育長通知）

3　調査の方法

(1) 調査区の設定

調査区内を4m四方の枡目で切ることによって小地区を設定した。第1次調査のA地区は、西から東に1～10、北から南へA～Fとした。また、B地区では、西から東に9～15、北から南へG～Jを配置した。第2次調査は、西から東へ1～15、北から南へa～lを配置した。なお、この小地区設定は国土座標軸とは無関係である。

(2) 遺構図面

調査区の全体の平面図は、縮尺1/20または縮尺1/50で作成した。各土層断面図については、縮尺1/20で作図した。出土遺物を伴う遺構は、縮尺1/10または1/20で作成した。

(3) 掘削方法

表土は重機で、包含層以下・遺構までを人力で行った。　（坂倉一光・奥野　実）

Ⅱ　位置と歴史的環境

1　遺跡の位置

古轡通りＢ遺跡・古轡通り古墳群(1)は、行政上は三重県松阪市早馬瀬町字古轡通りに所在する。

当遺跡は、松阪市南部を流れる櫛田川右岸の低位河岸段丘上に立地している。西方には櫛田川が流れ、遺跡周辺には田園風景がひろがっている。

当遺跡の時期的変遷についてみていく場合、櫛田川（祓川）の河道の変動などにも注意しなければならない。現在、櫛田川の分流となっている祓川は、かつては櫛田川本流であったと考えられている。櫛田川は現河道と祓川との間で幾度も乱流を繰り返し、永保２年（1082）の地震と洪水により、現河道になったと伝えられている。[①]

2　歴史的環境

当遺跡の所在地である松阪市早馬瀬町は、古代において漕代郷に属しており、[②]中世には東寺領大国荘の荘域に含まれていたと考えられている。[③]近世に入って、鳥羽藩領となり、寛永10年（1633）には幕府領、その後の寛永12年（1635）からは津藩領に属した。また、旅籠屋・茶屋などが点在し、伊勢街道の街道筋として栄えた。[④]

当遺跡の周辺では、近年、漕代地区のほ場整備事業に伴って発掘調査が実施され、当地域の歴史が次第に明らかにされつつある。

ここでは当遺跡に関連する弥生時代～室町時代の遺跡を中心に述べていく。

(1)　弥生時代

弥生時代の遺跡については、当遺跡周辺で見つかっておらず、祓川右岸で多く確認されている。

金剛坂遺跡(2)からは、弥生時代後期の方形周溝墓14基などが検出されている。[⑤]また、寺垣内遺跡(3)では、弥生時代中期から古墳時代前期の方形周溝墓25基をはじめ、竪穴住居など多数の遺構が確認された。[⑥]コドノＢ遺跡(4)では、弥生時代後期から古墳時代初めにかけての竪穴住居10棟や方形周溝墓９基などが見つかった。[⑦]

櫛田川左岸では、櫛田遺跡群(5)の北ノ垣内地区から弥生時代中期の溝などが検出された。[⑧]また、琵琶垣内遺跡(6)では、弥生時代中期や後期の溝が検出された。[⑨]

(2)　古墳時代

古墳時代においては、櫛田川の河道も安定してきたのか多くの遺構・遺物が当遺跡周辺においても確認されている。

中の坊遺跡(7)からは、古墳時代中期の一辺8.5mの大型の竪穴住居跡や土坑から50余りの土師器高杯が出土した。[⑩]また、古川遺跡(8)では、４世紀後半のＳ字状口縁台付甕が出土している。[⑪]横地高畑遺跡(9)からは、古墳時代後期の方墳が検出されている。[⑫]

祓川右岸のコドノＡ遺跡(10)からは、古墳時代後期の須恵器杯・土師器甕などが出土した。[⑬]

コドノＡ遺跡の南方には、玉城丘陵と呼ばれる標高110mから130m程度の低丘陵が群がるように連なっており、数多くの古墳が分布している。

神前山古墳群(11)は23基あり、１号墳からは画文帯神獣鏡が３面出土し、５世紀前半に造られたと考えられている。[⑭]また、大塚古墳群(12)は22基からなり、１号墳は帆立貝式前方後円墳で、５世紀後半から６世紀前半の築造と思われる。[⑮]さらに、大塚古墳群の西方には河田古墳群(13)がある。古墳の数は100基以上からなり、今までに64基が発掘調査されている。調査された古墳は、７世紀前後の短期間に集中的に造営されたと推定されている。[⑯]

櫛田川左岸の瀬干遺跡(14)では、古墳時代前期前葉の方形周溝墓６基が検出されている。[⑰]また、琵琶垣内遺跡からは、古墳時代前期の竪穴住居２棟などが確認されている。[⑱]

琵琶垣内遺跡の西方及び南西方の低丘陵にも、多くの古墳が分布している。

天王山古墳群(15)からは、須恵器や埴輪が出土しており、５世紀後半から７世紀後半にかけて古墳群が造営されたと思われる。[⑲]また、山添２号墳(16)は、６世紀後半に築造されたと考えられている。副葬品としては、須恵器杯身・杯蓋のほか鉄剣、馬具一式、

玉類などが出土した。[20]

(3) 奈良・平安時代

次の奈良・平安時代では、当遺跡周辺の横地高畑遺跡で奈良時代の竪穴住居１棟と土坑２基が、横地西ノ垣内遺跡(17)で平安時代の掘立柱建物10棟などが見つかっている。[21] これらのことから同時期の集落は、上記の２遺跡それぞれに営まれていたと考えられる。

当遺跡に隣接する古轡通りＡ遺跡(18)からは、試掘調査により土坑が検出され、古代の土師器杯などが出土している。[22] また、明治19年（1886）の「伊勢国飯野郡早馬瀬村全図」には、同遺跡内に神社があったことが明記されている。[23]

櫛田川左岸の琵琶垣内遺跡では、奈良時代末から平安時代前半の掘立柱建物や井戸などが検出された。また、大川上遺跡(19)からは、「神宮寺」の墨書が施された土師器杯が出土し、９世紀後半に伊勢神宮寺が所在していた可能性が考えられている。[24] 同遺跡内に隣接して延喜式内社「神山神社」が存在している。[25]

(4) 鎌倉・室町時代

鎌倉・室町時代になると多数の遺跡が見つかっている。当遺跡周辺でも櫛田川の流れが安定したためか、多数の遺構や遺物が確認されている。

古川遺跡では、鎌倉時代の掘立柱建物１棟や石組み井戸４基などが検出されている。また、横地西ノ垣内遺跡からは、鎌倉時代の掘立柱建物１棟や溝・土坑などが検出され、土師器甕や山茶椀などが出土した。中の坊遺跡では、室町時代の土塁や区画溝と考えられる大溝２条と井戸２基などが確認され、有力階層の屋敷跡の存在が推定されている。横地高畑遺跡からは、室町時代の掘立柱建物２棟や石組み井戸１基などが検出された。

櫛田川左岸でも多くの遺跡が確認されている。

櫛田遺跡群の池ノ端地区からは室町時代の遺構として土坑墓や溝、竈などが検出された。主な遺物は土師器皿や土師器鍋、蔵骨器などである。また、かん志ゆう地区では、鎌倉時代の掘立柱建物や溝が検出された。[26]

山添遺跡(20)では、鎌倉・室町時代の掘立柱建物や石積み井戸などが検出され、中世集落跡と考えられている。出土遺物は、土師器皿・鍋や常滑産の鉢・甕などの日常雑器類が大半を占めている。[27]

当地域における中世の遺跡で検出される井戸については、石組み井戸が主体になると言われている。[28] 今後は、当地域における石組み井戸工人の存在など、別の視点での検討も必要であろう。

山添遺跡の南西方の丘陵上には、興国３年（1342）に落城するまで南朝側の重要な軍事的拠点として機能を果たした、神山城跡(21)がある。[29]

以上のように、古轡通りＢ遺跡・古轡通り古墳群周辺の遺跡を概観してきた。古墳時代と中世（平安時代末～室町時代）を中心に人々の生活の痕跡が数多く確認されている。

今後の調査により、さらに当地域の歴史が解明されていくことを期待する。　　（田上　稔）

［註］

① 松阪市史編纂委員会『松阪市史』第１巻史料編自然（1977年）の267頁。

② 池辺　彌『和名類聚抄郡郷里驛名考證』（吉川弘文館、1981年）の293頁。

③ 水野章二「大国・川合荘」（『講座　日本荘園史６　北陸地方の荘園・近畿地方の荘園Ⅰ』、吉川弘文館、1993年）。

④ 三重県教育委員会『伊勢街道一歴史の道調査報告書』（1986年）の101頁～102頁。

⑤ 山澤義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』（明和町教育委員会、1971年）。
　田村陽一・浅尾　悟・宮田勝功「金剛坂遺跡」（『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』、三重県教育委員会、1985年）。
　萩原義彦・川崎志乃『金剛坂遺跡〔第４次〕・辰ノ口古墳群〔第２次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）。

⑥ 中野敦夫「寺垣内遺跡発掘調査概要」（『第６回三重県埋蔵文化財発掘調査報告会』資料、1985年）。

⑦ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報』（1999年）の13頁。

⑧ 宇河雅之「北ノ垣内遺跡」（『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・柳辻遺跡・大蓮寺遺跡・北ノ垣内遺跡』、三重県埋蔵文化財センター、1996年）。

⑨ 奥野実『琵琶垣内遺跡〔第２次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）。

⑩ 以下、中の坊遺跡については、下記の文献による。
　伊藤裕之『中の坊遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。

⑪ 以下、古川遺跡については、下記の文献による。
　伊藤裕之『古川遺跡・山口遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。

⑫ 以下、横地高畑遺跡については、下記の文献による。
　中川明『横地高畑遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）。

⑬ 西出　孝『コドノＡ遺跡・コドノＢ遺跡〔第１次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）。

⑭ 下村登良男『神前山１号墳発掘調査報告』（明和町教育委員会、1973年）。

⑮ 下村登良男「河田古墳群周辺の古墳分布」（『河田古墳群発

掘調査報告Ⅲ』、多気町教育委員会、1986年)。

⑯　前掲⑮と同じ。

⑰　宇河雅之「瀬干遺跡」(『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・柳辻遺跡・大蓮寺遺跡・北ノ垣内遺跡』、三重県埋蔵文化財センター、1996年)。原田恵理子『瀬干遺跡〔第２次〕発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、2000年)。

⑱　以下、琵琶垣内遺跡については、下記の文献による。
　野原宏司「閑浄寺遺跡発掘調査現地説明会資料」(三重県教育委員会、1987年)。

⑲　松阪市史編纂委員会『松阪市史』第２巻　史料編・考古(1978年)の381頁～383頁。

⑳　福田哲也『山添２号墳発掘調査報告書』(松阪市教育委員会、1998年)。

㉑　以下、横地西ノ垣内遺跡については、下記の文献による。
　大川　操『横地西ノ垣内遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1999年)。

㉒　三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報８』(1997年)の62頁。

㉓　松阪市史編纂委員会『松阪市史』別巻　松阪地図集成(1977年)の116番。

㉔　柴山圭子『大川上遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1999年)。

㉕　小林裕八「神山神社」(『武内社調査報告』第６巻、皇學館大学出版部、1990年)。

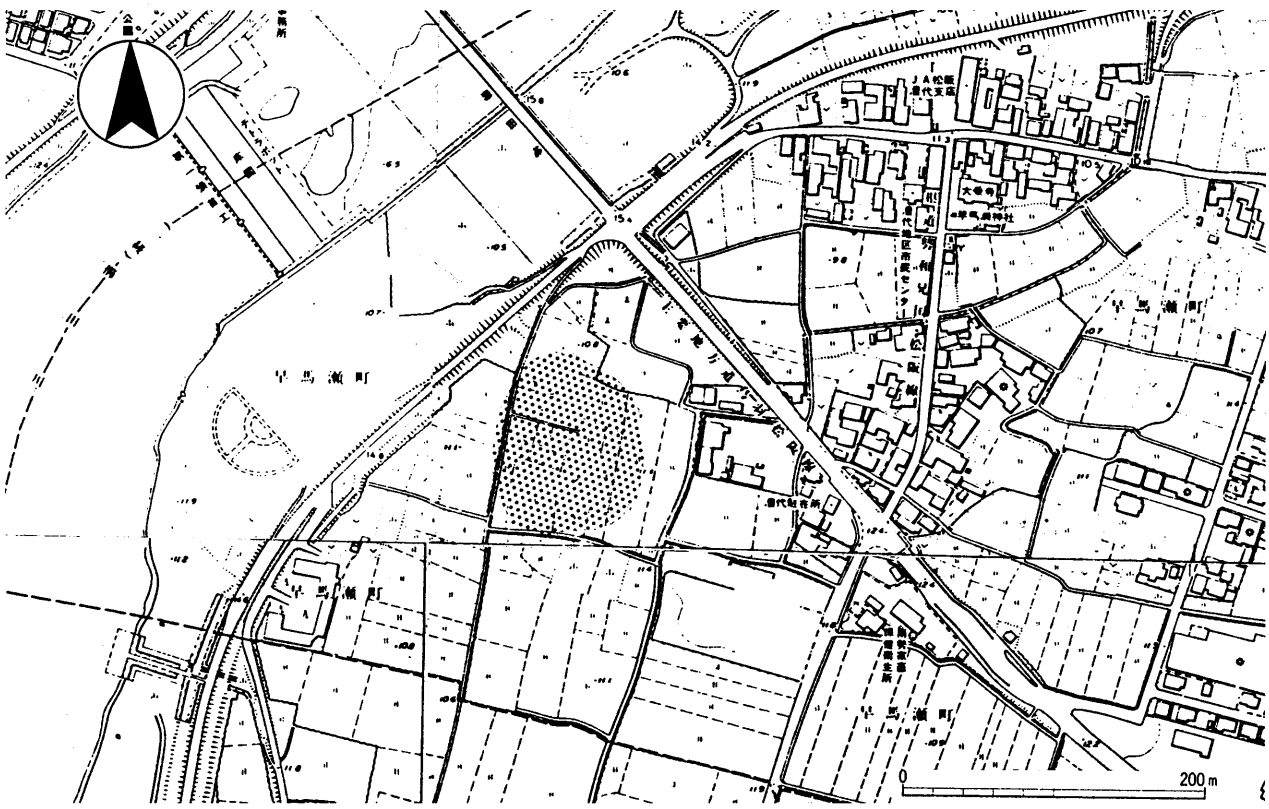
㉖　木野本和之・高田恵理子『櫛田地区内遺跡群発掘調査報告Ⅱ』(三重県埋蔵文化財センター、1997年)。

㉗　新田　洋『山添遺跡発掘調査報告』(三重県教育委員会、1979年)。坂倉一光「山添遺跡〔第２次〕」『山添遺跡〔第２次〕・里中遺跡ほか』(三重県埋蔵文化財センター、1997年)。

㉘　水谷　豊「石組井戸と木組井戸－三重県内の資料から見たその使い分け－」(『研究紀要』第８号、三重県埋蔵文化財センター、1999年)。

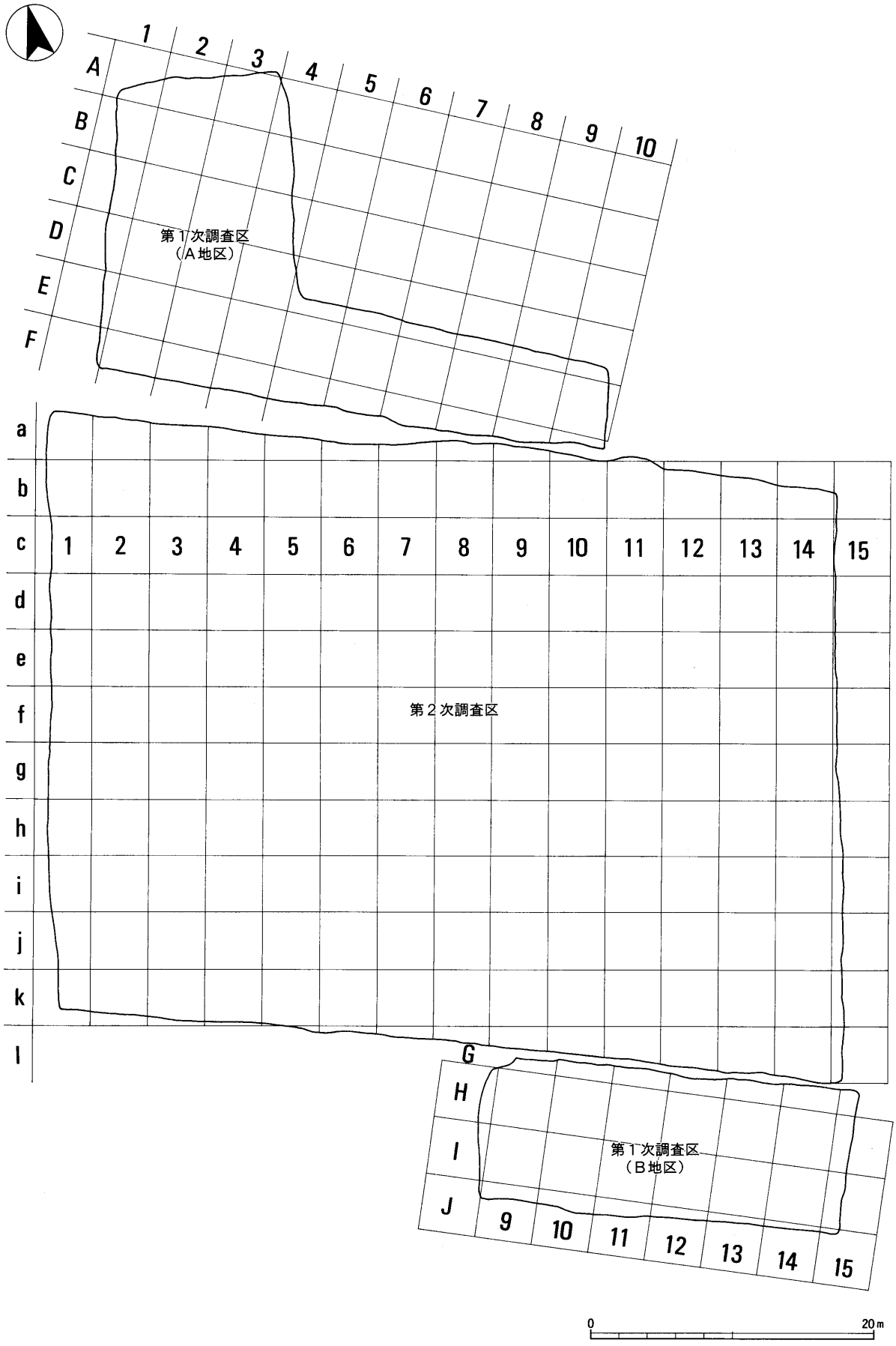
㉙　『日本城郭体系10、三重・奈良・和歌山』(新人物往来社、1980年)の149頁～150頁。

第１図　遺跡位置図（１：50,000　国土地理院『松阪』『国東山』１：25,000から）

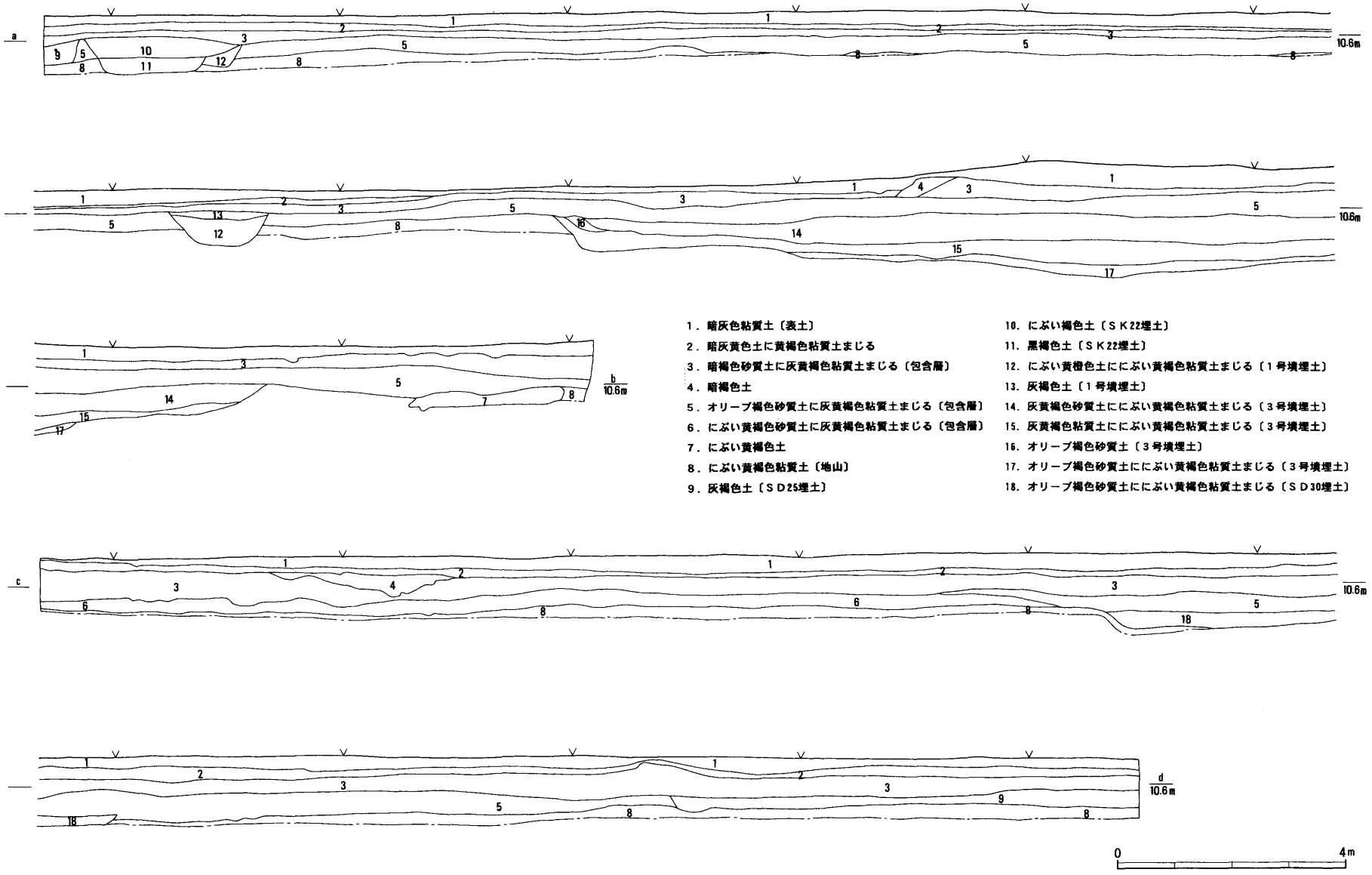


第２図　遺跡地形図（１：5,000）

第３図　調査区位置図（１：2,000）〔■ 試掘坑〕



第４図　調査区地区割図（１：400）



1．暗灰色粘質土〔表土〕
2．暗灰黄色土に黄褐色粘質土まじる
3．暗褐色砂質土に灰黄褐色粘質土まじる〔包含層〕
4．暗褐色土
5．オリーブ褐色砂質土に灰黄褐色粘質土まじる〔包含層〕
6．にぶい黄褐色砂質土に灰黄褐色粘質土まじる〔包含層〕
7．にぶい黄褐色土
8．にぶい黄褐色粘質土〔地山〕
9．灰褐色土〔ＳＤ25埋土〕
10．にぶい褐色土〔ＳＫ22埋土〕
11．黒褐色土〔ＳＫ22埋土〕
12．にぶい黄橙色土ににぶい黄褐色粘質土まじる〔１号墳埋土〕
13．灰褐色土〔１号墳埋土〕
14．灰黄褐色砂質土ににぶい黄褐色粘質土まじる〔３号墳埋土〕
15．灰黄褐色粘質土ににぶい黄褐色粘質土まじる〔３号墳埋土〕
16．オリーブ褐色砂質土〔３号墳埋土〕
17．オリーブ褐色砂質土ににぶい黄褐色粘質土まじる〔３号墳埋土〕
18．オリーブ褐色砂質土ににぶい黄褐色粘質土まじる〔ＳＤ30埋土〕

第５図　調査区土層断面図（１：100）

第6図　調査区平面図（1：200）

〈溝〉

遺構名	位　　置	上面規模（m）	深 さ(m)	時　　期	備　　考
ＳＤ13	Ｈ・Ｉ・Ｊ10 ｅ～ｌ・11～14	幅0.8～3.0	0.5～0.9	古墳後期	
ＳＤ25	ａ～ｃ・１	幅0.4以上～1.2以上	0.1	古墳後期	西方は調査区外に続く １号墳を切る
ＳＤ30	ｆ～ｋ・１	幅0.8～1.5	0.3～0.4	室町前期	北方は調査区外に続く
ＳＤ38	ｋ２	幅0.6～1.0	0.1～0.3	古墳後期	南方は調査区外に続く
ＳＤ39	ｊ７・８	幅0.8～1.8	0.3～0.7	古墳後期	２号墳に切られる
ＳＤ41	ｈ６・７	幅0.2～0.3	0.2	古墳後期	ＳＫ35に切られる

〈土坑〉

遺構名	位　　置	平面形	上面規模（m）	深 さ(m)	時　　期	備　　考
ＳＫ１	Ｄ・Ｅ９	楕円形	長径2.6、短径0.6	0.2	平安末期	ロクロ土師器の廃棄土坑
ＳＫ15	Ｈ９・10	楕円形	長径1.1以上、短径0.8	0.2	室町前期	北方は調査区外に続く
ＳＫ17	H12・13	楕円形	長径1.3、短径1.0	0.3	古墳後期	
ＳＫ18	Ｉ14	楕円形	長径2.2、短径0.7	0.1	古墳中期	廃棄土坑
ＳＫ19	H13	楕円形	長径1.2、短径0.6	0.2	古墳後期	pit6に切られる
ＳＫ20	Ｉ11	楕円形	長径0.7、短径0.6	0.1	古墳後期	
ＳＫ21	Ｉ11	楕円形	長径0.9、短径0.4	0.2	古墳後期	
ＳＫ22	ａ１	楕円形	長径2.0、短径1.0以上	0.1	古墳後期	北方は調査区外に続く
ＳＫ26	d6・e6	楕円形	長径2.3、短径0.8	0.2	鎌倉前期	
ＳＫ27	ｅ７	楕円形	長径1.7、短径1.4	0.4	古墳後期	廃棄土坑
ＳＫ29	ａ５	楕円形	長径0.7、短径0.5	0.2	古墳後期	
ＳＫ31	ｇ７	円　形	径1.0	0.3	古墳後期	
ＳＫ32	ｆ７	楕円形	長径1.6、短径0.7	0.2	鎌倉前期	
ＳＫ33	ｈ７	楕円形	長径0.7、短径0.5	0.3	古墳前期	
ＳＫ34	ｇ７	不定形	長径1.7、短径1.0	0.4	古墳後期	
ＳＫ35	ｉ７・８	不定形	長径3.5、短径1.8	0.3	室町前期	ＳＤ41を切る
ＳＫ37	ｋ３	楕円形	長径1.3、短径1.2	0.3	古墳後期	
ＳＫ40	ｉ８	円　形	径0.8	0.3	古墳後期	
ＳＫ44	ｄ12	楕円形	長径1.5、短径1.2	0.4	古墳後期	
ＳＫ45	ｆ14	楕円形	長径1.1、短径0.4	0.3	古墳後期	
ＳＫ47	ｈ11	楕円形	長径1.2、短径0.7	0.2	古墳後期	
ＳＫ49	ｈ13	楕円形	長径1.6、短径1.0	0.5	古墳後期	
ＳＫ50	ｉ10	不定形	長径2.3、短径1.9	0.8	鎌倉後期	
ＳＫ52	ｆ10	楕円形	長径1.5、短径1.0	0.5	古墳前期	ＳＥ53上で重複して検出

第１表　溝・土坑一覧表

Ⅲ　基本層序と遺構

1　基本層序

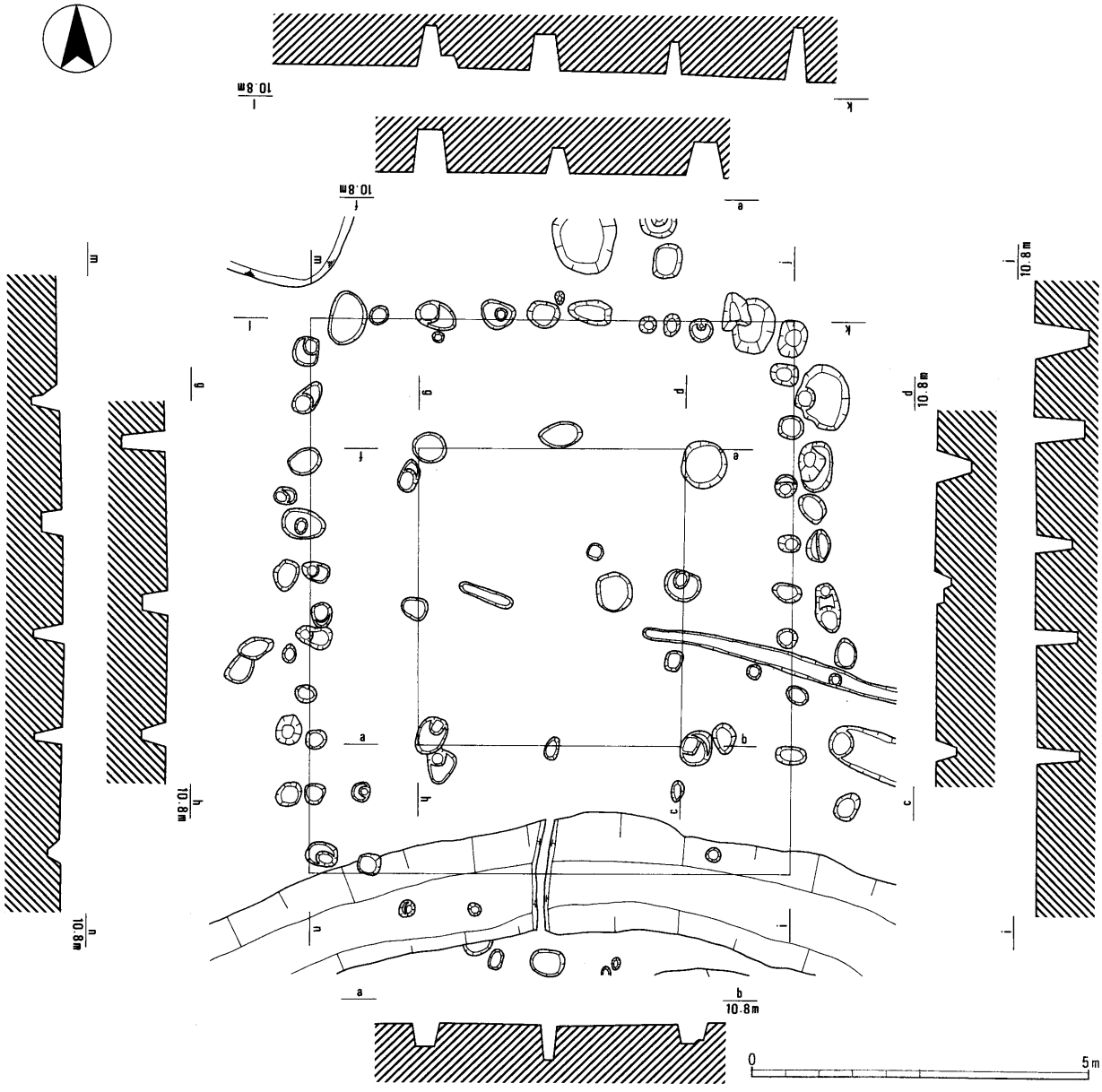
基本層序は、上から第１層：暗灰色粘質土〔表土〕、第２層：暗灰黄色土に黄褐色粘質土まじる、第３層：暗褐色砂質土に灰黄褐色粘質土まじる〔包含層〕、第４層：オリーブ褐色砂質土に灰黄褐色粘質土まじる〔包含層〕・にぶい黄褐色砂質土に灰黄褐色粘質土まじる〔包含層〕、第５層：にぶい黄褐色粘質土〔地山〕となる。遺物包含層は第３層・第４層で、遺構検出面は第５層上面である。（第５図参照）。

2　遺　　構

調査で確認された遺構は、古墳時代と中世（平安時代末～室町時代）に大きくわけることができる。

以下、主な遺構について概述する。遺構の深さは全て検出面からの数値である。

なお、溝・土坑については、一覧表（第１表）も参照されたい。



第７図　ＳＢ42実測図（１：100）

(1) 古墳時代前期

A 掘立柱建物

ＳＢ42（第７・８図）　調査区西ほぼ中央部で検出した。２間×２間（4.4m×3.9m）の身舎の四面に、南北５間×東西４間（8.2m×7.1m）の庇が付く掘立柱建物であると考えられる。身舎と庇の柱筋は通らない。一応南北棟と考えられ、棟方向はＮ２°Ｅである。

柱間寸法については、柱痕跡が確認できなかったため、柱穴中央を基準として推定している。身舎では桁行が2.2mの等間となり、梁行も1.95mの等間となる。庇部分は桁行が北から1.6m＋1.7m＋1.4m＋1.7m＋1.8mとなる。また、梁行は西から1.7m＋1.7m＋1.9m＋1.8mとなる。側柱列と入側柱列の柱間は、桁行が1.6m、梁行が1.9mとなる。

柱穴が重複するので、３時期の建て替えの可能性がある。同じ建物の柱穴で、側柱列と入側柱列の柱間は南北面が1.9m・西面が1.9m・東面が1.6mの建て替え例も考えることができる。

身舎部分の柱穴は円形を呈するものが多く、径は0.4m～0.7mで、深さは径0.3m～0.7mである。また、庇部分の柱穴は楕円形を呈するものが多く、柱穴は径0.3m～0.6mで、深さは径0.2m～0.8mである。北西隅の９の柱穴は検出できなかった。

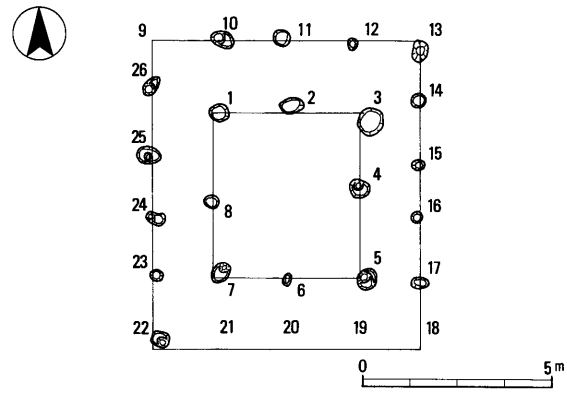
南方の18～21の柱穴は２号墳の周溝によって削平され、22の柱穴のみが残存している。柱穴の埋土は、暗褐色砂質土である。柱穴から出土した土器は、中世の土師器片や山茶椀の細片が微量混入していたが、古墳時代前期の土師器片が大多数を占める。17の柱穴からは、土師器高杯（３）が出土した。

後述するＳＥ53と有機的関係のある建物と考えることができる。

B 井戸

ＳＥ53（第９図）　調査区の東ほぼ中央部で検出した。掘削作業については、危険が伴うと判断したため、止むをえず重機による掘削作業に変更した。

掘形は楕円形を呈し、長径3.9m・短径3.1m・深さ3.5mの断面逆台形状である。埋土は３層に分けられる。上から暗褐色粘質土に小石がまじる・青灰色粘質土・青灰色粘質土に５cm大の小石がまじる。外径約0.7m・残存高0.5mの木製のくり抜きの井戸枠



第８図　ＳＢ42柱穴配置図（１：200）

(29) が、掘形のほぼ中央部の深さ約３mの所に残存していた。また、その周りにも方形を意識して組まれている縦板材 (28) が残存していた。それらは、腐食のため３つに分かれていた。

井戸枠内からは、遺存状態の良好な土師器の壷（４～20）や甕（21～26）・高杯（27）などがまとまって出土した。

先述したＳＢ42とセット関係にある井戸と考えられる。位置関係については、ＳＢ42の北東隅の庇部分の柱穴を基点とし、ＳＥ53のくり抜き井戸枠の中心部までを見てみると、ＳＢ42の北東方約16mのところに存在している。

C 土坑

ＳＫ52　ＳＥ53上で検出した。ＳＥ53を切っている。楕円形を呈し、規模は長径1.5m・短径1.0m・深さ0.5mである。土師器壷 (30) や甕片などが出土した。

(2) 古墳時代中期

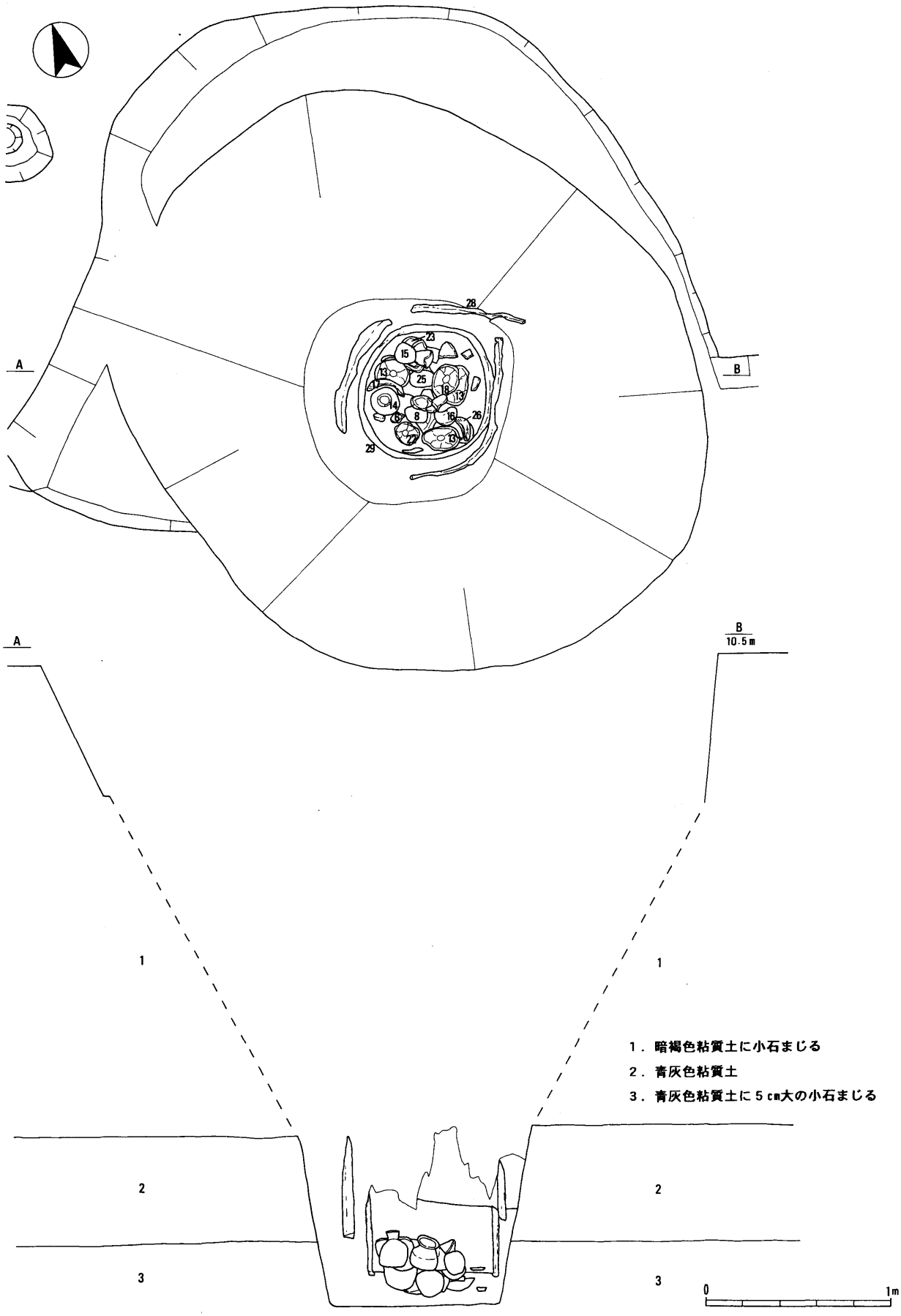
A 土坑

ＳＫ18（第10図）　調査区の南東端部で検出した。楕円形を呈し、規模は長径2.2m・短径0.7m・深さ0.1mである。土師器壷（42・43）や高杯（44～47）筒形土製品（48）などがまとまって出土した。

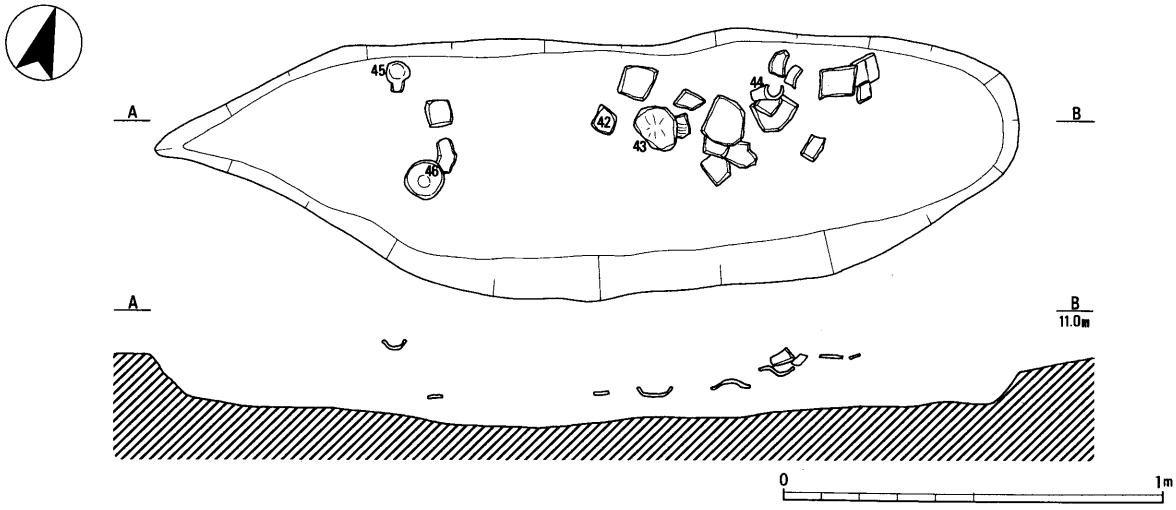
(3) 古墳時代後期

A 古墳

１号墳（第11図）　調査区の北部で周溝のみを検出した。周溝内側の下端を基底線とすると、墳丘規模は径約23mである。円墳である。周溝は、東側が幅約2.4m・深さ約0.3m、西側が幅約1.5m・深さ約0.2m、南側が幅約1.8m・深さ約0.3mである。東側と西側の周溝の一部は調査区外に続くと推定される。



第９図　ＳＥ53遺物出土状況図（１：30）



第10図　ＳＫ18土器出土状況図（１：20）

北方の周溝は削平により検出できなかった。埋土は、にぶい黄橙色土ににぶい黄褐色粘質土がまじる。

周溝からは須恵器の杯身（52）や杯蓋（53）・瑤（54）、土錘（55）、ガラス製小玉（56）などが出土した。

築造時期については、53が田辺昭三氏による陶邑編年のＴＫ10型式に、52・54がＴＫ43型式に並行するとみられ、６世紀後半と考えられる。①

なお、調査時は、ＳＤ３・４・５・ＳＸ23の遺構番号を付けて遺物を取り上げた。

２号墳（第12図）　調査区の中央南端部で周溝のみを検出した。周溝内側の下端を基底線とすると、墳丘規模は径約19mである。円墳である。周溝は、北側が幅約1.7m・深さ約0.5m、西側が幅約1.9m・深さ約0.6m、東側が幅約3.3m・深さ約0.5mである。周溝は、南方の調査区外に続くと推定される。埋土は基本的に３層に分けられる。上からにぶい黄褐色土にオリーブ褐色砂質土がまじる・灰黄褐色粘質土・灰黄褐色粘質土ににぶい黄橙色粘質土がまじる。

周溝からは、土師器の長胴甕（57・60）や甕（58・59・61）・高杯(62・63)、不明土製品(64)、土錘(65～67)、須恵器の甕（68～70）や杯蓋（71～73）・杯身（74）・高杯（75）などが出土した。

築造時期については、71・74がＴＫ10型式に、72・73はＴＫ43型式に並行するとみられ、６世紀後半と考えられる。

なお、調査時は、ＳＤ14・ＳＸ36の遺構番号を付けて遺物を取り上げた。

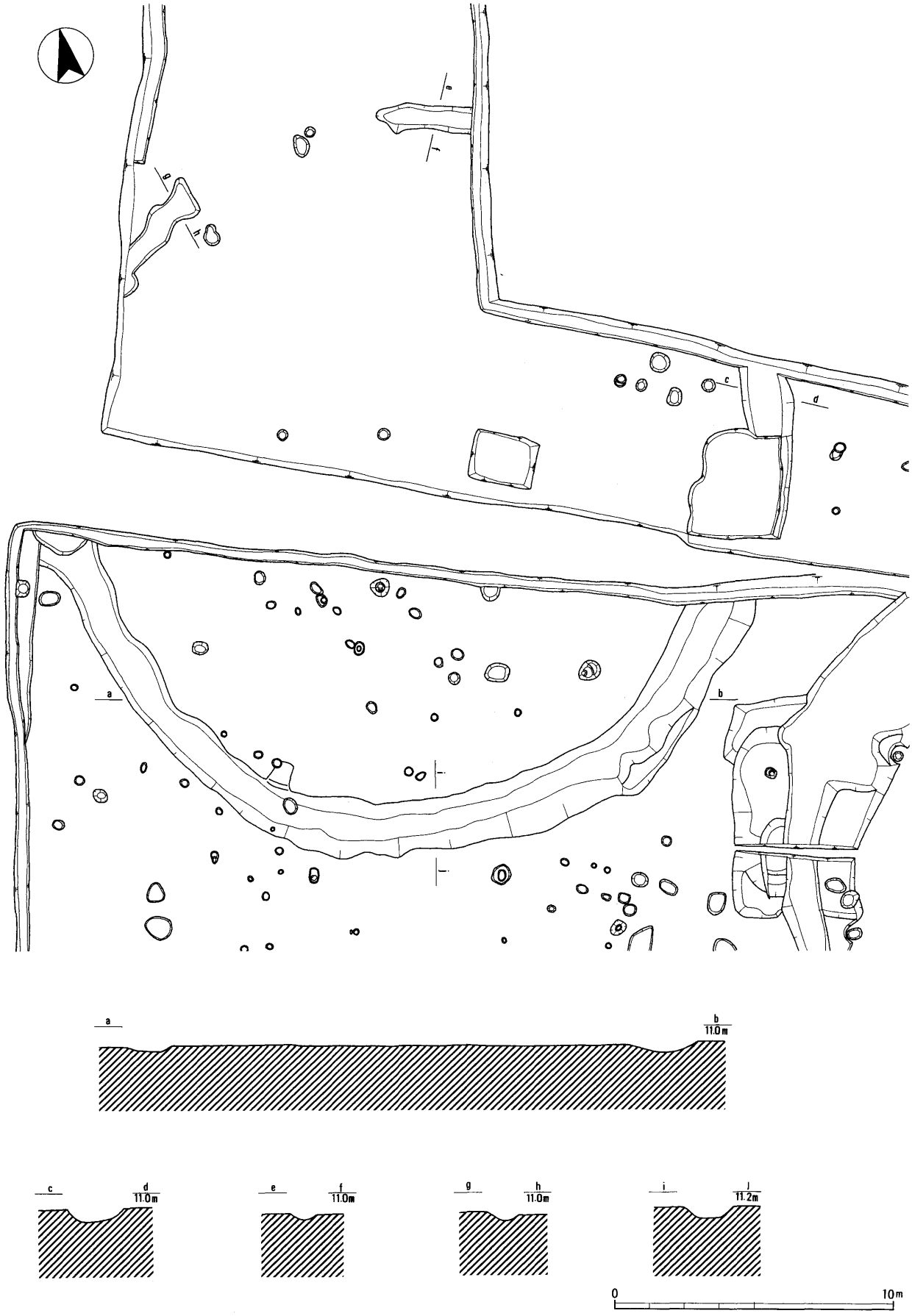
３号墳（第13図）　調査区の東部で周溝のみを検出した。周溝内側の下端を基底線とすると、墳丘規模は径約20mである。円墳である。また、周溝の北西方には張り出しがみられ、造り出しの可能性もある。周溝は、北側が幅約4.3m・深さ約0.5m、南側が幅約3.2m・深さ約0.8m、西側が幅約3.9m・深さ約0.7m、東側が幅約3.6m・深さ約0.9mである。東側の周溝の一部は調査区外に存在すると推定される。埋土は基本的に３層に分けられる。上から灰黄褐色砂質土ににぶい黄褐色粘質土がまじる・灰黄褐色粘質土ににぶい黄褐色粘質土がまじる・オリーブ褐色砂質土ににぶい黄褐色粘質土がまじる。

周溝からは、土師器の杯（76・77）や高杯（78～80）、土錘（81・82）、不明土製品（83）、須恵器の杯蓋（84）や杯身（85）・壷（86・87）・甕（88～90）、滑石製有孔円盤（91）などが出土した。

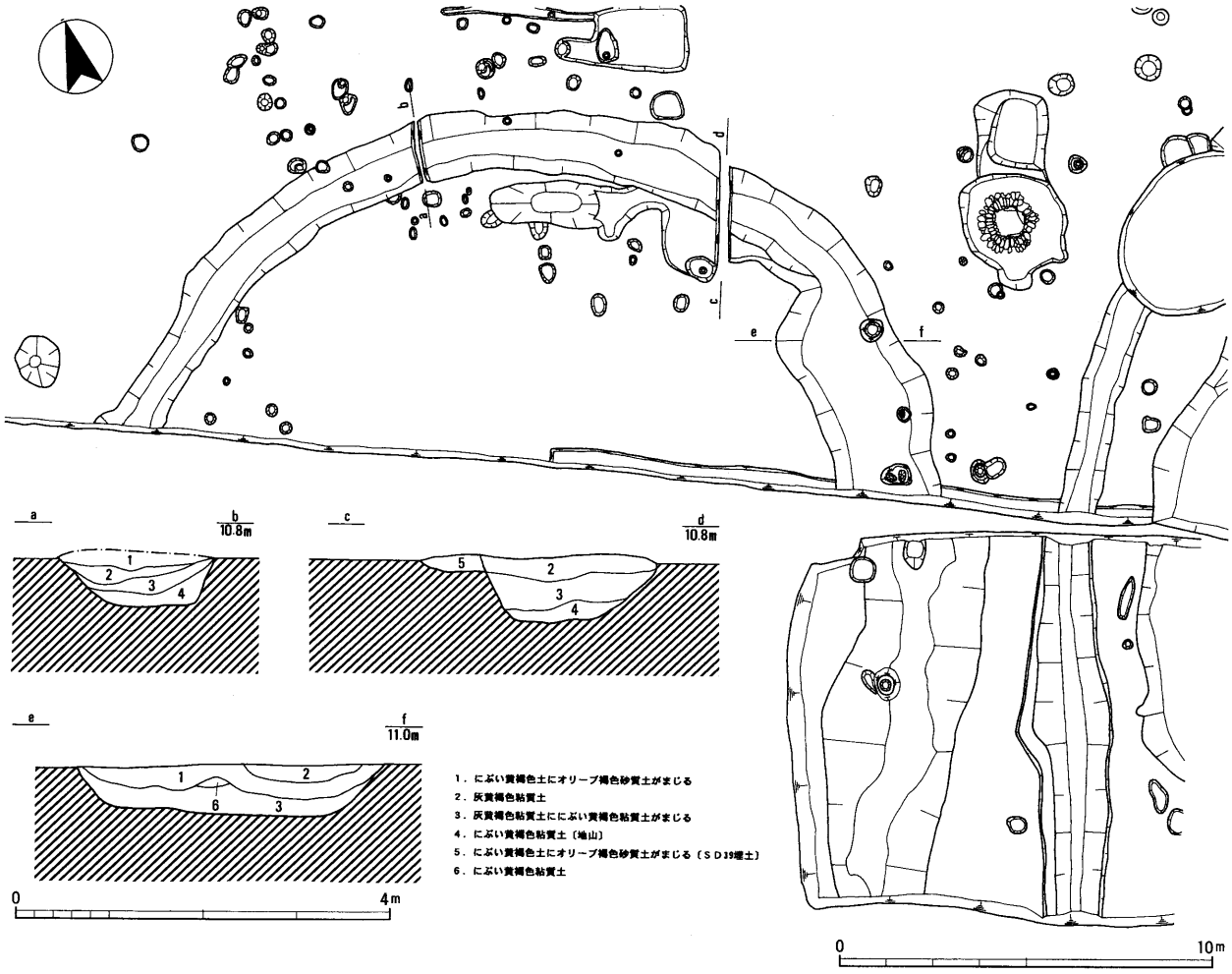
築造時期については、84～86がＴＫ10型式に並行するとみられ、88・89がＭＴ15型式に並行するとみられ、６世紀中頃と考えられる。

なお、調査時は、ＳＤ２・ＳＸ43の遺構番号を付けて遺物を取り上げた。

４号墳（第14図）　調査区の南部で周溝のみを検出した。周溝内側の下端を基底線とすると、一辺約15m以上の方墳と考えられる。周溝は、北側が幅約４m・深さ約0.8m、西側が幅約3.4m・深さ約0.7mである。



第11図　1号墳実測図（1：200）



第12図　２号墳実測図（１：200）**及び土層断面図**（１：80）

東側の周溝の一部と南側の周溝は調査区外に続くと推定される。埋土は基本的に３層に分けられる。上から灰黄褐色砂質土ににぶい黄褐色粘質土がまじる・灰黄褐色粘質土ににぶい黄褐色粘質土がまじる・オリーブ褐色砂質土ににぶい黄褐色粘質土がまじる。

周溝からは、土師器の高杯（92）や土錘（93・94）須恵器の高杯（95・98・99）や杯身（96）・甕（97）瑤（100）などが出土した。

築造時期については、96がＴＫ10型式に並行するとみられ、６世紀中頃と考えられる。

なお、調査時は、ＳＤ11・12・24・ＳＫ28・ＳＸ46の遺構番号を付けて遺物を取り上げた。

Ｂ　溝

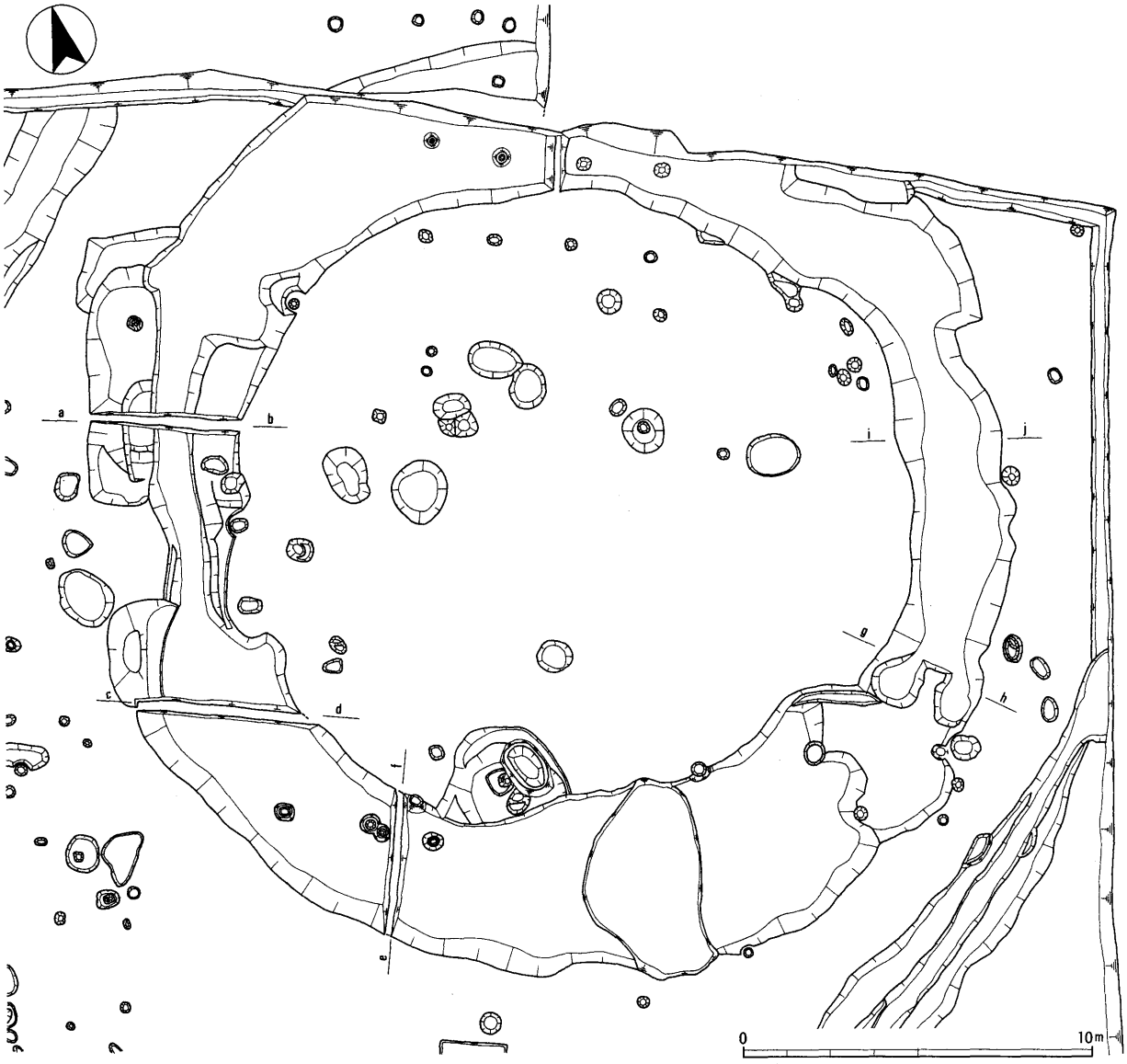
ＳＤ13　調査区の南部で検出した。北端部は幅0.8m・深さ0.6mで、ＳＫ49付近では幅３ｍ・深さ0.9mである。また、ＳＫ21の北西方では幅2.5m・深さ0.6mで、南端部は幅1.6m・深さ0.5mである。一部を除き、底部中央部はＵ字状にくぼみ、両側がテラス状になっている。南から東へ流れていたと考えられる。埋土は基本的に３層に分けられる。上から灰黄褐色粘質土ににぶい黄褐色粘質土がまじる・にぶい黄橙色粘質土ににぶい黄褐色粘質土がまじる・オリーブ褐色砂質土ににぶい黄褐色粘質土がまじる。土師器の長胴甕（101）や甕（102～104）・甑（105）・高杯（106）、不明土製品（107）、土錘（108・109）、須恵器の瑤（110）や杯蓋（111）・杯身（112）などが出土した。

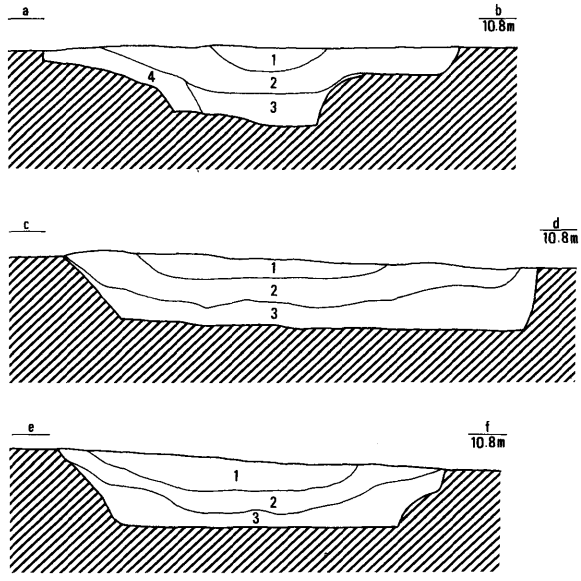
時期については、111・112がＴＫ43型式に並行するとみられ、６世紀後半と考えられる。

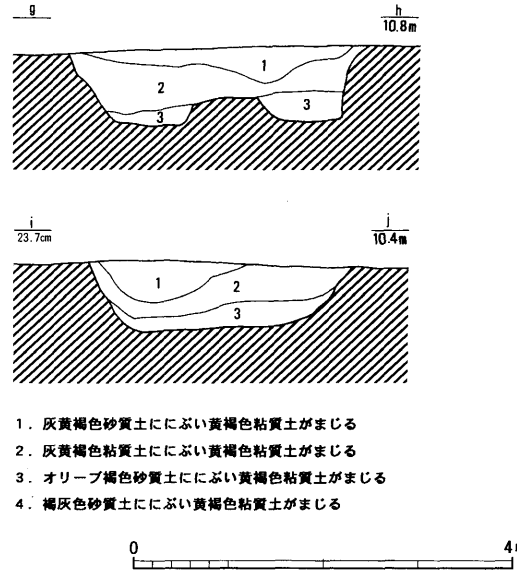
なお、一次調査はＳＤ13、二次調査ではＳＤ48の遺構番号を付けて遺物を取り上げた。

Ｃ　土坑

ＳＫ27（第14図）　調査区のほぼ中央部で検出した。楕円形を呈し、規模は長径1.7m・短径1.4m・深さ



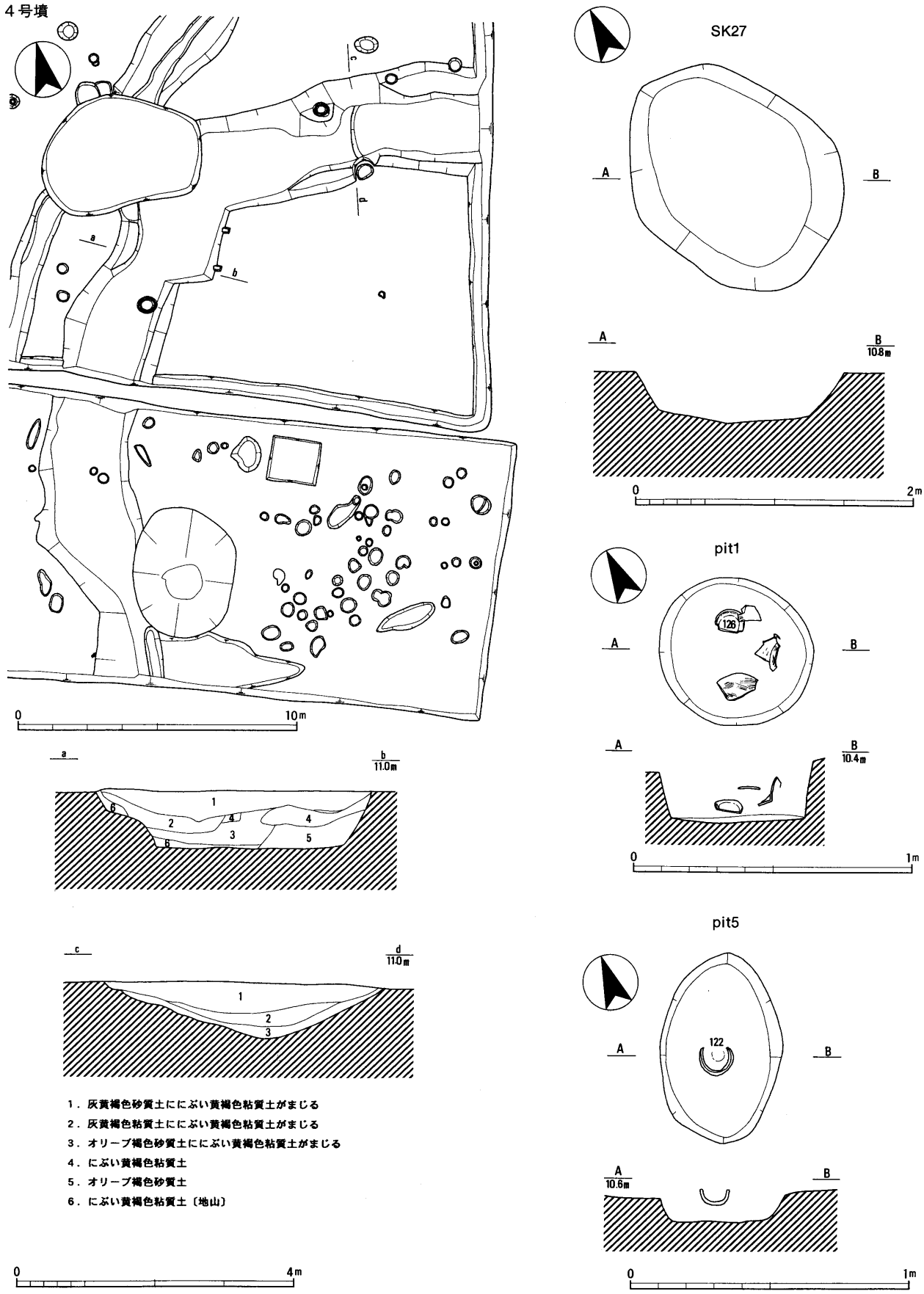




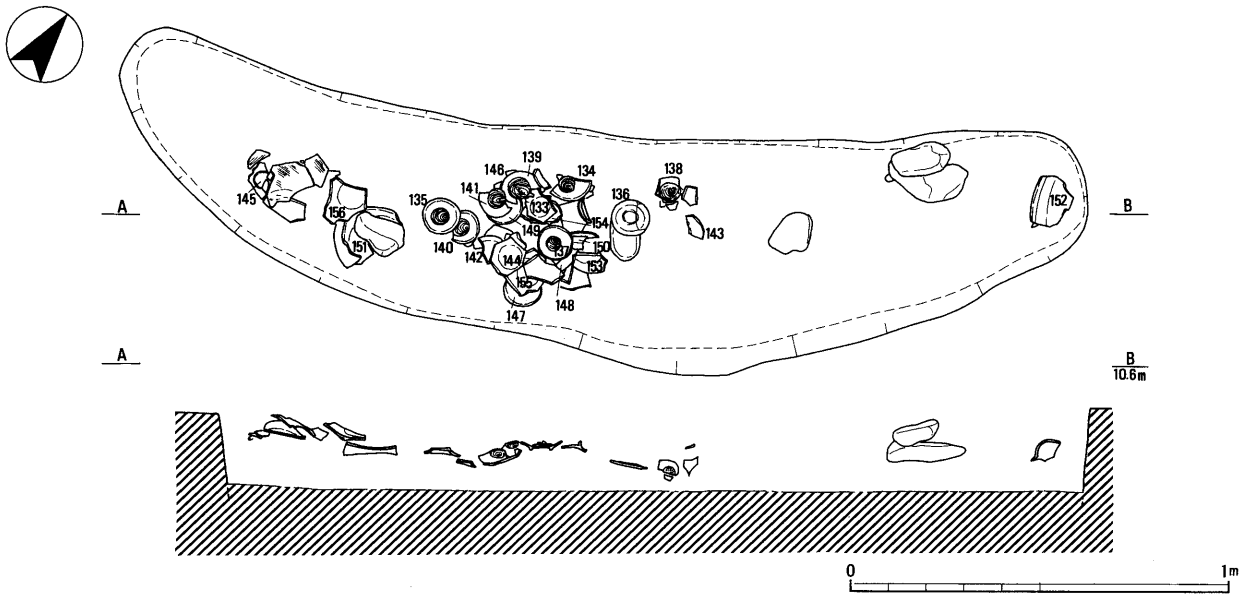
1．灰黄褐色砂質土ににぶい黄褐色粘質土がまじる
2．灰黄褐色粘質土ににぶい黄褐色粘質土がまじる
3．オリーブ褐色砂質土ににぶい黄褐色粘質土がまじる
4．褐灰色砂質土ににぶい黄褐色粘質土がまじる

0　4m

第13図　３号墳実測図（１：200）**及び土層断面図**（１：80）



第14図　4号墳実測図（1：200）**及び土層断面図**（1：80）**・SK27実測図**（1：40）**・pit1土器出土状況図**（1：20）**・pit5土器出土状況図**（1：20）



第15図　ＳＫ１土器出土状況図（１：20）

0.4mである。埋土は灰黄褐色粘質土である。

土師器の甕（113・114）や高杯（115）・杯（116）・壷（117）、土錘（118）、須恵器の杯身（119）や有蓋高杯（120）などがまとまって出土した。

時期は、119がＭＴ15型式に並行するとみられ、６世紀前半と考えられる。

ＳＫ31　調査区のほぼ中央部で検出した。円形を呈し、規模は径１ｍ・深さ0.3mである。この底部には径0.3m・深さ0.1mのくぼみがみられる。土師器杯（121）や須恵器片などが出土した。

ＳＫ37　調査区の南西端で検出した。楕円形を呈し、規模は長径1.3m・短径1.2m・深さ0.3mである。埋土は灰黄褐色粘質土である。土師器片や須恵器杯身（129）などが出土した。

時期は、129がＭＴ15型式に並行するとみられ、６世紀前半と考えられる。

Ｄ　小穴

pit 1（第14図）　調査区の北東端部で検出した。径0.5m・深さ0.3mである。古墳時代後期の須恵器有蓋高杯の蓋（126）が出土した。他に同時期のものと思われる土師器甕なども出土した。

pit 5（第14図）　調査区の南端部で検出した。径0.2m・深さ0.3mである。土師器鉢（122）が出土した。

(4)　平安時代

Ａ　土坑

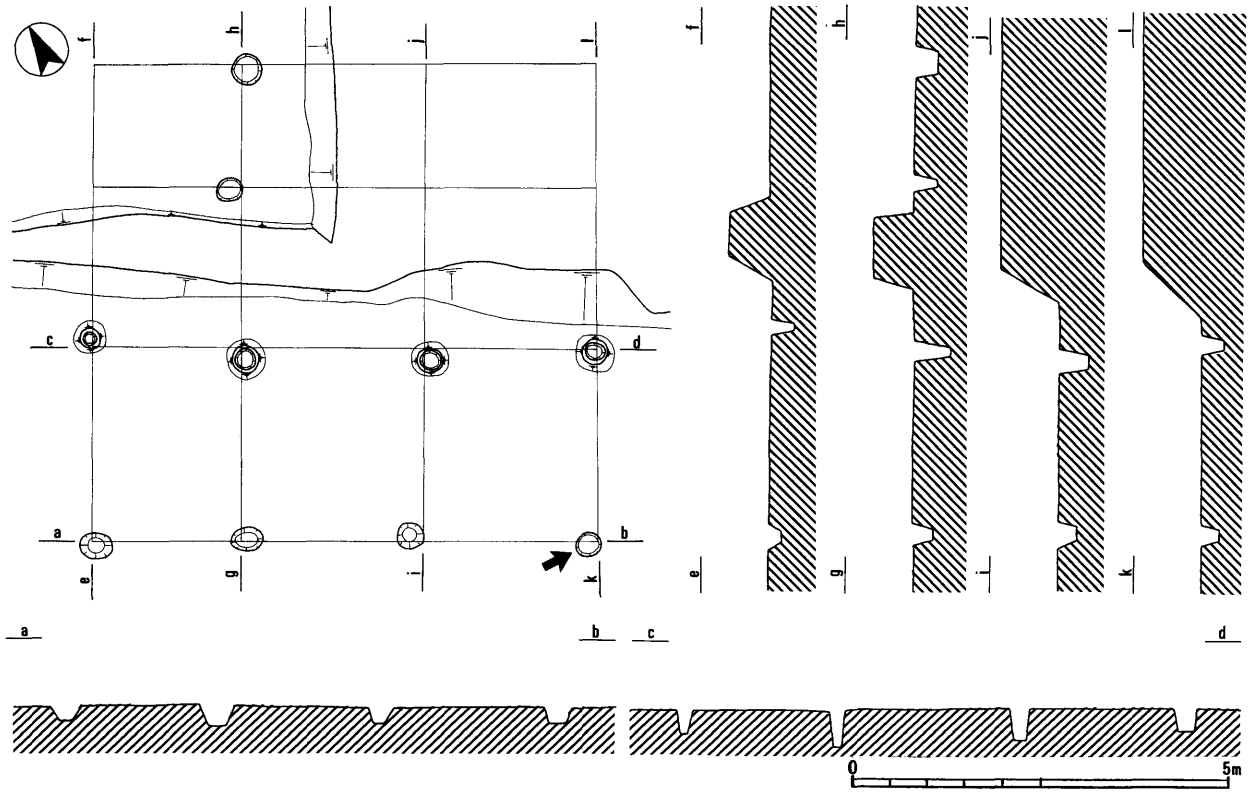
ＳＫ１（第15図）　調査区の中央部東端で検出した。楕円形を呈し、規模は長径2.6m・短径0.6m・深さ0.2mである。遺物は土師器の皿（149）や鍋（150～152）、ロクロ土師器の皿（133～142）や椀（143～146）・台付き皿（147・148）、山茶椀の小椀（153・154）や椀（155・156）がまとまって出土した。廃棄土坑と考えられる。ロクロ土師器皿が量的にも多数を占め、完形のものもいくつか存在した。山茶椀は割れた後、硯に転用されていた。

これらの遺物より、平安時代末期と考えられる。

(5)　鎌倉時代

Ａ　掘立柱建物

ＳＢ54（第16図）　調査区の東端部で検出した。桁行３間×梁行３間と推定される総柱の掘立柱建物である。棟方向は東で南に23度振れる東西棟である。建物としてまとまったのは３間×３間分であるが、３号墳の周溝上や調査区外などに未検出の柱穴が存在する可能性もあり、建物の規模が拡大する可能性もある。柱掘形は、径0.3～0.5m・深さ0.2～0.5mである。建物の規模は、桁行6.6m・梁行6.3mである。柱間寸法は桁間が西から1.95m＋2.4m＋2.25m、梁間が北から1.65m＋2.1m＋2.55mである。矢印の柱穴の掘形埋土から土師器小皿（179）が出土した。



第16図　ＳＢ54実測図（１：100）　水糸高は11.40m

Ｂ　井戸

ＳＥ16　調査区の南端部で検出した。円形の石組み井戸である。掘形は、楕円形で長径約4.5m・短径約3.6mである。深さ約0.8mまで掘り下げたが、危険であるため掘削を中止した。石組み部分の内径は約１mであった。検出面から約0.6mまでは石が崩れていた。それ以下は、きれいに石が組まれているのを確認した。井戸の埋土から山茶椀（164～167）が出土した。

Ｃ　土坑

ＳＫ32　調査区のぼぼ中央部で検出した。楕円形を呈し、規模は長径1.6m・短径0.7m・深さ0.2mである。土師器の皿（183）や山茶椀片などが出土した。

ＳＫ50　調査区の南東部で検出した。楕円形を呈し、規模は長径2.3m・短径1.9m・深さ0.8mである。土師器鍋（162）、山茶椀（163）などが出土した。

⑹　室町時代

Ａ　井戸

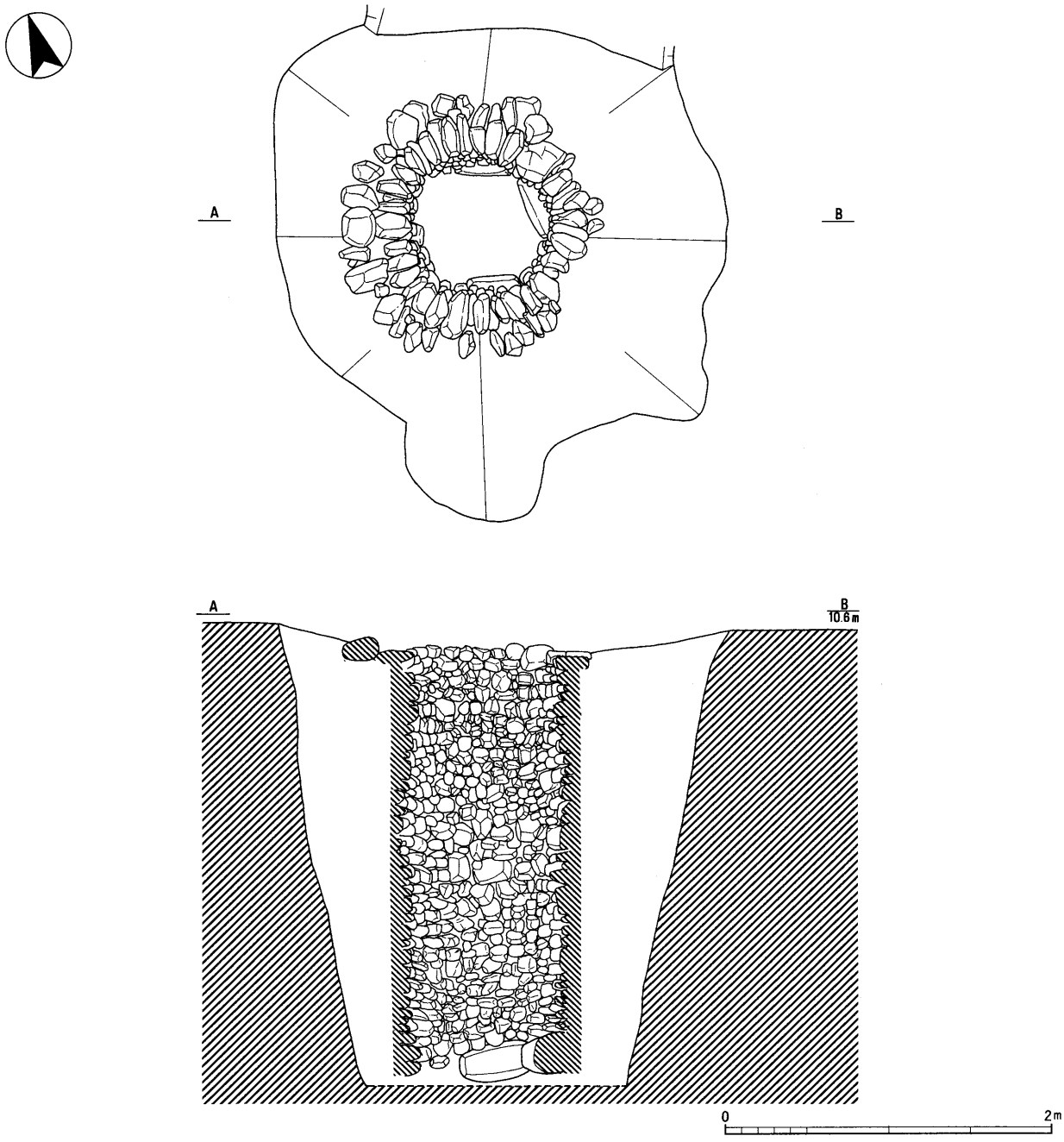
ＳＥ51（第17図）　調査区の南部で検出した。円形の石組み井戸である。掘形は、楕円形で長径約３m・短径約2.7m・深さ約2.9mである。埋土は灰黄褐色粘質土である。石組み部分の内径は約0.9mである。石組みは隙間なく、しっかりと組まれている。また、石の積み方は上部では円形であるが、底の方では方形を意識してつくられている。一番底には0.4m大の方形の石が３方向にすえられている。上部の石組みに使われている石は、長さ0.3m・幅0.1m・高さ0.1m程度の丸みをおびた川原石である。土師器の鍋（168～170）や羽釜（171）、天目茶椀（172）・緑釉小皿（173）などが出土した。

Ｂ　溝

ＳＤ30　調査区の西端部で検出した。北端部は幅0.8m・深さ0.4mで、南端部では幅0.9m・深さ0.3mである。また、一番幅広い部分は1.5m・深さ0.5mである。埋土は、オリーブ褐色砂質土ににぶい黄褐色粘質土がまじっていた。南から東へ流れていたと考えられる。土師器小皿（160・161）や山茶椀片、陶磁器片などが出土した。

Ｃ　土坑

ＳＫ15　調査区の南端中央部の２号墳の周溝上で検出し、周溝を切っている。楕円形を呈するものと考えられ、規模は長径1.1m以上・短径0.8m・深さ0.2m



第17図　ＳＥ51実測図（１：40）

である。土師器皿（181）が出土した。

ＳＫ35　調査区の南部で検出した。楕円形を呈し、規模は長径3.5m・短径1.8m・深さ0.3mである。底部には、長径0.9m・短径0.6m・深さ0.2mのくぼみがみられる。土師器小皿(174・175)や鍋(176・177)と常滑の大甕（178）などが出土した。

（奥野　実・坂倉一光）

〔註〕

① 以下、陶邑編年については、下記の文献による。
田辺昭三『須恵器大成』（角川書店、1981年）。

Ⅳ 遺　物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして120箱であった。これらの遺物は、古墳時代と中世（平安時代末期～室町時代）の２つの時期に大別できる。以下に特徴的な遺物について概略を述べる。個々の遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

(1) 縄文時代晩期の遺物（１・２）

１は無文帯の下に１帯の浮線網状文を配する。全体にヘラミガキされ、にぶい黄橙色を呈する。大洞Ａ式に相当すると考えられる。２は素文の突帯文土器である。

(2) 古墳時代前期の遺物

Ａ　ＳＢ42出土遺物（３）

柱穴からは多数の土師器の細片が出土しているが、図化できたものは１点のみである。土師器高杯（３）の脚部片で、三方透かしがみられる。

Ｂ　ＳＥ53出土遺物（４～29）

土師器の壷（４～20）や甕（21～26）・高杯（27）などがまとまって出土した。

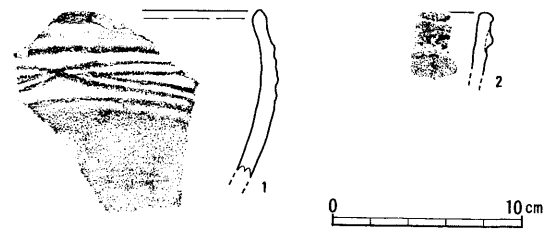
４～６は二重口縁壷である。４は、一次口縁部の上に短い二次口縁を作り出している。５の口縁端部は内側につまみ上げている。６は一次口縁部に面を持ち、その上に二次口縁を作り出している。突出する擬口縁をなしている。底部は平底で安定する。

７～11は広口壷である。７は口縁部が直線状にひらき、底部は凹底である。８は小形壷である。口縁部が直線状にひらき、丸底に近い平底だが安定する。９は口縁端部をつまみ上げ、体下半部をヘラケズリする。10は口縁端部が上に大きく拡張されている。11は口縁部に外斜面を持つ。

12・13は柳ヶ坪型壷である。12の口縁部内外面には羽状文が施されている。13は頸部から一次口縁がひろがる。

14～16は直口壷である。14は直口壷の口縁部が広くなったもので、底部は丸底で球体状を呈するため安定感がない。15・16は口縁部がやや直線状にひらき、底部は凹底で安定している。これらの直口壷の体部外面には、黒変がみられる。

17～20は壷の底部である。17・18は平底で安定している。19にはもみがら痕が見られる。20は平底である。



第18図　出土遺物実測図１（１：４）

21～23は布留式期の甕である。22・23は外弯気味だが端部のつまみ上げはなく、頸部はすぼまり、球形の体部をもつ。22の体部外面にはケズリ後ミガキが、内面はナデが施されている。23の体部外面にはケズリ後ミガキが、内面はハケメが施されている。

24～26はＳ字状口縁台付甕で、24・26は赤塚次郎氏による分類のＳ字甕Ｃ類に相当すると考えられる。[①] 25はＳ字甕Ｃ類新段階に相当すると考えられる。

27はＳＥ53から唯一出土した高杯の杯部片である。

28・29は井戸枠である。28は取り上げた板材の中で残りの良好なものである。腐食が激しいため、長さ50.0cm・幅52.0cmのみ残存していた。底部には直線刃による工具痕が見られる。29はくり抜き材である。外径70cm・厚さ4.0cmで、最大50.0cm残存していた。底部内側には、高さ3.0cm・厚さ5.0cmを帯状に削り出している。外面には直線刃による工具痕が残る。

Ｃ　ＳＫ52出土遺物（30）

土師器壷や甕片などが出土した。図化できたものは１点のみである。広口壷で、口縁部に面を持つ。

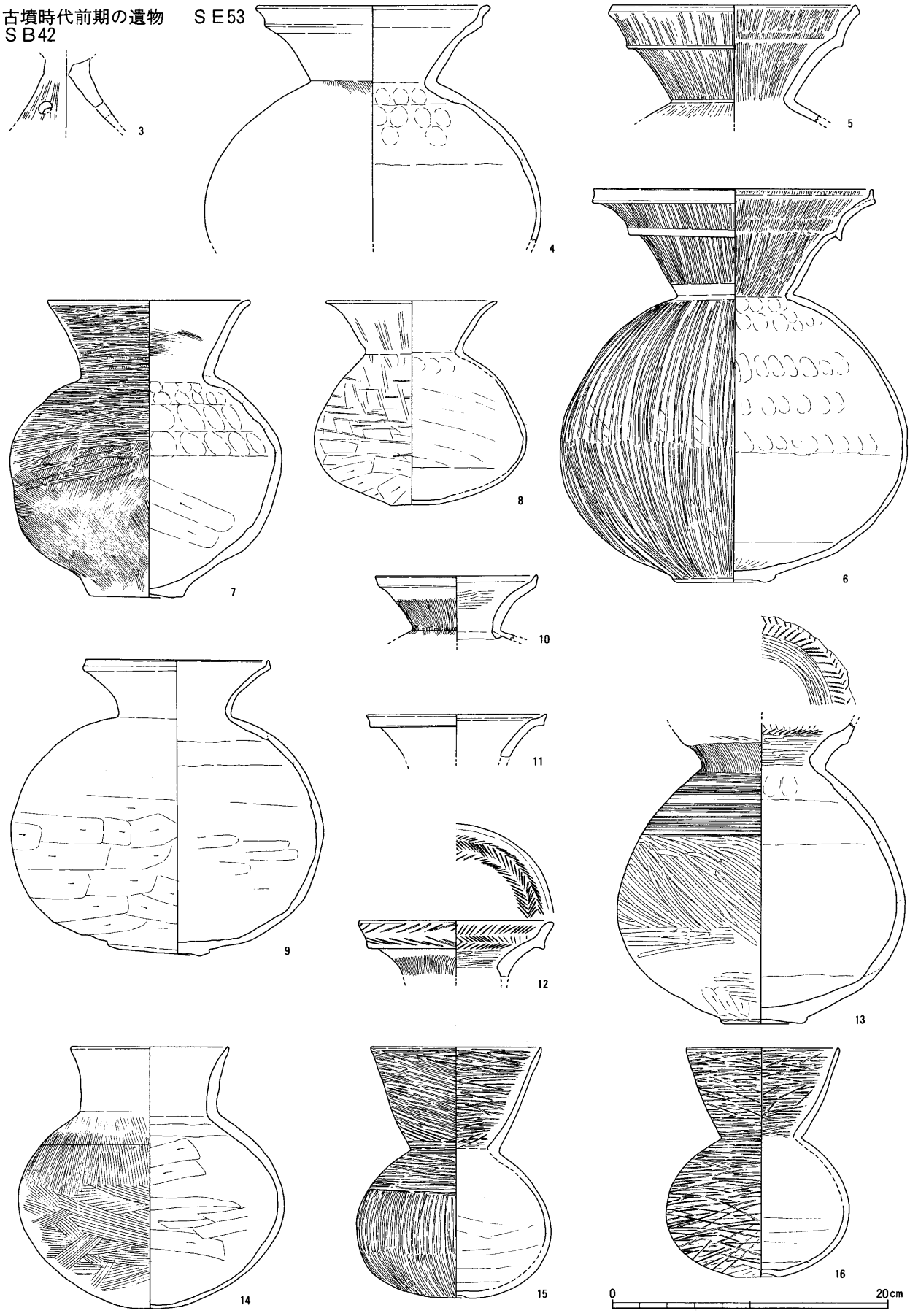
Ｄ　pit 出土遺物（33・40）

33は小形の土師器壷で、底部に焼成後穿孔がみられる。40は土師器鉢で、直線状にひらく口縁部をもつ。

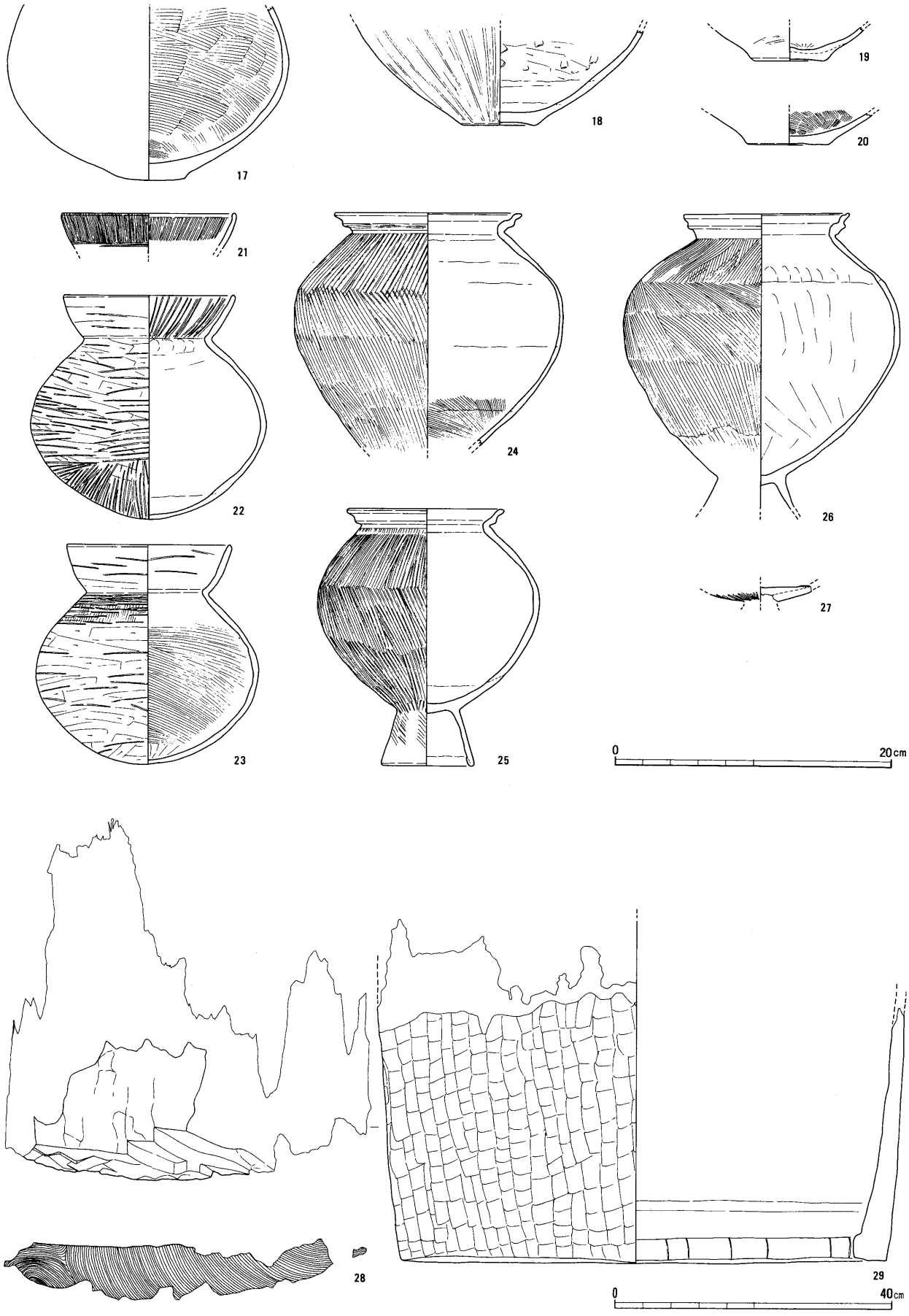
Ｅ　包含層などの出土遺物（31・32・34・35～39・41）

31・32・34は土師器壷である。31は柳ヶ坪型壷で、口縁部内外面に羽状文が施されている。32は口縁部

古墳時代前期の遺物　ＳＥ53
ＳＢ42

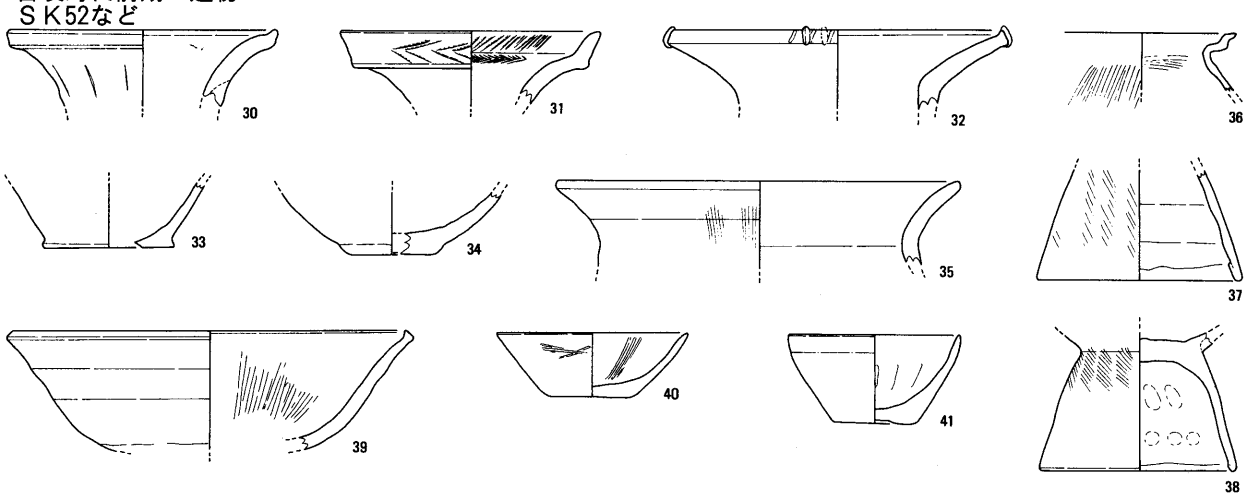


第19図　出土遺物実測図２（１：４）

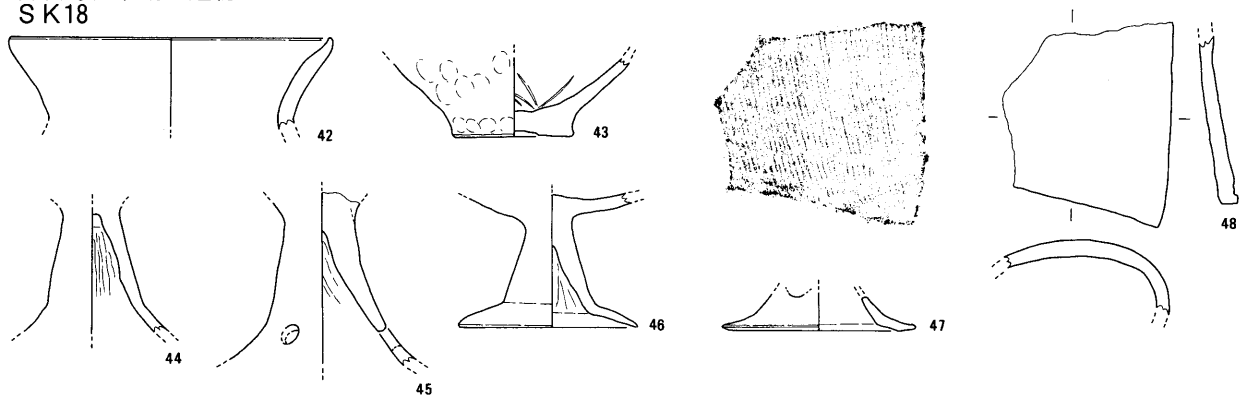


第20図　出土遺物実測図３（17～27は１：４、28・29は１：８）

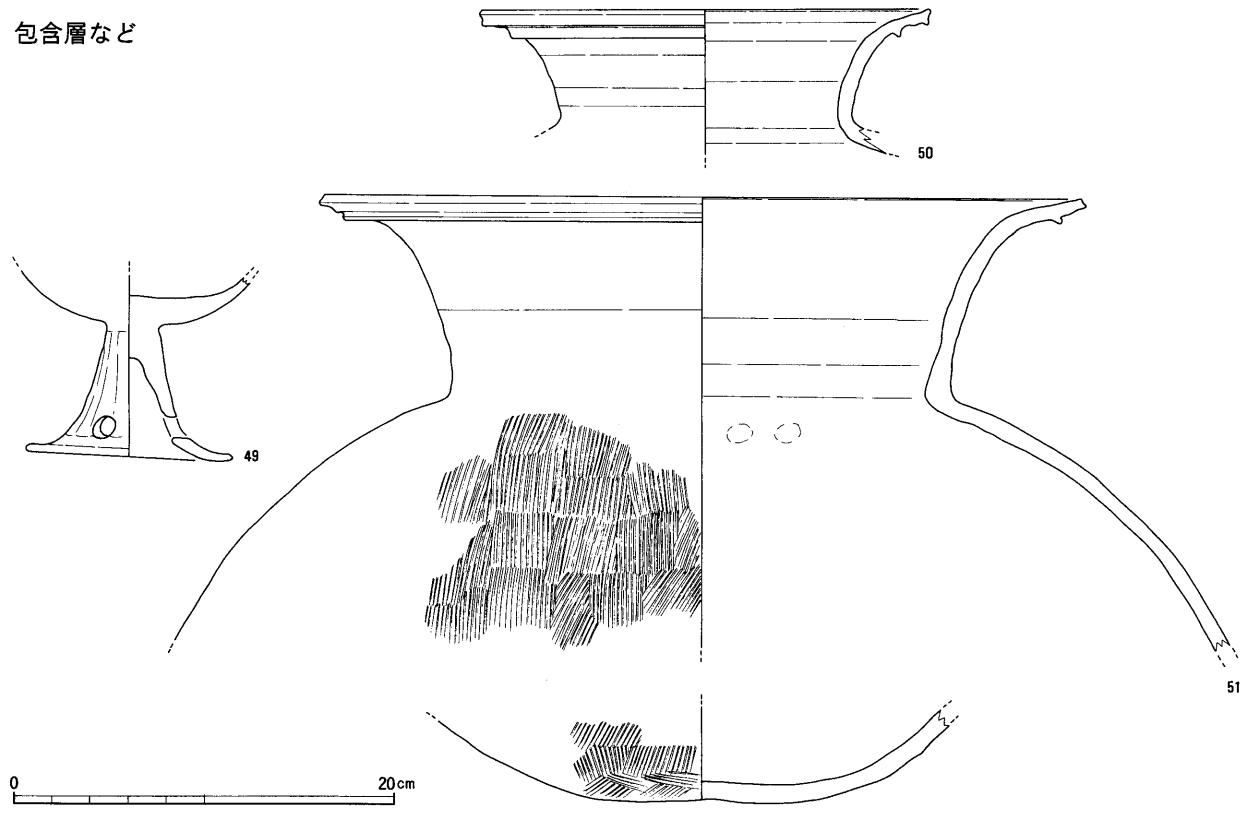
古墳時代前期の遺物
ＳＫ52など



古墳時代中期の遺物
ＳＫ18



包含層など



第21図　出土遺物実測図４（１：４）

に棒状浮文がみられ、内外面とも朱塗りが施されている。34は小形の壷である。

35は甕の口縁部で、内面から口縁端部にかけて横ナデが施されている。

36～38はＳ字状口縁台付甕である。36はＳ字甕Ｃ類に、37はＳ字甕Ｃ類新段階に、38はＳ字甕Ｂ類～Ｃ類古段階にそれぞれ相当すると考えられる。

39は土師器高杯で、杯部は内弯して大きくひらく。

41は土師器鉢で、直線状にひらく口縁部をもつ。

(3) 古墳時代中期の遺物

Ａ　ＳＫ18出土遺物（42～48）

土師器壷（42・43）・土師器高杯（44～47）・筒型土製品（48）などがまとまって出土した。

42・43は広口壷で、43の底部内面には工具痕がみられる。これらは古墳時代前期のもので、混入した遺物と考えられる。45には透かし孔がみられる。46は杯部の底部が平らで、脚部は直線的な柱状部を持つ。赤塚次郎氏による編年の松河戸Ⅱ式に相当すると考えられる[②]。44・47も同時期のものとみられる。48は、３cm単位で粘土ひもを積み上げて作ったものである。類例は、津市雲出島貫遺跡の第２次調査でも出土している[③]。

Ｂ　包含層などの出土遺物（49～51）

49は土師器高杯で、脚部は大きく緩やかな外反脚で、透かし孔がみられる。松河戸Ⅱ式に相当すると考えられる。

50・51は須恵器甕である。口縁部外面に非常にシャープな突帯をめぐらす。断面はセピア色である。51は大甕で、体部・底部外面に叩き痕が残る。体部・底部内面はナデられている。これらは、田辺昭三氏による陶邑編年のＴＫ216型式に相当すると考えられる[④]。同時期の須恵器が出土することは少なく、当遺跡の周辺では、松阪市大足遺跡でも出土している[⑤]。

(4) 古墳時代後期の遺物

Ａ　１号墳出土遺物（52～56）

須恵器（52～54）、土錘（55）、ガラス製小玉（56）などが出土した。

52の杯身・54の瓻はＴＫ43型式に、53の杯蓋はＴＫ10型式にそれぞれ並行すると考えられる。

55はやや中膨らみの管状のものである。

56はガラス製品で、１点のみの出土である。アルカリ石灰ガラス製で、コバルトで暗青灰の色をつけている。

Ｂ　２号墳出土遺物（57～75）

土師器（57～63）、不明土製品（64）、土錘（65～67）、須恵器（68～75）などが出土した。

57・60は長胴甕で、口縁部が外反してひらき、口縁端部が上方に突出するものである。58・59・61は甕で、口縁部は中ほどで肥厚し、端部がわずかに立ち上がる。62・63は高杯で、脚部が残存している。64は土師質で、外面にはハケメが施されている。65～67はやや中膨らみの管状のもので、一部破損している。

68～70は甕である。68は口縁部に波状文が施されている。70は大甕で、意図的に割られた様な小さな破片で出土した。71～73は杯蓋で、71はＴＫ10型式に、72・73はＴＫ43型式に並行すると考えられる。74の杯身はＴＫ10型式に並行すると考えられる。75は透かしを三方にもつ長脚二段高杯である。ＴＫ43型式に並行すると考えられる。

Ｃ　３号墳出土遺物（76～91）

土師器（76～80）、土錘（81・82）、不明土製品（83）、須恵器（84～90）、滑石製有孔円盤（91）などが出土した。

76・77は杯である。77の底部外面には、ヘラケズリが施されている。78～80は高杯である。78の外面はハケメ、79・80の外面には、ヨコナデによる調整がなされている。81・82はやや中膨らみの管状を呈し、81は径がやや太いものである。83は土師質で、底部は残存し、上部と左右は破損している。全長は不明である。

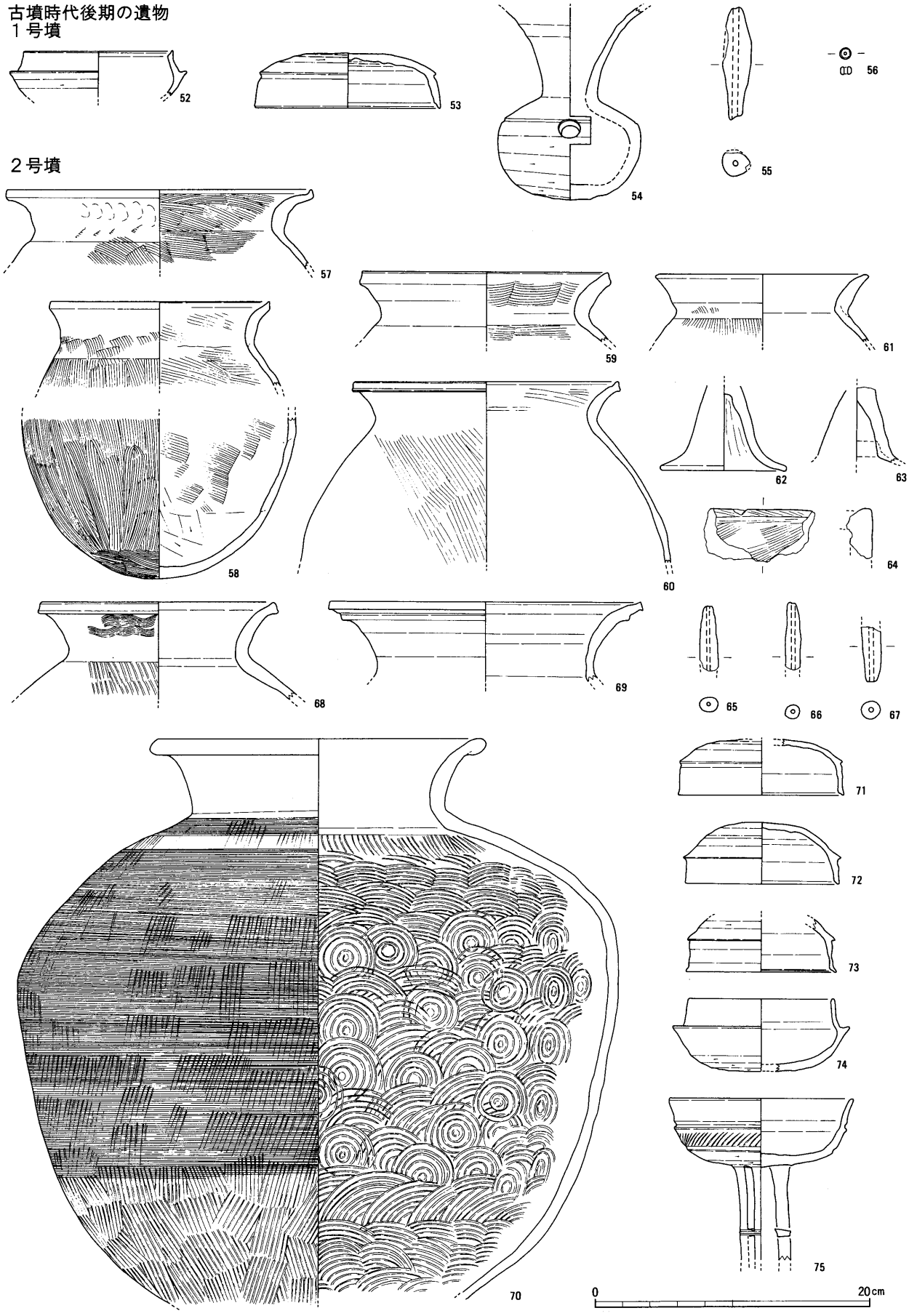
84の杯蓋・85の杯身は、ＴＫ10型式に並行すると考えられる。86の短頸壷もＴＫ10型式に並行すると考えられる。87の壷の口縁部には、波状文が施されている。88～90は甕である。88・89はＭＴ15型式に並行すると考えられる。90は大甕で、体部外面はタタキ、内面にはハケメが施されている。91は滑石製有孔円盤で、１点のみの出土である。直径約2.5cmをはかる。

Ｄ　４号墳出土遺物（92～100）

土師器（92）、土錘（93・94）、須恵器（95～100）などが出土した。

古墳時代後期の遺物
１号墳

２号墳



第22図　出土遺物実測図５（１：４）

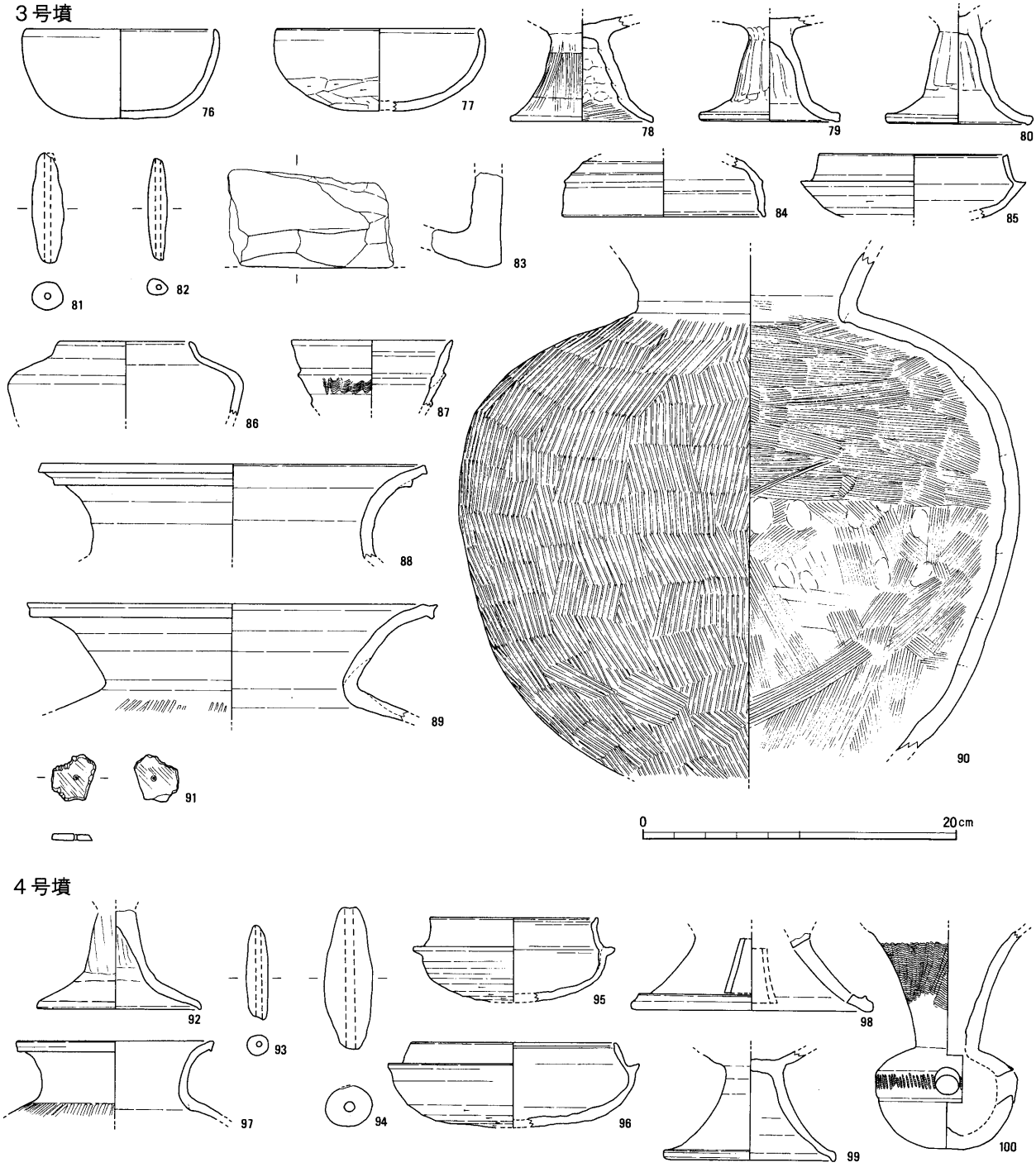
92の高杯は、ナデによる調整がなされている。93・94はやや中膨らみの管状のもので、93は径が太いものである。

95は有蓋高杯の杯部のみ残存している。96の杯身は、ＴＫ10型式に並行すると考えられる。97の甕は、タタキにより調整がされている。98は透かしを二方にもつ高杯である。99は有蓋高杯の脚部と考えられる。100の瓶の頸部外面上半には、波状文がみられる。

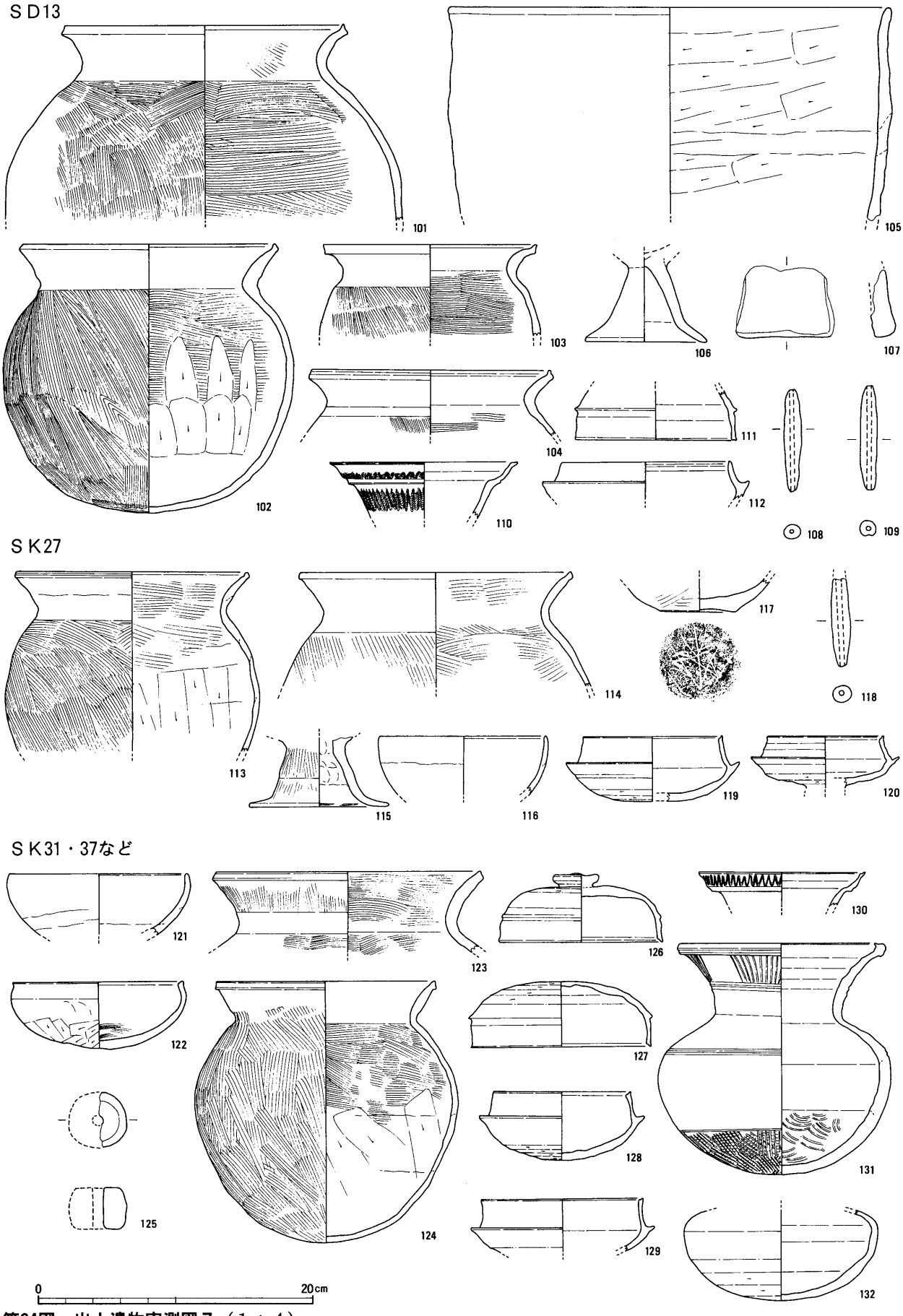
Ｅ　ＳＤ13出土遺物（101～112）

土師器(101～106)、不明土製品(107)、土錘(108・109)、須恵器（110～112）などが出土した。

101は長胴甕・102～104は甕である。これらは、口縁部が外反してひらき、口縁端部が上方に突出するものである。外面のハケメは細かい。102の内面下半には、ヘラケズリが施される。105の甑は、口縁部のみが残存している。106の高杯は、ナデによる調整が



第23図　出土遺物実測図６（１：４）



第24図　出土遺物実測図７（１：４）

施されている。107は土師質で、底部が残存している。外面はナデ、内面にはオサエが施されている。108・109はやや中膨らみの管状のものである。

110の瑤は、口縁部外面に波状文を施している。111の杯蓋・112の杯身は、ＴＫ43型式に並行すると考えられる。

Ｆ　ＳＫ27出土遺物（113～120）

土師器（113～117）、土錘（118）、須恵器（119・120）などがまとまって出土した。

113・114は甕で、口縁部は湾曲している。113の体部内面には、ヘラケズリが施されている。115の高杯は太めの脚部をもつ。116の杯には、器の成形時に生じた粘土のつなぎ痕跡がみられる。117の壷は、底部外面に木葉痕がある。

119の杯身は、ＭＴ15型式に並行すると考えられる。120は有蓋高杯で、杯部が残存している。

Ｇ　ＳＫ31出土遺物（121）

土師器片や須恵器片が出土した。図化できたものは１点のみである。土師器杯で、器の成形時に生じた粘土のつなぎ痕跡が確認できる。

Ｈ　ＳＫ37出土遺物（129）

土師器片や須恵器片が出土した。図化できたものは１点のみである。須恵器杯身で、ＭＴ15型式に並行すると考えられる。

Ｉ　pit 出土遺物（122・126）

122は土師器鉢で、古墳時代前期の小形鉢の流れを汲むものと考えられる。底部外面にはヘラケズリが施されている。126は須恵器有蓋高杯の蓋で、ＴＫ209型式に並行すると考えられる。

Ｊ　包含層などの出土遺物（123～125・127・128・130～132）

123・124は土師器甕で、口縁部は中ほどで肥厚し、端部がわずかに立ち上がる。124の体部内面下方には、ヘラケズリが施されている。125は土製紡錘車で、國下多美樹氏による分類のⅡｂ類に該当すると考えられる[6]。類例は、明和町北野遺跡の第１次調査でも出土している[7]。

127の須恵器杯蓋はＴＫ43型式に、128の須恵器杯身は、ＭＴ15型式に並行すると考えられる。130は須恵器壷で、口縁部外面に波状文が施される。131の須恵器広口壷・132の須恵器短頸壷は、ＭＴ85型式にそれぞれ並行すると考えられる。

(5)　奈良時代・平安時代の遺物

Ａ　ＳＫ１出土遺物（133～156）

土師器（149～152）、ロクロ土師器（133～148）、山茶椀（153～156）などがまとまって出土した。これらは平安時代末期のものと考えられる。

149は皿で、口縁部は底部の厚さに比べて若干肥厚し、口縁端部のみ横ナデが施される。150～152は鍋である。150・151の口縁端部は内側に折り返され、152の口縁端部はつまみ上げられている。

133～142は皿で、口径９～10cm程度の小皿である。これらの底部外面には糸切り痕が認められる。143～146は椀で、底部が残存している。147・148は台付皿で、口径９cm程度・器高３cm程度の小皿である。これらは、11世紀初頭に現れる灰釉陶器模倣のロクロ土師器の系譜上にあるものと言うことができる。

153・154は小椀で、藤澤編年の第４型式に当たる[8]。155・156は椀で、底部内面には墨痕が認められ、硯に転用されたと考えられる。藤澤編年の第４型式に該当する。

Ｂ　pit などの出土遺物（157～159）

157は土師器椀で、奈良時代のものと考えられる。158は土師器鍋で、口縁端部は内に折り返している。平安時代末期のものと考えられる。159は土製支脚である。上端幅4.4cm・残存高10.1cmで、底部は欠損している。成形は手ずくねで、全体に指頭圧痕が残り、他は不定方向にナデられている。体部は赤化している。類例は明和町堀田遺跡[9]・玉城町小ばし遺跡[10]などでも出土している。

(6)　鎌倉・室町時代の遺物（160～186）

Ａ　ＳＤ30出土遺物（160・161）

土師器や陶器片、陶磁器片などが出土した。

160・161は土師器小皿で、伊藤裕偉氏による編年の南伊勢系Ａ系統で、岩出遺跡群での分類Ⅲａ期に相当する。14世紀中頃～15世紀初のものと考えられる[11]。

Ｂ　ＳＫ50出土遺物（162・163）

土師器（162）や山茶椀（163）などが出土した。162は南伊勢系の鍋で、伊藤裕偉氏による編年の第１段階ｂ型式に相当する[12]。12世紀末～13世紀後葉のものと考えられる。163の椀は、藤澤編年の第６型式に

当たり、13世紀前葉のものと考えられる。

C　ＳＥ16出土遺物（164～167）

山茶椀（164～167）が井戸埋土上層から出土した。藤澤編年の第６型式に当たる。13世紀前葉のものと考えられる。167の底部外面には、「十」の墨書がみられる。

D　ＳＥ51出土遺物（168～173）

土師器（168～171）や陶器（172・173）などが出土した。

168～170は南伊勢系の鍋で、第４段階ｂ型式に相当し、15世紀後半～16世紀のものと考えられる。

171は羽釜で、口縁部のみの小片である。172の天目茶椀・173の緑釉小皿は、藤澤良祐氏による古瀬戸編年の古瀬戸後Ⅳ期古段階に相当する。15世紀後半のものと考えられる[13]。173の底部外面には、「古喜祢」の墨書がみられる[14]。

E　ＳＫ35出土遺物（174～178）

土師器（174～177）や陶器（178）などが出土した。

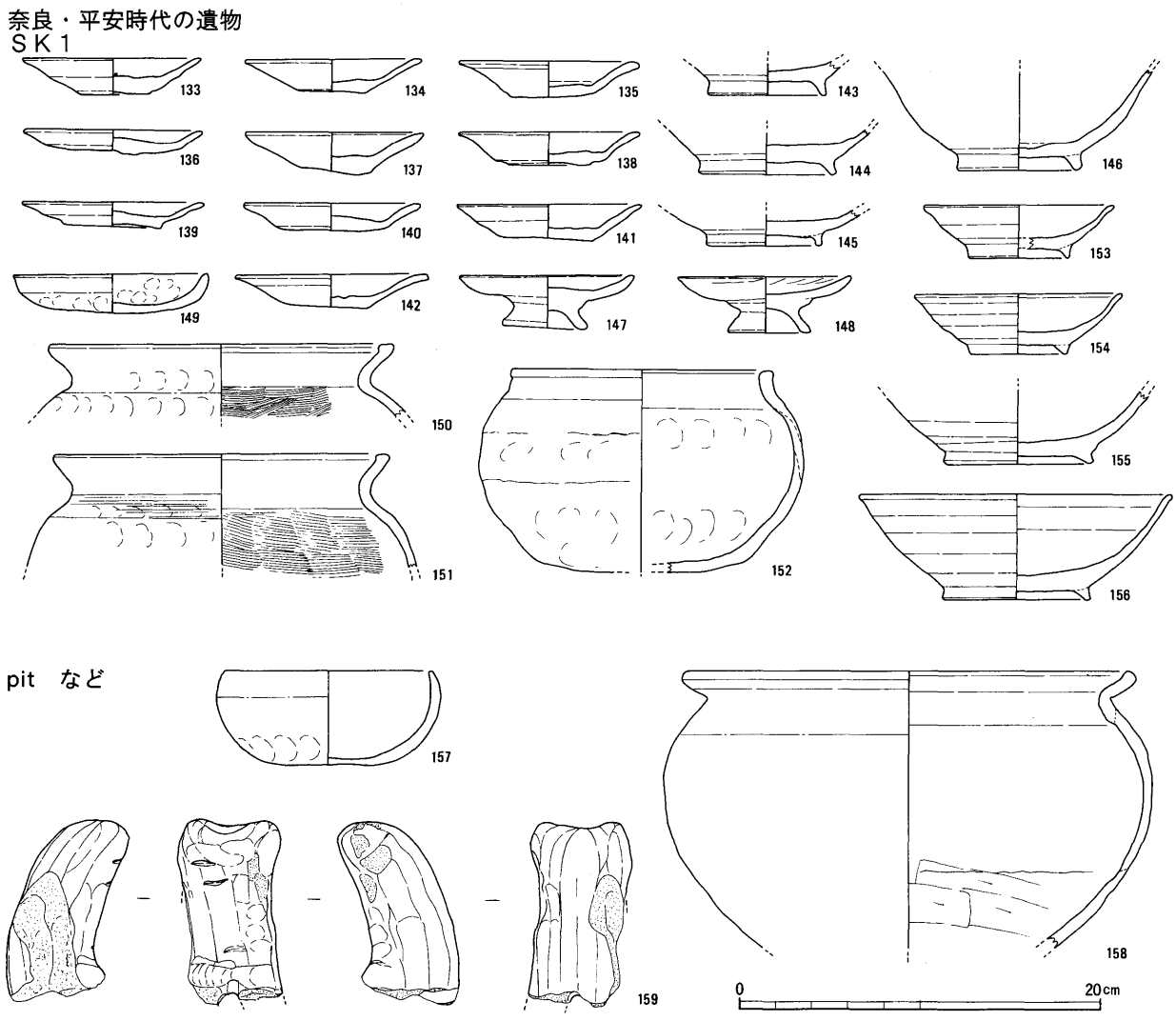
174・175は小皿である。南伊勢系Ｂ系統で、岩出遺跡群での分類Ⅲｂ期に相当し、15世紀初～16世紀中頃のものと考えられる。176・177は南伊勢系の鍋で、第３段階ａ型式に相当し、14世紀中葉～15世紀前半のものと考えられる。178の常滑産の大甕は12世紀後半のもので、混入したものと考えられる[15]。

F　ＳＢ54出土遺物（179）

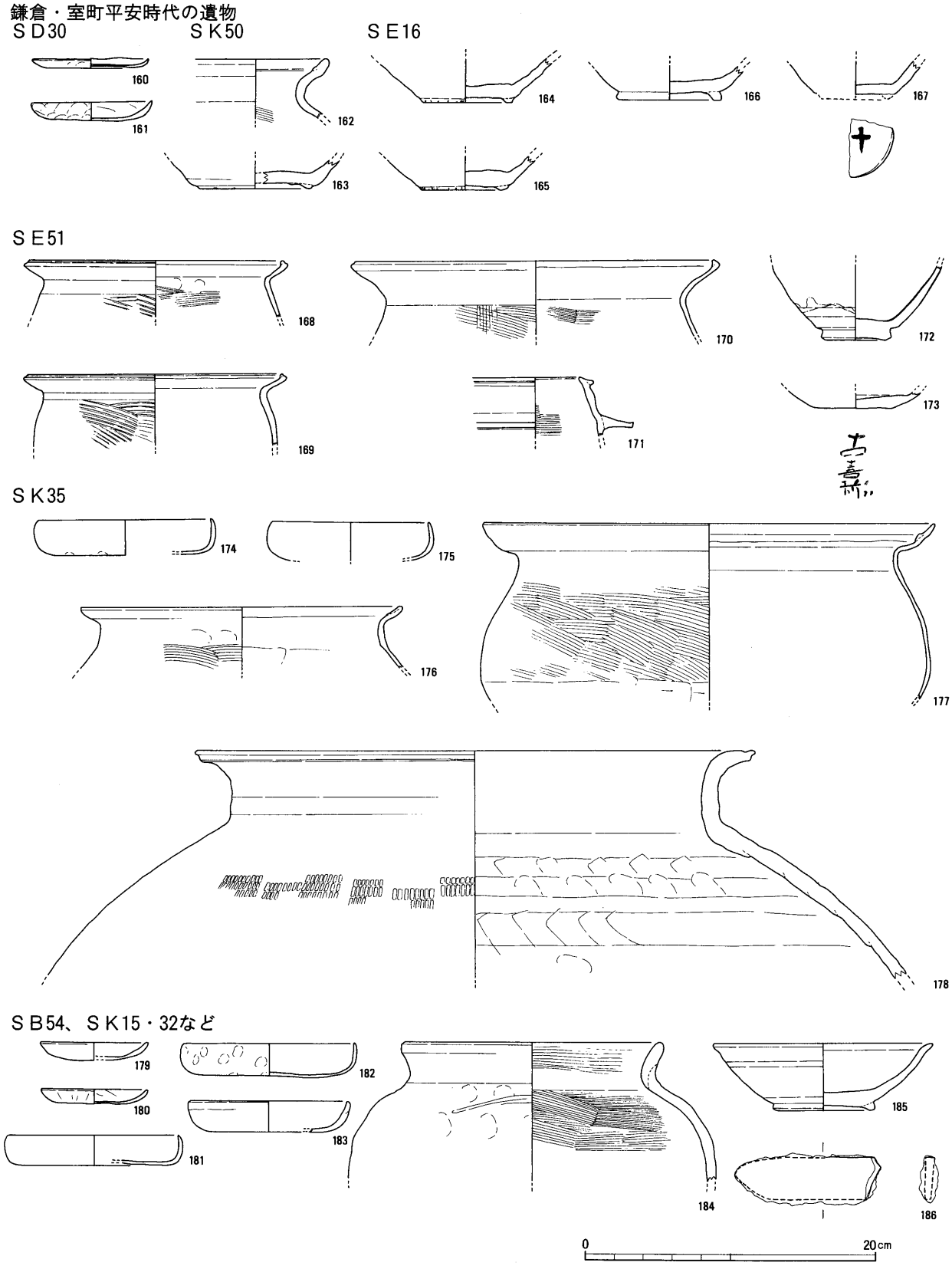
柱穴からは、土師器の細片が出土している。図化できたものは１点のみで、土師器小皿である。南伊勢系Ａ系統で、岩出遺跡群での分類Ⅱｂ期に相当し、13世紀後半～14世紀初のものと考えられる。

G　ＳＫ15出土遺物（181）

土師器皿が出土した。南伊勢系Ａ系統で、岩出遺跡群での分類Ⅲａ期に相当し、14世紀中頃～15世紀



第25図　出土遺物実測図８（１：４）



第26図　出土遺物実測図９（１：４）

初のものと考えられる。

H　ＳＫ32出土遺物（183）

土師器や山茶椀などが出土した。図化できたものは１点のみで、土師器皿である。南伊勢系Ｂ系統で、岩出遺跡群での分類Ⅱａ期に相当し、12世紀末～13世紀後半のものと考えられる。

Ⅰ　包含層などの出土遺物（180・182・184～186）

180の土師器小皿は南伊勢系Ａ系統で、岩出遺跡群での分類Ⅲａ期に相当し、14世紀中頃～15世紀初のものと考えられる。182の土師器皿は南伊勢系Ｂ系統で、岩出遺跡群での分類Ⅲａ期に相当し、14世紀中頃～15世紀初のものと考えられる。184の土師器鍋は、南伊勢系の鍋で、（仮）Ａ段階のもので、12世紀前半のものと考えられる。185は山茶椀で、藤澤編年の第５型式に当たり、12世紀末～13世紀初頭のものと考えられる。

186は小刀で、切先のみ残存している。

（奥野　実・坂倉一光）

〔註〕

① 以下、Ｓ字状口縁台付甕の分類については、下記の文献による。
赤塚次郎「廻間式土器」「土器・土器群の形成」（『廻間遺跡』、愛知県埋蔵文化財センター、1990年）。

② 以下、松河戸様式については下記の文献による。
赤塚次郎「松河戸様式の設定」（『松河戸遺跡』、愛知県埋蔵文化財センター、1994年）。

③ 発掘調査担当者の伊藤裕偉氏の御教示による。

④ 以下、陶邑編年については、下記の文献による。
田辺昭三『須恵器大成』（角川書店、1981年）。

⑤ 小林秀「大足遺跡」（『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』、三重県埋蔵文化財センター、1990年）。

⑥ 國下多美樹「京都府下の紡錘車について」（『京都考古』第50号、京都考古刊行会、1988年）。
また、県内の紡錘車については、河北秀実氏が集成している。
河北秀実「三重県出土のいわゆる紡錘車の形態とその時期」（『Mie　history』vol.３、三重歴史文化研究会、1991年）。

⑦ 田村陽一「北野遺跡」（『平成２年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告　第２分冊』、三重県埋蔵文化財センター、1991年）。

⑧ 以下、藤澤編年については、下記の文献による。
藤澤良祐「山茶碗と中世集落」（『尾呂』本文編、瀬戸市教育委員会、1990年）。

⑨ 伊藤久嗣・伊勢野久好「堀田遺跡」（『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』、三重県教育委員会、1981年）。

⑩ 下村登良男「度会郡玉城町小ばし遺跡」（昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』、三重県教育委員会、1979年）。

⑪ 以下、南伊勢系の土師器皿の編年については、下記の文献による。
伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1993年）。
伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。

⑫ 以下、南伊勢系の土師器鍋の編年については、下記の文献による。
伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』vol.１、三重歴史文化研究会、1990年）。
伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会、1996年）。

⑬ 藤澤良祐「瀬戸古窯群Ⅱ ― 古瀬戸後期様式の編年 ― 」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ｘ』、瀬戸市歴史民俗資料館、1991年）。

⑭ 斎宮歴史博物館榎村寛之氏の御教示による。

⑮ 永原慶二編『常滑焼と中世社会』（小学館、1995年）。

番号	実測番号	器　種	出土位置			計測値（cm）		調整・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調	残存度	備　考
			地区	遺構	取上番号	口径	器高						
1	028-04	縄文土器 浅鉢	k1	SD30				外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	やや粗 ～0.2cmの砂含む	並	10YR6/3 にぶい黄橙	口縁片	
2	021-01	縄文土器 深鉢	i7	2号墳				外：口縁部下に素文突帯 内：ナデ	粗 ～0.15cmの小石含む	並	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁 小片	
3	029-06	土師器 高杯	i7	SB42				外：ヘラミガキ 内：ナデ	やや密 ～0.1cmの砂含む	並	2.5YR7/4 淡赤橙	脚部片	三方透かし
4	009-01	土師器 壷	f10	SE53		17.0		外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ・オサエ	密	良	10YR6/2 灰黄褐	口縁部 1／3	
5	037-01	土師器 壷	f10	SE53		18.0		外：ナデ、ヘラミガキ 内：ナデ、ヘラミガキ	やや密	並	10YR5/3 にぶい黄褐	口縁部 1／6	
6	013-01	土師器 壷	f10	SE53	№14	20.0	28.4	外：ナデ、ヘラミガキ 内：ミガキ、オサエ・ナデ、工具ナデ	やや粗 ～0.2cmの砂粒含む	並	10YR6/3 にぶい黄橙	完存	
7	007-01	土師器 壷	f10	SE53		14.4	11.4	外：ハケメ、ヘラミガキ 内：ハケメ、オサエ、ヘラケズリ	やや密 ～0.22cmの砂粒含む	並	5Y7/1 灰白	ほぼ 完存	
8	012-01	土師器 壷	f10	SE53	№3	12.2	14.7	外：ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内：ヨコナデ、オサエ、工具ナデ	やや密 ～0.1cmの微砂粒含む	並	7.5YR4/1 褐灰	完存	
9	004-01	土師器 壷	f10	SE53		13.5	21.2	外：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ、工具ナデ	やや粗 ～0.4cmの小石含む	並	10YR4/2 灰黄褐	完存	
10	030-01	土師器 壷	f10	SE53		11.6		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ	やや密	並	10YR6/2 灰黄橙	口縁部 完存	
11	030-02	土師器 壷	f10	SE53		13.0		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	並	2.5Y6/2 灰黄	口縁部 完存	
12	030-04	土師器 壷	f10	SE53		14.0		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラミガキ	やや粗 ～0.25cmの砂粒含む	並	10YR5/2 灰黄橙	口縁部 1／3	
13	008-01	土師器 壷	f10	SE53	№1,18, 20,22	底径 6.2		外：ﾊｹﾒ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ 内：ヘラミガキ、オサエ・ナデ	やや粗 ～0.5cmの小石含む	良	10YR6/2 灰黄褐	体部 完存	
14	006-01	土師器 壷	f10	SE53	№5	11.4	18.9	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラミガキ、ナデ	やや粗 ～0.6cmの小石含む	並	10YR7/3 にぶい黄橙	ほぼ 完存	
15	010-01	土師器 壷	f10	SE53	№10	12.3	18.1	外：ヘラミガキ、ナデ 内：ヘラミガキ、ナデ	やや密 0.1cm～の砂粒含む	並	10YR5/2 灰黄褐	ほぼ 完存	体部に黒変あり
16	010-02	土師器 壷	f10	SE53	№4	11.0	16.5	外：ヘラミガキ、ナデ 内：ヘラミガキ、ナデ	やや密 0.1cm～の砂粒含む	並	10YR6/2 灰黄褐	ほぼ 完存	体部に黒変あり
17	036-01	土師器 壷	f10	SE53	№6	底径 5.0		外：摩滅のため調整不明 内：ハケメ	やや密	並	10YR7/1 灰白	底部 完存	
18	036-02	土師器 壷	f10	SE53	№8	底径 6.0		外：ヘラミガキ 内：ヘラケズリ・工具痕	やや粗 ～0.15cmの砂粒含む	並	10YR6/3,6/4 にぶい黄橙	底部 完存	
19	030-07	土師器 壷	f10	SE53		底径 5.8		外：ヘラミガキ 内：ナデ、ハケメ	やや密	並	2.5Y4/1 黄灰	底部 1／2	
20	032-05	土師器 壷	f10	SE53		底径 6.0		外：ナデ 内：ハケメ	やや密	並	10YR8/2 灰白	底部 完存	
21	030-03	土師器 甕	f10	SE53		12.0		外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	やや密	並	10YR5/2 灰黄褐	口縁部 1／3	
22	011-01	土師器 甕	f10	SE53	№2	12.3	16.1	外：ヨコナデ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ｹｽﾞﾘ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ 内：ヘラミガキ、ナデ	やや密 0.1cm～の微砂粒含む	並	2.5Y3/1 黒褐	ほぼ 完存	
23	011-02	土師器 甕	f10	SE53	№17	11.8	15.8	外：ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ｹｽﾞﾘ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ 内：ヨコナデ、ナデ、ハケメ	やや粗 0.1cm～の微砂粒含む	並	10YR6/3 にぶい黄橙	ほぼ 完存	
24	038-02	土師器 甕	f10	SE53		13.5		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、工具ナデ、ハケメ	やや粗 ～0.2cmの砂粒含む	並	10YR8/3 浅黄橙	1／4	
25	006-02	土師器 甕	f10	SE53	№19	11.3	18.5	外：ヨコナデ、ハケ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	やや密 ～0.2cmの砂粒含む	並	2.5Y6/1 黄灰 N2/0　黒	ほぼ 完存	体部は黒く焼ける
26	005-01	土師器 甕	f10	SE53	№7	12.0		外：ナデ、ハケメ、ナデ 内：ナデ、工具ナデ	やや粗 ～0.15cmの砂粒含む	並	2.5Y5/2 暗灰黄	1／2	
27	030-06	土師器 高杯	f10	SE53				外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	やや密	並	10YR8/3 浅黄橙	体部片	
28	043-01	木製品 井戸枠	f10	SE53	№1	残存長 50.0	残存幅 52.0	外：工具痕あり				上部 腐食	厚さ 8cm
29	042-01	木製品 井戸枠	f10	SE53		底径 70.0	残存幅 50.0	外：工具痕あり　　内：調整不明 底部に段を削り出す、底部ケズリ				上部 腐食	厚さ 4cm
30	030-05	土師器 壷	f10	SK52		14.0		外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ	やや粗 微砂粒含む	並	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 1／4	
31	034-04	土師器 壷	f10	包含層		13.4		外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	粗 ～0.38cmの小石含む	並	7.5YR7/6 橙	口縁部 1／8	
32	008-01	土師器 壷		表土		17.5		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	やや密	良	5YR5/8 明赤褐	口縁部 1／4	内外面に赤彩あり
33	008-03	土師器 壷	H13	pit6		底径 7.0		外：ナデ 内：工具ナデ	やや粗 ～0.1cmの小石含む	良	7.5YR6/4 にぶい橙	底部 1／2	底部に穿孔あり
34	019-06	土師器 壷	e7	3号墳		底径 4.0		外：ナデ 内：ナデ	やや密 ～0.1cmの砂粒含む	並	7.5YR7/4 にぶい橙	底部 1／3	
35	008-02	土師器 甕	H11	4号墳		20.8		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗 ～0.1cmの小石含む	良	5YR6/8 橙	口縁部 1／8	
36	008-05	土師器 甕	H11	4号墳				外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ、ナデ	やや粗 ～0.4cmの小石含む	良	10YR8/3 浅黄橙	口縁片	
37	002-03	土師器 甕	H9	2号墳		底径 10.7		外：ハケ後ナデ、ナデ 内：ナデ・オサエ、ナデ	粗 ～0.5cm以下の石含む	良	10YR6/4 にぶい黄橙	底部 1／4	
38	019-04	土師器 甕	g10	3号墳		底径 10.4		外：ハケメ、ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	粗 ～0.2cmの砂含む	並	10YR8/2 灰白	底部 完存	
39	020-01	土師器 高杯	b10	3号墳		20.0		外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ヘラミガキ	やや粗 ～0.15cmの砂含む	並	7.5YR7/6 橙	口縁部 1／6	

第２表　出土遺物観察表１

番号	実測番号	器種	出土位置			計測値（cm）		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	取上番号	口径	器高						
40	033-03	土師器 鉢	a4	pit2		10.0	3.4	外：ヘラミガキ、ナデ 内：ヘラミガキ	やや密	並	10YR7/4 にぶい黄橙	1／3	
41	033-02	土師器 鉢	h10	包含層		9.1	4.7	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	密	並	10YR8/4 浅黄橙	完存	
42	004-01	土師器 壺	I14	SK18	№6	16.7		外：剥離激しく、調整不明 内：剥離激しく、調整不明	粗 ～0.3cmの石含む	並	5YR7/4 にぶい橙	口縁部 1／6	
43	004-02	土師器 壺	I14	SK18	№7	底径 6.0		外：ヨコナデ・オサエ、ナデ 内：ナデ・工具痕	粗 ～0.8cmの石含む	並	7.5YR6/4 にぶい橙	底部 完存	
44	004-03	土師器 高杯	I14	SK18	№15			外：剥離激しく、調整不明 内：シボリ痕	やや粗 ～0.2cmの石含む	並	7.5YR8/4 浅黄橙	脚部片	
45	005-02	土師器 高杯	I14	SK18	№1			外：剥離激しく、調整不明 内：シボリ痕	粗 ～0.4cmの石含む	並	7.5YR8/6 浅黄橙	脚部片	
46	005-01	土師器 高杯	I14	SK18	№4			外：ナデ 内：ケズリ・工具痕	やや粗 ～0.3cmの石含む	並	7.5YR8/3 浅黄橙	脚・底部 完存	
47	004-04	土師器 高杯	I14	SK18		底径 10.0		外：剥離激しく、調整不明 内：ケズリ	やや粗 ～0.2cmの石含む	並	7.5YR8/4 浅黄橙	底部 1／3	
48	005-03	土師質 筒型土製品	I14	SK18		残存長 10.8		外：ハケメ 内：ナデ	粗 ～0.3cmの石含む	並	2.5YR8/3 淡黄	不明	
49	035-02	土師器 高杯	i15	4号墳		底径 11.0		外：ナデ、工具ナデ 内：ナデ	やや密 ～0.3cmの砂含む	並	5YR7/6 橙	脚部 1／3	
50	041-01	須恵器 甕	G14	包含層		24.0		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	N5/0 灰	口縁部 1／3	
51	040-01	須恵器 大甕	i5	2号墳		40.0		外：ロクロナデ、タタキ 内：ロクロナデ、ナデ・オサエ	密	良	5PB5/1 青灰	口縁部 1／3	
52	009-03	須恵器 杯身	E7	1号墳		10.6		外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密 ～0.1cmの砂粒含む	良	N6/0 灰	口縁部 1／8	
53	019-02	須恵器 杯蓋	c6	1号墳		13.0		外：ロクロケズリ、ロクロナデ 内：ロクロナデ	密 ～0.3cmの砂含む	良	N6/0 灰	口縁部 1／4	
54	001-03	須恵器 甕	c5	1号墳		体部 10.3		外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密 ～0.2cmの砂粒含む	並	N6/0 灰	体部 完存	
55	021-02	土師質 土錘	b7	1号墳		直径 2.0	長さ 8.3		やや密 ～0.1cmの砂含む	並	7.5YR8/4 浅黄橙	ほぼ 完存	重さ 19.3g
56	002-03	ガラス製 小玉	c5	1号墳		直径 0.8	0.6				5PB3/1 暗青灰	完存	重さ 0.57g
57	010-01	土師器 長胴甕	H10	2号墳		22.0		外：ヨコナデ、オサエ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ	やや密 ～0.2cm以下の石含む	並	2.5Y8/2 灰白	口縁部 1／4	
58	039-02	土師器 甕	j5	2号墳		15.8		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ	やや粗 ～0.25cmの砂粒含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	3／4	外面に煤付着
59	039-01	土師器 甕	i8	2号墳		18.0		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ハケメ	やや密 ～0.15cmの砂粒含む	並	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 完存	
60	011-01	土師器 長胴甕	H9	2号墳		18.8		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗 0.1～0.2cmの砂含む	並	10YR8/2 灰白	口縁部 1／3	
61	020-02	土師器 甕	j8	2号墳		15.0		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ	粗 ～0.25cmの砂含む	並	7.5YR6/3 にぶい褐	口縁部 1／4	
62	002-01	土師器 高杯	k4	2号墳		底径 9.0		外：摩滅激しく、調整不明 内：ナデ、シボリ痕	やや密 ～0.2cmの砂粒含む	並	7.5YR6/6 橙	底部 1／3	
63	019-05	土師器 高杯	i6	2号墳				外：タテ方向ナデ 内：ナデ	粗 ～0.3cmの砂含む	並	7.5YR7/6 橙	脚部 2／3	
64	020-03	土師質 不明土製品	k4	2号墳		残存長 7.5	残存幅 4.5	ハケメ	粗 ～2.5cmの砂含む	並	10YR8/4 浅黄橙	不明	
65	021-03	土師質 土錘	k9	2号墳		直径 1.3	残存長 4.8		やや密 ～0.05cmの砂含む	並	10YR8/3 浅黄橙	ほぼ 完存	重さ 5.7g
66	021-04	土師質 土錘	j5	2号墳		直径 1.1	残存長 4.9		やや密 ～0.05cmの砂含む	並	10YR5/2 灰黄褐	ほぼ 完存	重さ 4.5g
67	002-05	土師質 土錘	I9	2号墳		直径 1.5	残存長 4.0		やや粗 ～0.2cm以下の石含む	良	2.5YR6/6 橙	2／3	重さ 8.0g
68	020-04	須恵器 甕	i8	2号墳		17.0		外：ヨコナデ、波状文、タタキ 内：ヨコナデ	密	良	2.5GY5/1 オリーブ灰	口縁部 1／4	
69	002-02	須恵器 甕	H9	2号墳		22.4		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～0.1cm以下の石含む	良	N5/0 灰	口縁部 1／10	
70	003-01	須恵器 大甕	j8	2号墳		24.2		外：ロクロナデ、ハケメ、タタキ 内：ロクロナデ、青海波	やや密	並	N6/0 灰 7.5Y6/1 灰	1／4	
71	001-05	須恵器 杯蓋	i6	2号墳		10.0		外：ロクロケズリ、ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～0.15cmの砂粒含む	並	7.5Y7/1 灰白	口縁部 1／4	
72	001-03	須恵器 杯蓋	H9	2号墳		11.2	4.4	外：ロクロケズリ、ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密 0.2cm以下の石含む	良	N5/0 灰	1／8	外面に自然釉付着
73	002-01	須恵器 杯蓋	H9	2号墳		10.9		外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや粗 0.2cm以下の石含む	良	7.5Y6/1 灰	口縁部 1／8	
74	001-04	須恵器 杯身	i5	2号墳		10.5	5.2	外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密 0.25cm～の砂粒含む	並	10Y5/1 灰 5Y7/1 灰白	1／4	
75	001-01	須恵器 高杯	i8	2号墳		13.3		外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ｷｻﾞﾐ、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ、ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内：ロクロナデ	やや密 0.25cm～の砂粒含む	並	N6/0 灰	1／3	
76	022-05	土師器 杯	e8	3号墳		12.0	5.7	外：ヨコナデ、オサエ・ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗 ～0.2cmの砂粒含む	並	10YR8/3 浅黄橙	1／3	
77	022-04	土師器 杯	e8	3号墳		13.0	5.0	外：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗 ～0.2cmの砂粒含む	並	7.5YR7/4 にぶい橙	1／8	
78	022-01	土師器 高杯	b11	3号墳		底径 9.0		外：ナデ、ハケメ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗 ～0.4cmの砂粒含む	並	7.5YR8/4 浅黄橙	底部 2／3	

第３表　出土遺物観察表２

番号	実測番号	器種	出土位置			計測値（cm）		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	取上番号	口径	器高						
79	022-03	土師器 高杯	e8	3号墳		底径 9.0		外：ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ・シボリ痕	やや密 ～0.2cmの砂粒含む	並	2.5YR7/6 橙 5YR5/2 灰褐	底部 2／3	
80	022-02	土師器 高杯	d8	3号墳		底径 9.4		外：ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ・シボリ痕	やや密 ～0.15cmの砂粒含む	並	2.5YR7/6 橙	底部 1／2	
81	024-02	土師質 土錘	a11	3号墳		直径 2.0	長さ 7.1		粗 ～0.2cmの砂粒含む	並	5YR6/6 橙	完存	重さ 23.1g
82	024-03	土師質 土錘	d8	3号墳		直径 1.2	長さ 6.5		やや密 微砂粒含む	並	10YR5/2 灰黄褐	完存	重さ 6.3g
83	024-01	土師質 不明土製品	f10	3号墳		残存長 10.0	残存幅 6.0		粗 ～0.25cmの砂粒含む	並	5YR6/6 橙	不明	
84	018-05	須恵器 杯蓋	e13	3号墳		13.0		外：ロクロケズリ、ロクロナデ 内：ロクロナデ	密 ～0.3cmの砂含む	良	N7/0 灰白	口縁部 1／6	
85	019-01	須恵器 杯身	g12	3号墳		12.0		外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密 0.15cmの砂含む	良	N6/0 灰	口縁部 1／4	
86	019-03	須恵器 短頸壺	c11	3号墳		8.0		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	N6/0 灰	口縁部 1／4	
87	018-03	須恵器 壺	c8	3号墳		10.0		外：ロクロナデ・波状文 内：ロクロナデ	密	並	7.5Y8/1 灰白	口縁部 1／8	
88	018-01	須恵器 甕	g12	3号墳		24.0		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	N5/0 灰	口縁部 1／4	外面に自然釉付着
89	018-02	須恵器 甕	e13	3号墳		26.0		外：ロクロナデ、タタキ 内：ロクロナデ	密	良	N6/0 灰	口縁部 1／6	
90	015-01	須恵器 大甕	b9	3号墳		体部 32.4		外：ロクロナデ、タタキ 内：ロクロナデ、ハケメ	やや密 ～0.4cmの小石含む	並	7.5Y7/1 灰白	体部 完存	
91	024-04	滑石製 有孔円盤	c11	3号墳		直径 2.5	厚さ 0.5						重さ 5.0g
92	026-04	土師器 高杯	j14	4号墳		底径 10.4		外：工具ナデ、ナデ 内：ナデ	やや粗 0.1～0.3cmの砂含む	並	7.5YR6/4 にぶい橙	底部 1／5	
93	027-04	土師質 土錘	k12	4号墳		直径 1.4	長さ 6.0		やや密 0.1～0.2cmの砂含む	並	10YR8/2 灰白	完存	重さ 9.6g
94	027-05	土師質 土錘	i15	4号墳		直径 3.1	長さ 9.1		やや密 0.1～0.2cmの砂含む	並	5YR7/6 橙	完存	重さ 60:0g
95	023-02	須恵器 有蓋高杯	l11	4号墳		10.6		外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密 ～0.25cmの砂粒含む	良	N7/0 灰白	杯部 1／4	
96	023-01	須恵器 杯身	j13	4号墳		13.1		外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密 ～0.2cmの砂粒含む	良	10YR6/1 灰	口縁部 1／6	
97	023-03	須恵器 甕	k12	4号墳		12.5		外：ロクロナデ、タタキ 内：ロクロナデ、ナデ	やや密 ～0.25cmの砂粒含む	良	N7/0 灰白 N6/0 灰	口縁部 1／6	
98	027-01	須恵器 有蓋高杯	j13	4号墳		底径 15.4		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密	並	N5/0 灰	底部 1／8	
99	023-04	須恵器 有蓋高杯	j12	4号墳		底径 10.0		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや粗 ～0.3cmの砂粒含む	良	7.5Y7/1 灰白	底部 5／6	
100	023-05	須恵器 甕	j13	4号墳		体部 9.0		外：波状文、ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～0.15cmの砂粒含む	良	N5/0 灰	体部 完存	
101	001-01	土師器 長胴甕	H10	SD13		20.1		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ハケ後ヨコナデ、ハケメ	粗 ～0.3cm以下の石含む	良	2.5Y7/3 浅黄	口縁部 1／4	
102	003-01	土師器 甕	I10	SD13		18.2	19.7	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ、ナデ	粗 0.25cm以下の石含む	良	10YR8/3 浅黄橙	1／5	
103	001-02	土師器 甕	H10	SD13		15.4		外：ヨコナデ、ハケ後ﾖｺﾅﾃﾞ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケ後ﾖｺﾅﾃﾞ、ハケメ	粗 0.2cm以下の石含む	良	2.5Y7/3 浅黄	口縁部 1／4	
104	025-02	土師器 甕	k11	SD13		17.7		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ	やや粗 0.1～0.2cmの砂含む	並	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 1／3	
105	025-01	土師器 甑	h13	SD13		32.4		外：ナデ 内：ナデ、ヘラケズリ	やや粗 0.1～0.2cmの砂含む	並	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 1／8	
106	026-03	土師器 高杯	h13	SD13		底径 8.8		外：ナデ 内：ナデ	やや粗 0.1～0.2cmの砂含む	並	7.5YR6/4 にぶい橙	底部 1／4	
107	026-02	土師質 不明土製品	h12	SD13		残存長 7.0	残存幅 5.4	外：ナデ 内：オサエ	やや密	並	10YR8/4 浅黄橙	不明	
108	027-08	土師質 土錘	g13	SD13		直径 1.2	長さ 7.6		やや密	並	2.5Y8/2 灰白	完存	重さ 8.5g
109	027-07	土師質 土錘	g14	SD13		直径 1.2	長さ 7.7		やや密	並	10YR8/2 灰白	完存	重さ 8.6g
110	009-04	須恵器 甑	E7	SD13		13.6		外：ロクロナデ、波状文 内：ロクロナデ	密 微砂粒含む	良	N6/0 灰	口縁部 1／8	
111	027-02	須恵器 杯蓋	g14	SD13		11.8		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密 0.1～0.3cmの砂含む	並	5Y7/1 灰白	口縁部 1／8	
112	027-03	須恵器 杯身	k11	SD13		12.4		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密	並	5Y7/1 灰白	口縁片	
113	028-01	土師器 甕	e7	SK27		17.0		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ	やや粗 ～0.4cmの小石含む	並	10YR8/4 浅黄橙	口縁部 1／11	
114	028-02	土師器 甕	e7	SK27		20.0		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ	やや粗 ～0.2cmの砂含む	並	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 1／4	
115	029-05	土師器 高杯	e7	SK27		底径 10.0		外：ハケメ、ナデ 内：ハケメ、オサエ・ナデ	やや密 ～0.1cmの砂含む	並	5YR7/6 橙	底部 完存	
116	029-03	土師器 杯	e7	SK27		12.0		外：ナデ 内：ナデ	やや密 ～0.1cmの砂含む	並	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 1／2	
117	028-03	土師器 壺	e7	SK27		底径 5.8		外：ナデ、工具痕 内：ナデ	やや粗 ～0.4cmの小石含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	底部 完存	底部に木葉痕あり

第４表　出土遺物観察表３

番号	実測番号	器　種	出土位置			計測値（cm）		調整・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調	残存度	備　考
			地区	遺構	取上番号	口径	器高						
118	029-07	土師質土錘	e7	SK27		直径 1.4	残存長 6.5		やや密	並	7.5YR5/3 にぶい褐	ほぼ完存	重さ 9.5g
119	001-02	須恵器杯身	e7	SK27		10.0	4.7	外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密 ～0.25cmの砂粒含む	並	N6/0 灰	1／2	
120	029-01	須恵器有蓋高杯	e7	SK27		8.5		外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや粗 ～0.15cmの砂含む	並	5Y7/1 灰白	杯部 1／2	
121	029-04	土師器杯	g7	SK31		13.0		外：ナデ 内：ナデ	やや密	並	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 1／3	
122	002-04	土師器鉢	H13	pit5		12.2		外：ヨコナデ、ﾅﾃﾞ･ｵｻｴ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ、ナデ後ハケメ	粗 0.35cm以下の石含む	良	5YR6/6 橙	口縁部 1／2	
123	009-01	土師器甕	E6	包含層		19.1		外：ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ハケメ 内：ハケ後ヨコナデ、ハケメ	粗 ～0.2cmの砂粒含む	並	7.5YR8/3 浅黄橙	口縁部 1／2	
124	038-01	土師器甕	j2	包含層		16.0	19.0	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ、ナデ	やや粗 ～0.4cmの小石含む	並	10YR8/3 浅黄橙	1／2	
125	034-03	土製品紡錘車	g10	包含層		直径 4.2	厚さ 3.0		密 ～0.15cmの砂粒含む	並	10YR7/4 にぶい黄橙	1／2	重さ 24.6g
126	009-02	須恵器有蓋高杯	E6	pit1		11.8	5.0	外：ロクロケズリ、ロクロナデ 内：調整不明瞭	やや粗 ～0.2cmの砂粒含む	良	5GY6/1 オリーブ灰	1／2	
127	016-03	須恵器杯蓋	k1	包含層		13.0	4.7	外：ロクロケズリ、ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～0.1cmの砂粒含む	良	5Y6/1 灰	1／2	
128	016-04	須恵器杯身	k6	包含層		10.0	5.0	外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密	並	2.5Y8/2 灰白	1／2	
129	032-02	須恵器杯身	k3	SK37		12.0		外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	良	10Y6/1 灰	口縁小片	
130	018-04	須恵器壺		表土		12.0		外：ロクロナデ・波状文 内：ロクロナデ	密	良	N5/0 灰	口縁部 1／4	
131	016-01	須恵器広口壺	j2	包含層		15.0	16.8	外：ロクロナデ、タタキ 内：ロクロナデ、青海波	やや粗 0.4cmの砂粒含む	並	N6/0 灰	1／3	
132	034-02	須恵器短頸壺	b12	包含層		体部 14.3		外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	粗 ～0.2cmの砂粒含む	並	N7/0 灰白 N6/0 灰	体部 1／2	
133	016-08	ﾛｸﾛ土師器皿	E9	SK1	No.8	9.7	2.0	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面に糸切り痕	やや粗 0.1cm以下の砂粒含む	並	10YR8/4 浅黄橙	2／3	
134	016-04	ﾛｸﾛ土師器皿	E9	SK1	No.6	9.7	1.9	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面に糸切り痕	やや密	並	2.5Y8/2 灰白	1／2	
135	014-02	ﾛｸﾛ土師器皿	E9	SK1	No.19	9.8	2.0	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面に糸切り痕	粗 ～0.3cmの石含む	並	10YR8/2 灰白	完存	
136	016-01	ﾛｸﾛ土師器皿	E9	SK1	No.5	10.0	1.4	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面に糸切り痕	やや密 ～0.15cmの砂粒含む	並	2.5Y8/2 灰白	完存	
137	014-04	ﾛｸﾛ土師器皿	E9	SK1	No.11	9.7	2.4	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面に糸切り痕	やや粗 ～0.3cmの石含む	並	10YR8/1 灰白	完存	
138	016-07	ﾛｸﾛ土師器皿	E9	SK1	No.4	9.8	1.9	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面に糸切り痕	やや粗 0.15cm以下の砂含む	並	10YR8/2 灰白	1／4	
139	016-02	ﾛｸﾛ土師器皿	E9	SK1	No.17	9.9	1.6	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面に糸切り痕	やや密 0.1cm以下の砂粒含む	並	10YR7/2 にぶい黄橙	1／2	
140	016-03	ﾛｸﾛ土師器皿	E9	SK1	No.20	9.7	1.5	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面に糸切り痕	やや粗 0.2cm以下の砂粒含む	並	2.5Y8/2 灰白	2／3	
141	016-05	ﾛｸﾛ土師器皿	E9	SK1	No.15	10.0	2.0	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面に糸切り痕	やや密 細砂粒含む	並	2.5Y8/3 淡黄	1／3	
142	016-06	ﾛｸﾛ土師器皿	E9	SK1	No.21	10.5	1.9	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面に糸切り痕	やや粗 0.15cm以下の砂含む	並	10YR8/1 灰白	2／3	
143	015-05	ﾛｸﾛ土師器椀	E9	SK1	No.2	底径 6.3		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕後高台貼り付け	やや密	並	10YR8/1 灰白	底部 1／3	
144	014-01	ﾛｸﾛ土師器椀	E9	SK1	No.12	底径 7.0		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕後高台貼り付け	粗 ～0.3cmの石含む	並	7.5YR8/3 浅黄橙	底部完存	
145	015-03	ﾛｸﾛ土師器椀	E9	SK1	No.36	底径 6.2		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕後高台貼り付け	やや密	並	2.5Y8/2 灰白	底部完存	
146	015-04	ﾛｸﾛ土師器椀	E9	SK1	No.29	底径 6.5		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕後高台貼り付け	やや密	並	7.5YR7/3 にぶい橙	底部 1／2	
147	013-03	ﾛｸﾛ土師器台付皿	E9	SK1	No.24	9.6	3.0	外：ナデ　内：ナデ 底部外面：高台貼り付け時のナデ	やや粗 ～0.3cmの石含む	並	10YR8/3 浅黄橙	完存	
148	015-06	ﾛｸﾛ土師器台付皿	E9	SK1	No.26	9.5	3.1	外：ヨコナデ、ナデ　内：ヨコナデ 底部外面：高台貼り付け時のナデ	やや粗 0.15cm以下の砂含む	並	7.5YR8/2 灰白	完存	
149	013-04	土師器皿	E9	SK1	No.28	10.7	2.1	外：ヨコナデ、オサエ・ナデ 内：ナデ	やや粗	並	10YR8/3 浅黄橙	完存	底部外面に煤付着
150	015-02	土師器鍋	E9	SK1	No.25	19.0		外：ヨコナデ、オサエ 内：ヨコナデ、ハケメ	やや粗 0.1cm以下の砂粒含む	並	7.5YR7/3 にぶい橙	口縁部 1／4	外面に指頭圧痕
151	015-01	土師器鍋	E9	SK1	No.31	18.0		外：ヨコナデ、オサエ・ナデ 内：ヨコナデ、オサエ・ハケメ	やや粗 0.1cm以下の砂粒含む	並	10YR6/3 にぶい黄橙	口縁部 1／3	内面に煤付着
152	013-02	土師器鍋	E9	SK1	No.1	14.0	11.2	外：ヨコナデ、オサエ・ナデ 内：ヨコナデ、オサエ・ナデ	粗 ～0.3cmの石含む	並	7.5YR6/6 橙 5YR5/6 明赤褐	1／8	外面に指頭圧痕
153	015-07	山茶椀	E9	SK1	No.10	10.5	2.9	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕後高台貼り付け	密	良	5Y8/1 灰白	1／2	第4型式
154	014-03	山茶椀	E9	SK1	No.9	11.4	3.3	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕後高台貼り付け	やや密 ～0.3cmの石含む	並	5Y8/1 灰白	1／2	第4型式
155	014-05	山茶椀	E9	SK1	No.23	底径 7.8		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕後高台貼り付け	やや密 ～0.1cmの石含む	並	2.5Y8/2 灰白	底部完存	第4型式
156	013-01	山茶椀	E9	SK1	No.30	17.0	5.8	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕後高台貼り付け	密 ～0.2cmの石含む	並	5Y8/2 灰白	1／4	第4型式

第５表　出土遺物観察表４

番号	実測番号	器種	出土位置			計測値（cm）		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	取上番号	口径	器高						
157	034-01	土師器 椀	h9	包含層		10.4	5.1	外：ヨコナデ、ナデ、オサエ・ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	やや密 ～0.15cmの砂粒含む	並	5YR7/6 橙	1／6	
158	033-01	土師器 鍋	f7	pit1		24.2		外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	粗 ～0.25cmの砂粒含む	並	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 1／8	外面に煤付着
159	002-04	土製品 土製支脚	h1	SD30		上端幅 4.4	残存高 10.1		やや粗 ～0.15cmの砂粒含む	並	5YR6/4 にぶい橙	2／3	指頭圧痕あり
160	029-02	土師器 小皿	i1	SD30		8.0	0.6	外：ナデ 内：ナデ	やや密 ～0.3cmの砂含む	並	2.5Y8/3 淡黄	ほぼ完存	
161	002-02	土師器 小皿	i1	SD30		8.8	1.3	外：オサエ・ナデ 内：オサエ・ナデ	密	良	10YR8/3 浅黄橙	完存	
162	031-05	土師器 鍋	i10	SK50				外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ハケメ	やや密	並	10YR8/3 浅黄橙	口縁小片	外面に煤付着
163	032-03	山茶椀	i10	SK50		底径 7.5		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕後高台貼り付け	やや密	並	2.5Y7/1 灰白	底部 1／2	第6型式
164	006-01	山茶椀	I12	SE16		底径 6.0		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕後高台貼り付け	やや粗 ～0.3cmの小石含む	良	5Y8/1 灰白	底部 完存	第6型式
165	006-02	山茶椀	I12	SE16		底径 5.9		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕後高台貼り付け	やや密	良	5Y8/1 灰白	底部 完存	第6型式
166	006-03	山茶椀	I12	SE16		底径 7.2		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕後高台貼り付け	やや粗 ～0.1cmの小石含む	並	2.5Y8/1 灰白	底部 1／8	第6型式
167	007-06	山茶椀	I12	SE16		底径 5.4		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	やや粗 ～0.1cmの小石含む	良	2.5Y8/1 灰白	底部 1／2	底部外面に墨書
168	031-03	土師器 鍋	j10	SE51		18.0		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ	やや密	並	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部 1／10	外面に煤付着
169	031-06	土師器 鍋	j10	SE51		18.0		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	やや密	並	10YR4/1 褐灰	口縁部 1／10	外面に煤付着
170	031-02	土師器 鍋	j10	SE51		25.0		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	やや密	並	10YR5/1 褐灰	口縁部 1／8	外面に煤付着
171	031-04	土師器 羽釜	j10	SE51				外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ハケメ	やや密	並	2.5Y8/3 淡黄	口縁小片	
172	032-01	天目茶椀	j10	SE51		底径 4.8		外：ロクロケズリ、施釉　内：施釉 底部外面：ケズリ出し高台、ナデ	密	良	5YR5/1 褐灰 2.5Y8/3 淡黄	3／4	
173	032-04	緑釉 小皿	j10	SE51		底径 5.2		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	やや密	良	2.5Y8/2 灰白	底部 完存	底部外面に墨書
174	032-06	土師器 小皿	i7	SK35		12.0	2.4	外：ナデ 内：ナデ	やや密	並	10YR8/3 浅黄橙	1／4	
175	032-07	土師器 小皿	i7	SK35		11.0		外：ナデ 内：ナデ	やや密	並	10YR8/2 灰白	口縁部 1／6	
176	031-01	土師器 鍋	i7	SK35		22.0		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、工具ナデ	やや密	並	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 1／6	外面に煤付着
177	035-01	土師器 鍋	i8	SK35		31.0		外：ナデ、ハケメ、ヘラケズリ 内：ナデ	やや粗	並	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部 完存	外面に煤付着
178	014-01	常滑焼 大甕	i7	SK35		38.2		外：ロクロナデ、タタキ 内：ロクロナデ、オサエ・ナデ	やや粗 0.3～0.8cmの石含む	並	2.5YR6/4 にぶい橙	口縁部 若干残	外面に自然釉あり
179	033-04	土師器 小皿	b11	SB54		7.4		外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	やや粗 ～0.1cmの砂粒含む	並	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 1／3	
180	017-03	土師器 小皿		表土		7.6	1.1	外：オサエ 内：ナデ	密	良	10YR8/3 浅黄橙	完存	
181	008-04	土師器 皿	H9	SK15		11.8		外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや密	良	2.5Y8/3 淡黄	口縁部 1／3	
182	017-02	土師器 皿	l10	包含層		11.8	2.2	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密	良	10YR8/3 浅黄橙	完存	
183	028-05	土師器 皿	f7	SK32		11.0		外：ナデ 内：ナデ	やや密 ～0.3cmの砂含む	並	2.5Y8/3 淡黄	口縁部 1／8	
184	017-01	土師器 鍋		表土		18.0		外：ヨコナデ、オサエ・ナデ 内：ヨコナデ、ハケメ	やや粗 0.4cmの小石含む	並	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部 1／4	
185	016-02	山茶椀		表土		15.0	4.6	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部外面：糸切り痕後高台貼り付け	やや密 微砂粒含む	並	2.5Y7/2 灰黄	1／5	第5型式
186	017-04	鉄製品 小刀	b11	包含層		残存長 10.2	幅 3.2	鋳造：断面二等辺三角形				切先	材質:鉄

第６表　出土遺物観察表５

V 結　　語

今回の調査では、古墳時代前期の掘立柱建物・井戸、古墳時代中期の土坑、古墳時代後期の古墳４基、平安時代末期の土坑１基、鎌倉時代の掘立柱建物１棟・石組み井戸１基、室町時代の石組み井戸１基などが確認された。

ここでは、今回の調査成果のまとめと若干の検討を行う。

(1)　ＳＢ42について

ＳＢ42は、２間（4.4m）×２間（3.9m）の身舎の四面に、南北５間（8.2m）×東西４間（7.1m）の庇が付く掘立柱建物と考えられる。

このように２間×２間の身舎に四面庇がつく建物は、県内では上野市の城之越遺跡のＡ地区ＳＢ１・２とＢ地区ＳＢ１・２の４棟が確認されている。[①]

次に、この建物の構造の特徴について城之越遺跡の大型掘立柱建物と比較してみる。穂積裕昌氏は、同遺跡の建物について７つの特徴を指摘している。[②]これらを参考にＳＢ42が類似する特徴をあげてみる。

① 四面庇建物であること。

② 身舎およびこれに取りつく庇とも平面形が正方形に近いこと。

③ 身舎と庇の柱筋が通らないこと。

④ 庇の出が広く、建物の床面積を広げていること。

⑤ 身舎の隅柱と庇の隅柱と対角線上に配置されていること。

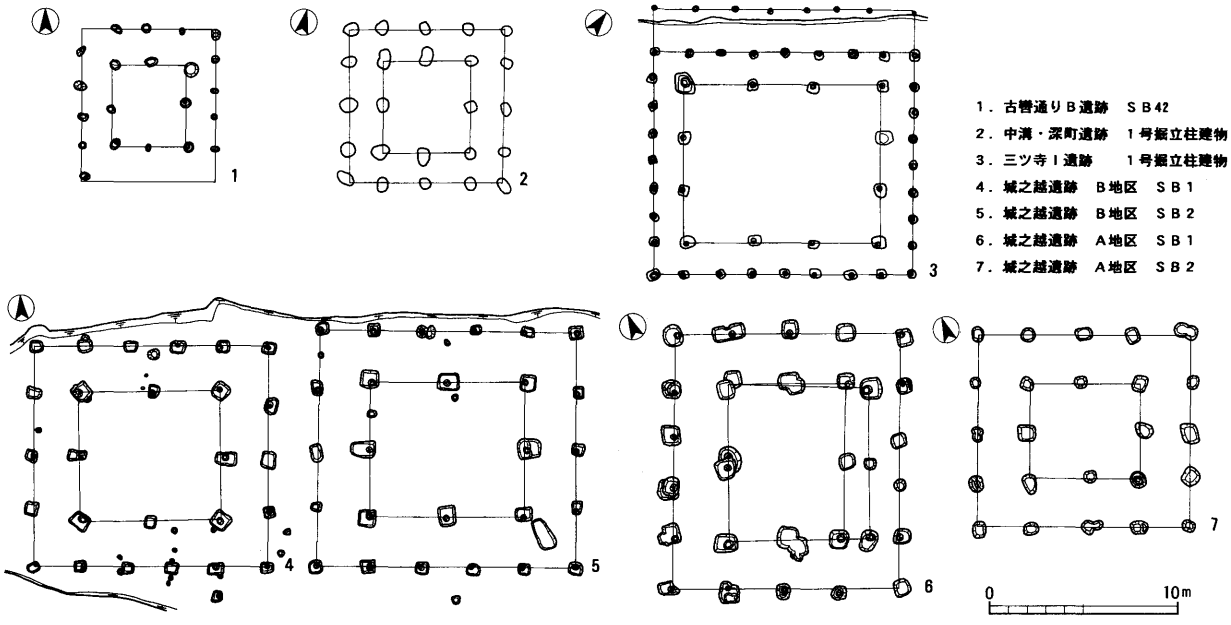
⑥ 身舎部分と庇部分の間がそれぞれ等間であること。

このような特徴から、ＳＢ42は城之越遺跡の大型掘立柱建物と類似した構造をもつ建物ということができる。

同様の構造をもつ建物は、県外において群馬県新田郡新田町の中溝・深町遺跡[③]や群馬県群馬郡群馬町の三ツ寺Ⅰ遺跡[④]（上記の構造に西庇をもっている）などでも確認されている。（第27図参照）。これらの構造をもつ建物については、祭祀のためのものと性格付けられている。

ＳＢ42と上記の３遺跡の建物の規模を比較してみると、城之越遺跡や三ツ寺Ⅰ遺跡の１号掘立柱建物よりも小さく、中溝・深町遺跡の１号掘立柱建物に近いことが伺われる。また、柱痕跡は確認できなかったが、柱掘形は、中溝・深町遺跡の１号掘立柱建物よりも小さいと言うことができる。

次に、建物の時期について上記の３遺跡と宮本長



第27図　掘立柱建物類例（１：400）

二郎氏の作成した「弥生時代・古墳時代の庇付建物一覧表」[5]の四面庇付き建物をみてみると、古墳時代中期・後期の時期に該当する建物が多いことが分かる。このことからＳＢ42は、上記の構造を持った建物でも古い時期の例としてあげることができる。

以上のようにＳＢ42は、古墳時代前期の２間×２間の身舎に四面庇が付く掘立柱建物と言うことができる。

なお、建物について考察した過程で、柱間寸法が曲尺（１尺＝約0.3m）で建てられた可能性も検討したので紹介する。(第28図参照)。桁行４間・梁行４間の南北棟の建物と考えれば、建物規模は桁行27尺・梁行23尺で、柱間寸法は桁間が北から６尺＋7.5尺＋7.5尺＋６尺、梁間が西から５尺＋6.5尺＋6.5尺＋５尺となり、一応推定は可能である。しかし即述のように、平面形以外の切り合い関係や出土遺物などから、やはり古墳時代前期の所産である可能性が最も高いと考えられる。

(2)　ＳＥ53について

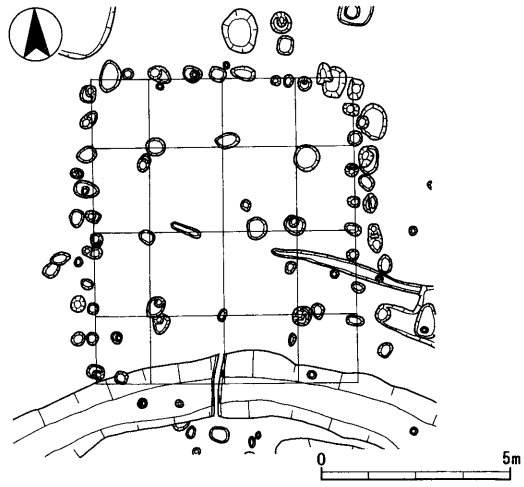
掘形が楕円形を呈する井戸で、長径3.9m・短径3.1m・深さ3.5mを測る。くり抜きの井戸枠を持ち、その中から完形の古墳時代前期の土師器壷・土師器甕などが出土した。

県内の当時期の井戸の検出例としては、津市替田遺跡（第１次調査の井戸１・井戸２）[6]・津市蔵田遺跡（ＳＥ１）[7]・津市雲出島貫遺跡（第１次調査のＳＥ79）[8]などがあげられる。この中で蔵田遺跡のＳＥ１でも井戸枠を有していた。このようにこの時期の井戸の確認例は少ない。

まずＳＥ53の特徴として、くり抜きの井戸枠があることと、その周りも方形を意識して組まれている井戸枠を持つことがあげられる。

井戸の構造や各部分の名称などの検討については、宇野隆夫氏[9]・小笠原好彦氏[10]などの研究がある。宇野氏は、井戸をつくる上での最も重要な技術について着目し、井戸側の素材に基づいて４つの型式に分類している[11]。また、小笠原氏は古墳時代の井戸を対象に分類し、素掘り井戸と木組井戸に分けている[12]。

これらの分類にＳＥ53を当てはめてみると、宇野氏の分類のＢⅠａ類丸太刳り抜き井戸とＢⅡｂ類縦板組支持井戸とを組み合わせたものに相当すると考えられる。



第28図　ＳＢ42の曲尺推定例（１：200）

宇野氏は古墳時代の井戸を井戸Ｉｂ期とし、ＡＩ類素掘りが主体を占め、Ｂ類木組井戸も用いられるようになったと指摘している。そして、竪穴住居に住む人々がＡＩ類素掘り井戸を使うことが多かったと推測している[13]。また、小笠原氏は、古墳時代の井戸側をもつ井戸が有力氏族の集落や豪族居館に多く採用されていたことを想定している[14]。

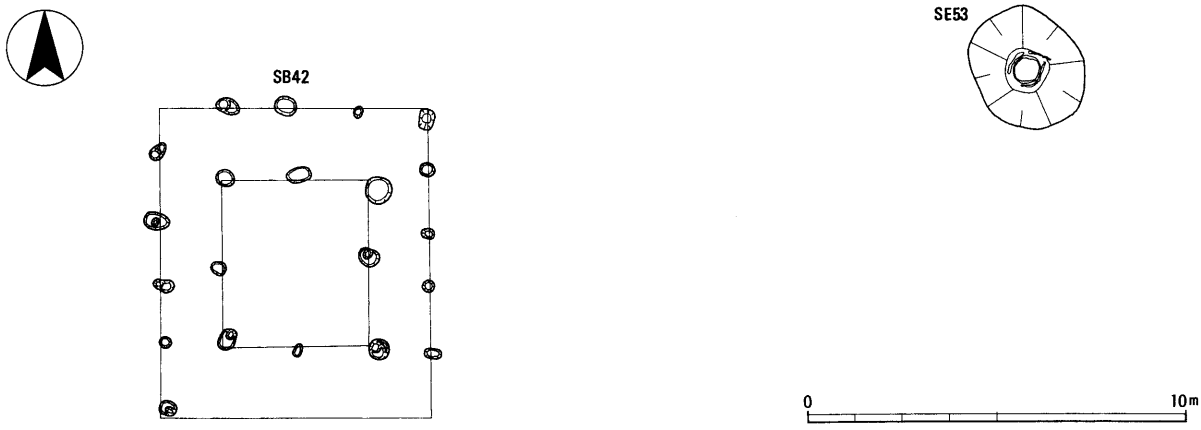
これらのことから、ＳＥ53は一般集落で余り見られない構造を持っていたものと考えられる。

次に、この井戸を特徴付けるものとして、井戸枠内から完形の土器が多数出土したことがあげられる。これらの土器は、井戸廃絶時に意図的に放置されたものと考えられる。このことから、井戸廃絶時には祭祀が実施されたことが想定される[15]。

(3)　ＳＢ42およびＳＥ53の性格について

ＳＥ53は、ＳＢ42から北東方約16mのところに存在している。(第29図参照)。

この様な例として、中溝・深町遺跡と三ツ寺Ｉ遺跡をあげることができる。中溝・深町遺跡については、１号掘立柱建物に隣接する形で、地表面に礫を方形に敷き詰めた１・２号集石土坑（井戸）が南北に２基並んだ状態で確認されている。この井戸は、石を敷き詰めた特殊なもので、建物とともに水・農耕に関する祭祀を行う祭場としての機能が想定されている[16]。また、三ツ寺Ｉ遺跡については、館の中心的建物と考えられている１号掘立柱建物の南西約６mのところに２号井戸が存在している。この井戸は



第29図　ＳＢ42・ＳＥ53位置図（１：200）

覆屋を持ち、湧水に係わる祭祀儀礼に関係するものと考えられている[17]。

これらの状況から考えてみると、当遺跡のＳＢ42とＳＥ53も、中溝・深町遺跡と同様に、建物と井戸とのセット関係で祭祀に係わる機能を有していたものと考えられる。

ＳＥ53は、先述のように一般集落に余り見られない構造をもっている。また、当遺跡は水の得やすい場所に立地しており、井戸を掘る必要性が低いと推定される。これらのことからこの井戸は、祭祀のために特別に掘られたものと考えられる。

ＳＥ53の性格付けについては、岡田精司氏[18]や辰巳和弘氏[19]が指摘する地域首長が行う井水の祭儀が執り行われていた井戸と推定される。

また、ＳＢ42は３時期の建て替えの可能性が高く、岡田精司氏が指摘する「オカリヤ」の系譜を引く建物とも想定することができる[20]。建て替えの事実からこの場所の重要性が伺われる。

これらの祭場は、辰巳和弘氏が指摘する「ハレの空間」に相当すると考えられる[21]。また、辰巳氏は、「ハレの空間」が存在する屋敷地を「豪族居館」と認識すべきであるとしている[22]。これらのことから、この祭場は「豪族居館」の施設であると考えられる。

近年調査例の増加している「豪族居館」は、濠・溝・柵・土塁などの外郭施設をもっている[23]。しかし、今回の調査では掘立柱建物と井戸のみが確認され、これらの施設を囲む濠などは検出されなかった。このことは、今回の調査区周辺に「豪族居館」の関連施設の広がりを推定させる。また、当遺跡の立地からみてみると、櫛田川やその支流の河道を濠として利用していた可能性も考えられる。

以上のように今回の調査では、櫛田川右岸地域における首長層の居館の一部が確認されたものと考えられる。

(4)　古轡通り古墳群について

周溝のみの検出であるが４基の古墳を確認した。所在地の小字名をとり古轡通り古墳群とした。

検出された古墳は、円墳３基・方墳１基から構成されている。築造時期は、周溝から出土した須恵器から６世紀の後半と推定される。墳丘は、櫛田川の氾濫や後世の開墾などによって削平されたものとみられ、確認できなかった。また、埋葬施設も確認できなかった。石室の基底部も確認されなかったことから木棺直葬墳と考えられる。

２号墳と４号墳の周溝からは、意図的に割られた須恵器大甕（70・90）が出土しており、墳丘上で祭祀が行われた可能性が考えられる[24]。この様な出土状況の須恵器甕は、鈴鹿市の石薬師東古墳群の31・67号墳[25]や多気郡明和町の曽祢崎３号墳[26]などでも確認されている。

当古墳群の南方には玉城丘陵が存在し、南伊勢地方最大の群集墳の密集地として知られている[27]。それに対し、当古墳群は櫛田川右岸の低位河岸段丘上に立地している。従来当古墳群の周辺においては、古墳の存在は知られていなかった。しかし、横地高畑遺跡の発掘調査において一辺約９ｍの方墳とみられる周溝が検出され、古墳が存在することが確認された[28]。今回の調査でも古墳の周溝が検出され、これら

の調査結果から、当古墳群周辺においても古墳群が存在する可能性を指摘することができる。

このように櫛田川右岸の当地域においても丘陵部と低位河岸段丘上に古墳群が築造されていたことが確認された。　（奥野　実）

〔註〕

①a　穂積裕昌編『城之越遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1992年）。

b　中浦基之『城之越遺跡（２次）発掘調査報告』（上野市教育委員会・上野市遺跡調査会、1998年）。

②　穂積裕昌「Ｂ地区の大型掘立柱建物」（註①のａ）の193頁。

③　静野勝信「中溝・深町遺跡（新田東部工業団地遺跡）」（『水辺の祭祀』、日本考古学協会三重県大会実行委員会、1996年）。

④　下城正・女屋和志雄ほか『三ツ寺Ⅰ遺跡』〔本文編〕（群馬県埋蔵文化財調査事業団、1988年）。

⑤　宮本長二郎「弥生・古墳時代の掘立柱建物」（『日本原始古代の住居建築』、中央公論美術出版、1996年）の192頁。

⑥　池端清行「替田遺跡（第１次）」（『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅸ』、三重県埋蔵文化財センター、1997年）の28・29頁。

⑦　米山浩之・宮田勝功『蔵田遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）の41・42頁。

⑧　伊藤裕偉・川崎志乃『嶋抜 ― 第一次調査 ― 』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）の26頁。

⑨　宇野隆夫「井戸考」（『史林』第65巻第５号、1982年）。

⑩　小笠原好彦「住居と倉と井戸」（『古墳時代の研究２　集落と豪族居館』、雄山閣、1990年）。

⑪　註⑨に同じ。

⑫　註⑩に同じ。

⑬　註⑨に同じ。

⑭　註⑩に同じ。

⑮　これらの井戸放棄後の状況については、下記の文献でも述べられている。

中野雅美「弥生・古墳時代初頭の井戸 ― 岡山県南部の沖積地集落を中心に ― 」（『考古学と関連科学』、鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会、1998年）。

⑯　註③に同じ。

⑰　註④に同じ。

⑱　岡田精司「大王と井水の祭儀」（『講座日本の古代信仰』第３巻、学生社、1980年）。

⑲　辰巳和弘「地域王権と水の祭儀」（『高殿の考古学 ― 豪族の居館と王権祭儀』、白水社、1990年）。

⑳　岡田精司「神社建築の源流 ― 古代日本に神殿建築はあったか ― 」（『考古学研究』第46巻第２号、考古学研究会、1999年）。

㉑　辰巳和弘「豪族居館と祭祀」（『季刊考古学』第36号、雄山閣、1991年）。

㉒　註㉑に同じ。

㉓　小笠原好彦「豪族の居館と構造」（『古代史復元』第６巻、講談社、1989年）。

㉔　亀田博「後期古墳に埋納された土器」（『考古学研究』第92号、考古学研究会、1977年）。

伊達宗泰「古墳墳丘上祭祀の問題 ― 新沢千塚古墳群の事例を中心として ― 」（『橿原考古学研究所論集』第６冊、吉川弘文館、1984年）。

㉕　服部芳人「古墳周溝内における遺物出土状況について ― 石薬師東古墳群の例から ― 」（『研究紀要』第８号、三重県埋蔵文化財センター、1999年）

㉖　西村美幸『曽祢崎遺跡（第２次）・曽祢崎古墳群』（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。

㉗　玉城丘陵の古墳群については、下記の文献に詳しく述べられている。

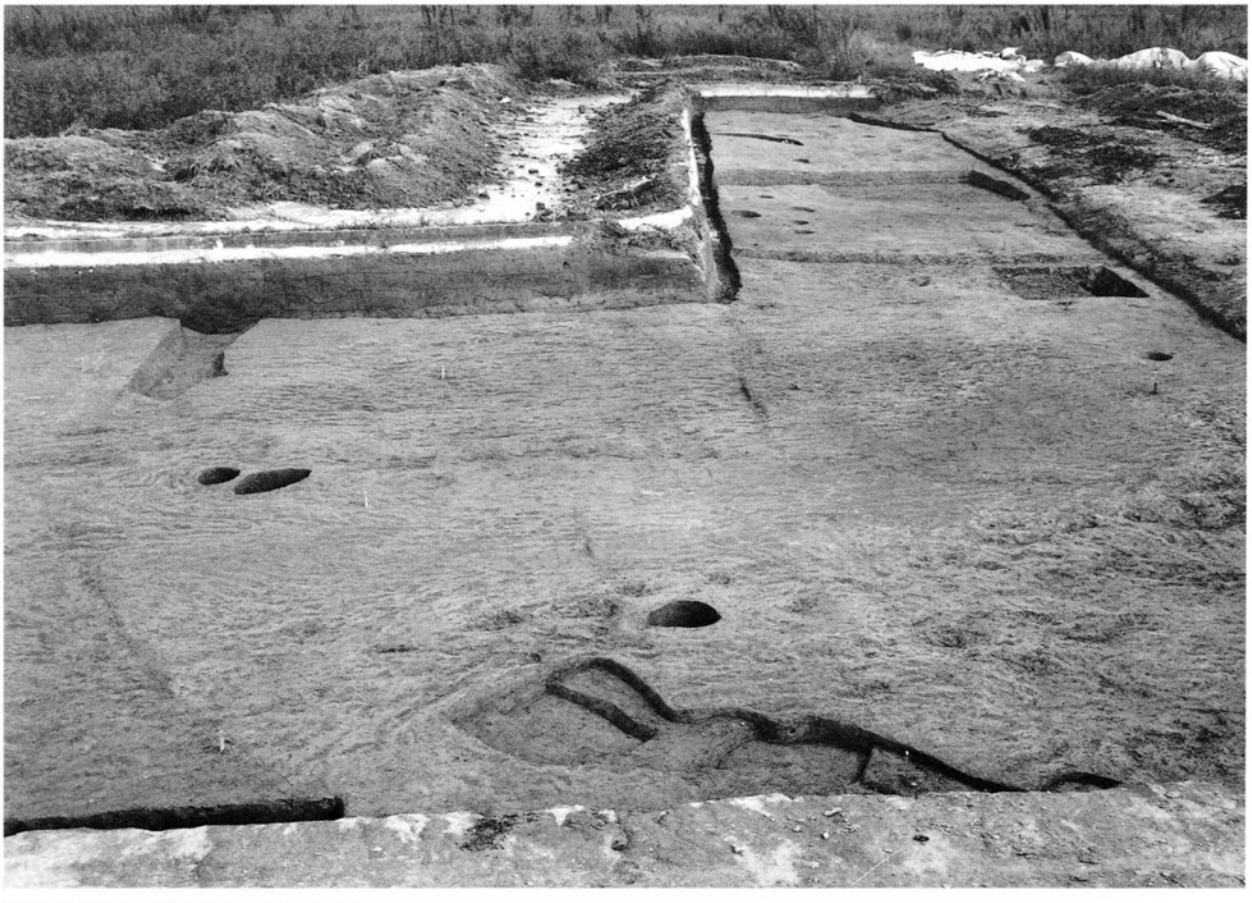
下村登良男「河田古墳群周辺の古墳分布」（『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』、多気町教育委員会、1986年）。

西村美幸「玉城丘陵と周辺の群集墳」『Mie　history』vol.10、三重県歴史文化研究会、1999年）。

西村美幸「玉城丘陵とその周辺の群集墳について」（『研究紀要』第８号、三重県埋蔵文化財センター、1999年）。

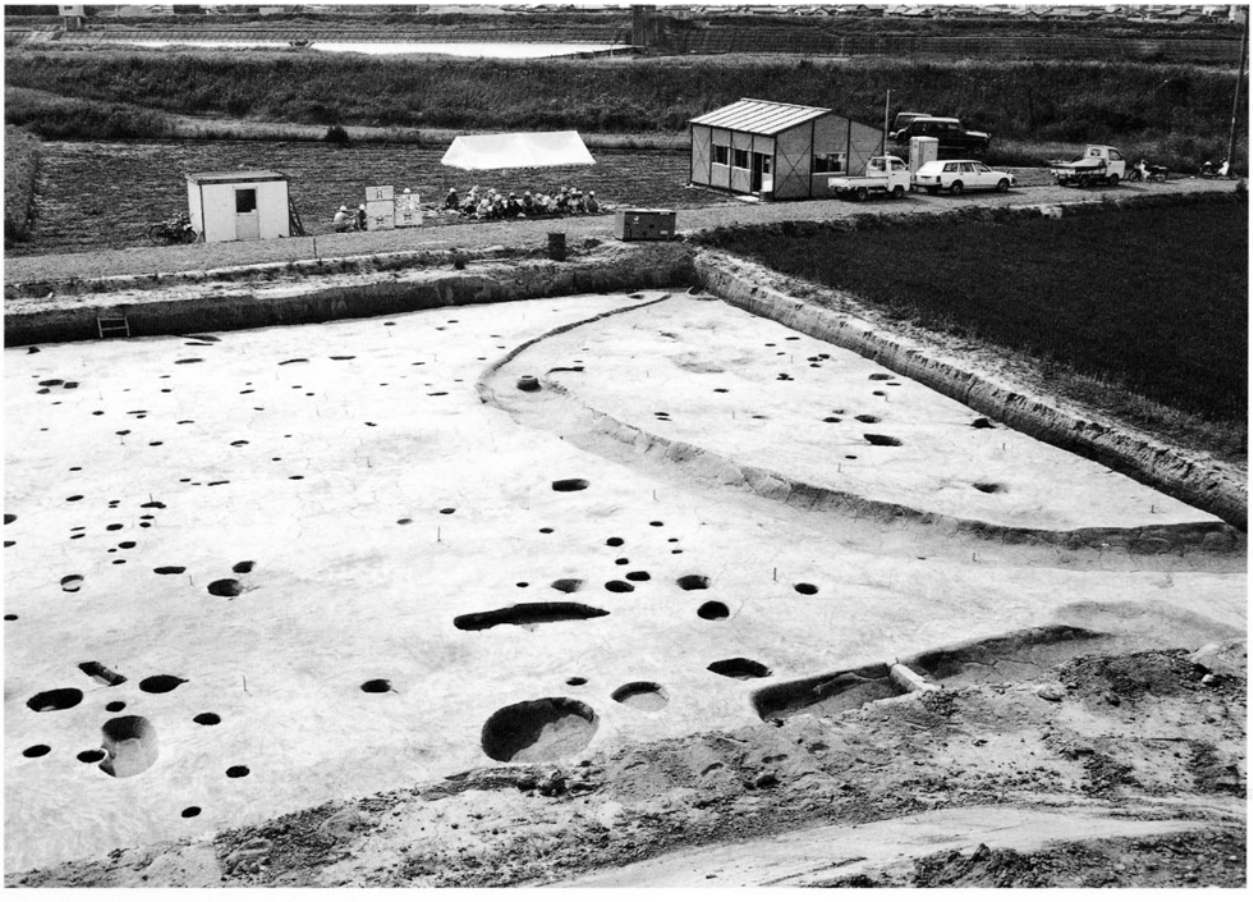
㉘　中川明『横地高畑遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）。

調査前風景（北から）



第１次調査Ａ地区全景（西から）

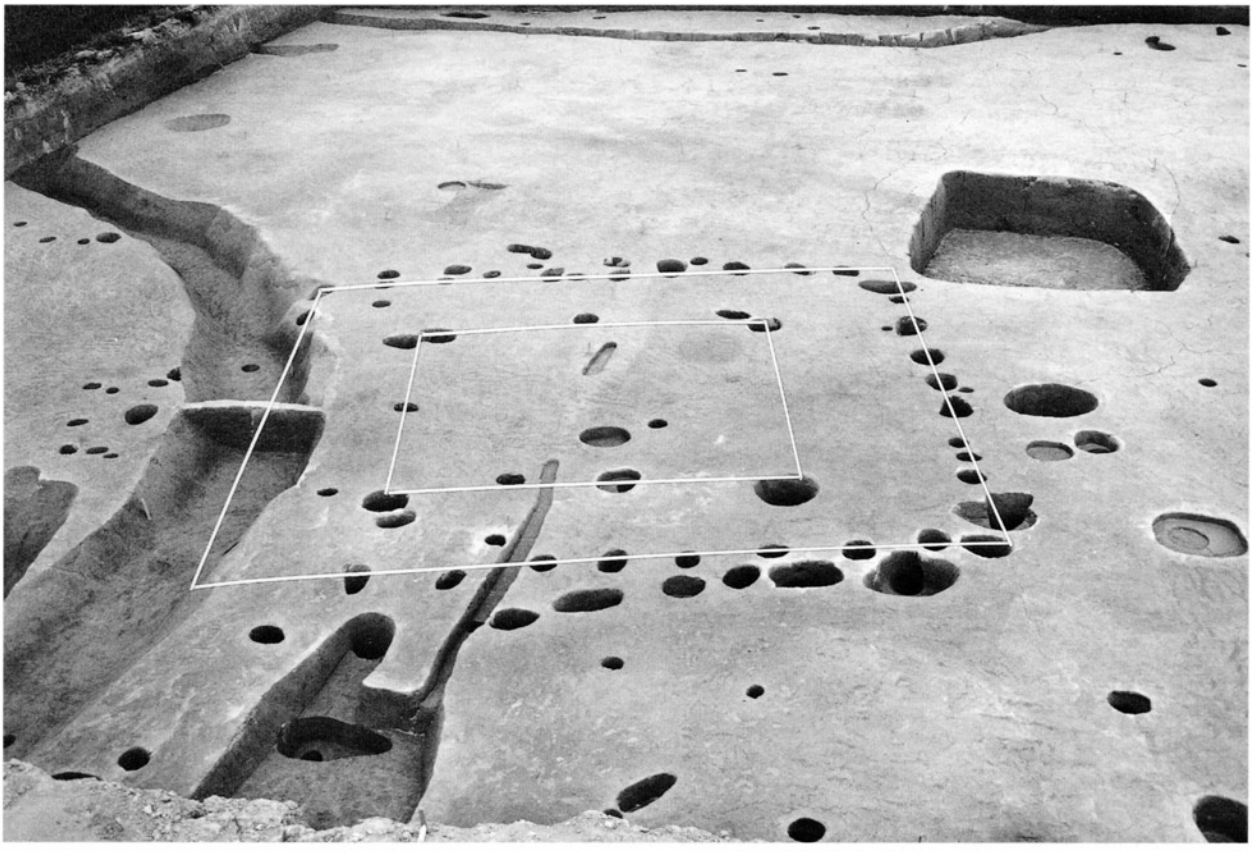
第１次調査Ｂ地区全景（西から）



第２次調査区西方全景（東から）

第２次調査区西方全景（東から）

第２次調査区西方全景（東から）

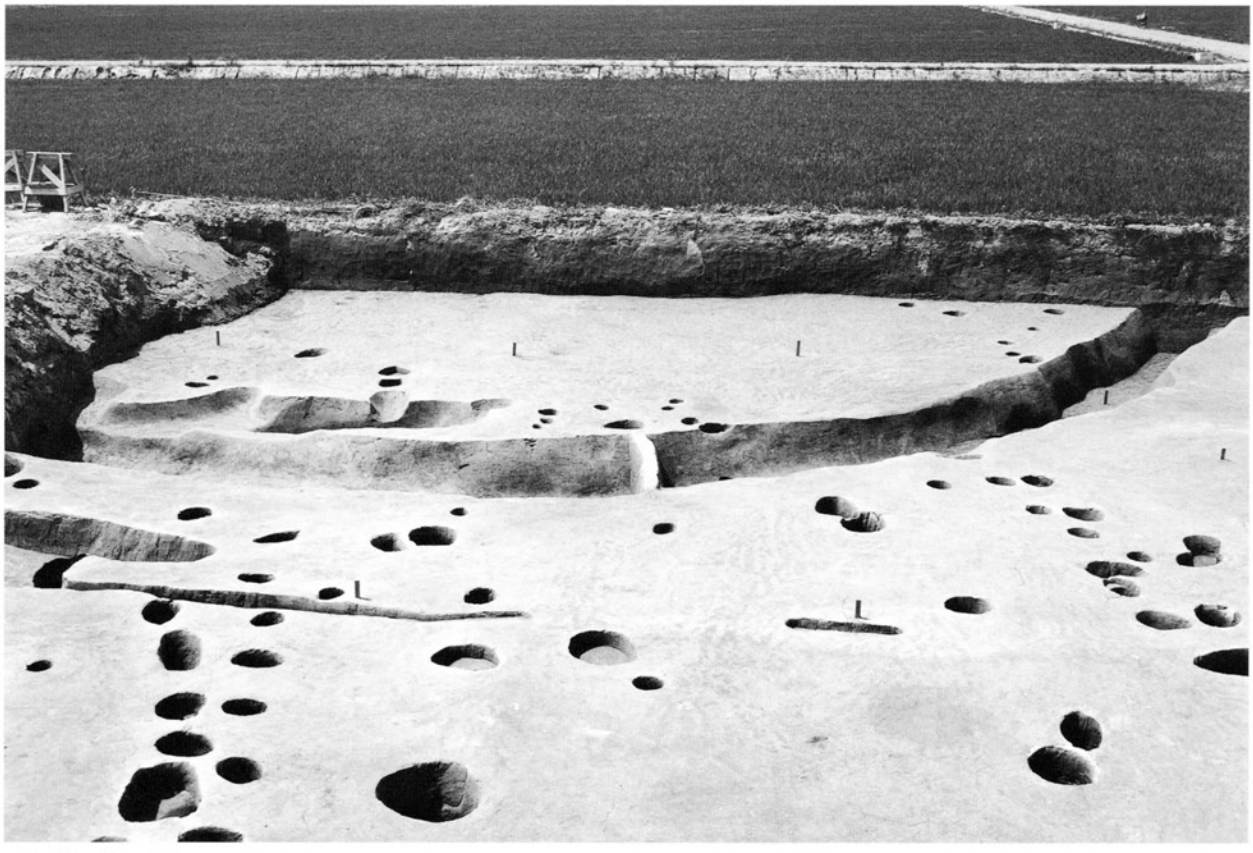


ＳＢ42（東から）

ＳＢ42（南から）

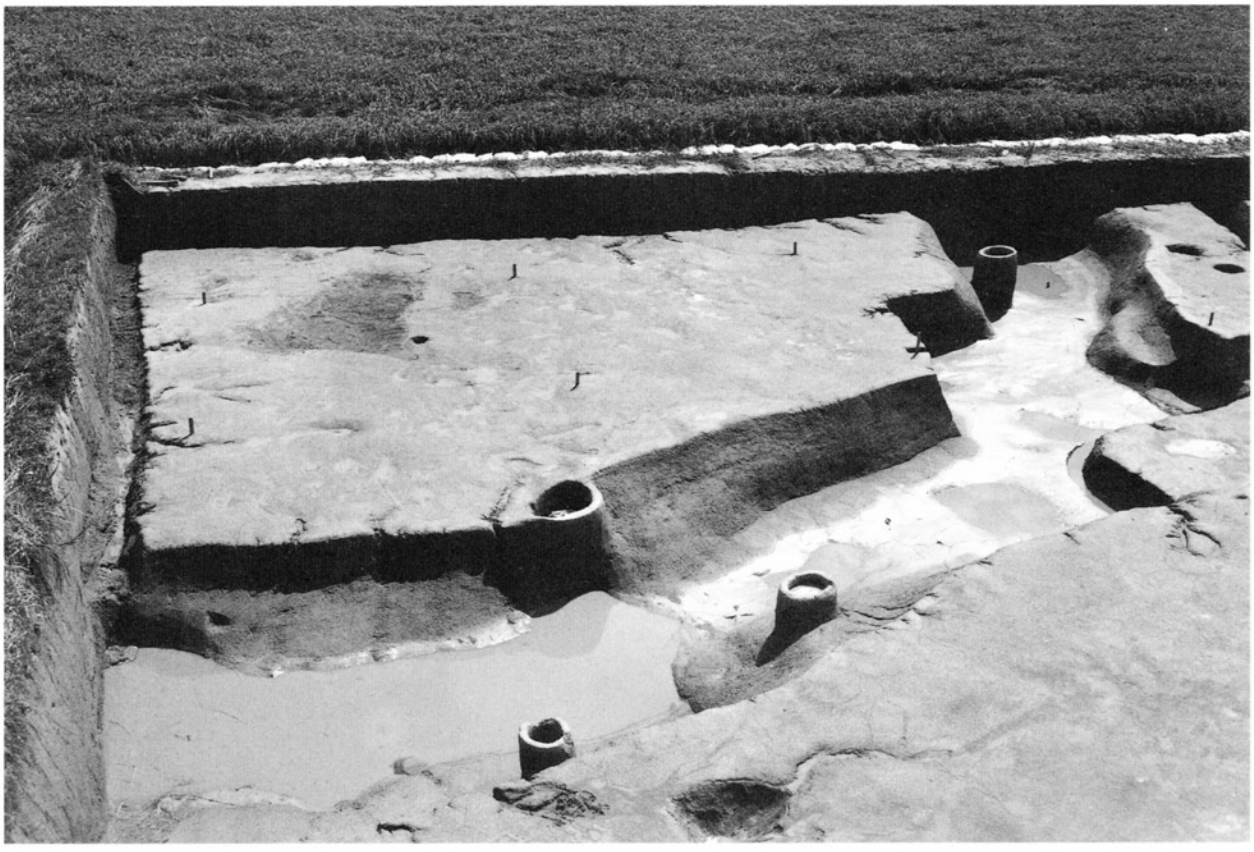
ＳＥ53土器出土状況（北東から）

１号墳（東から）

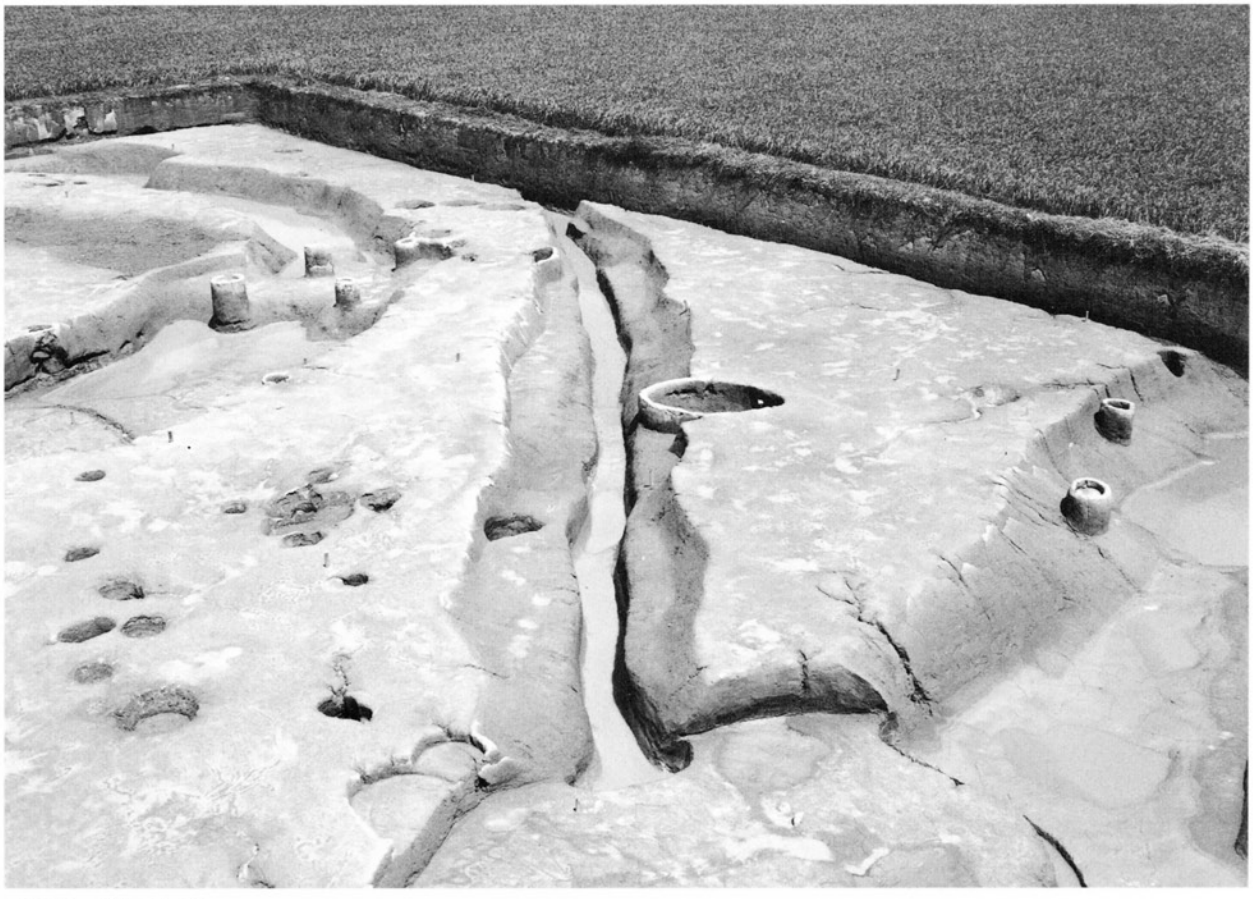


2号墳（北から）

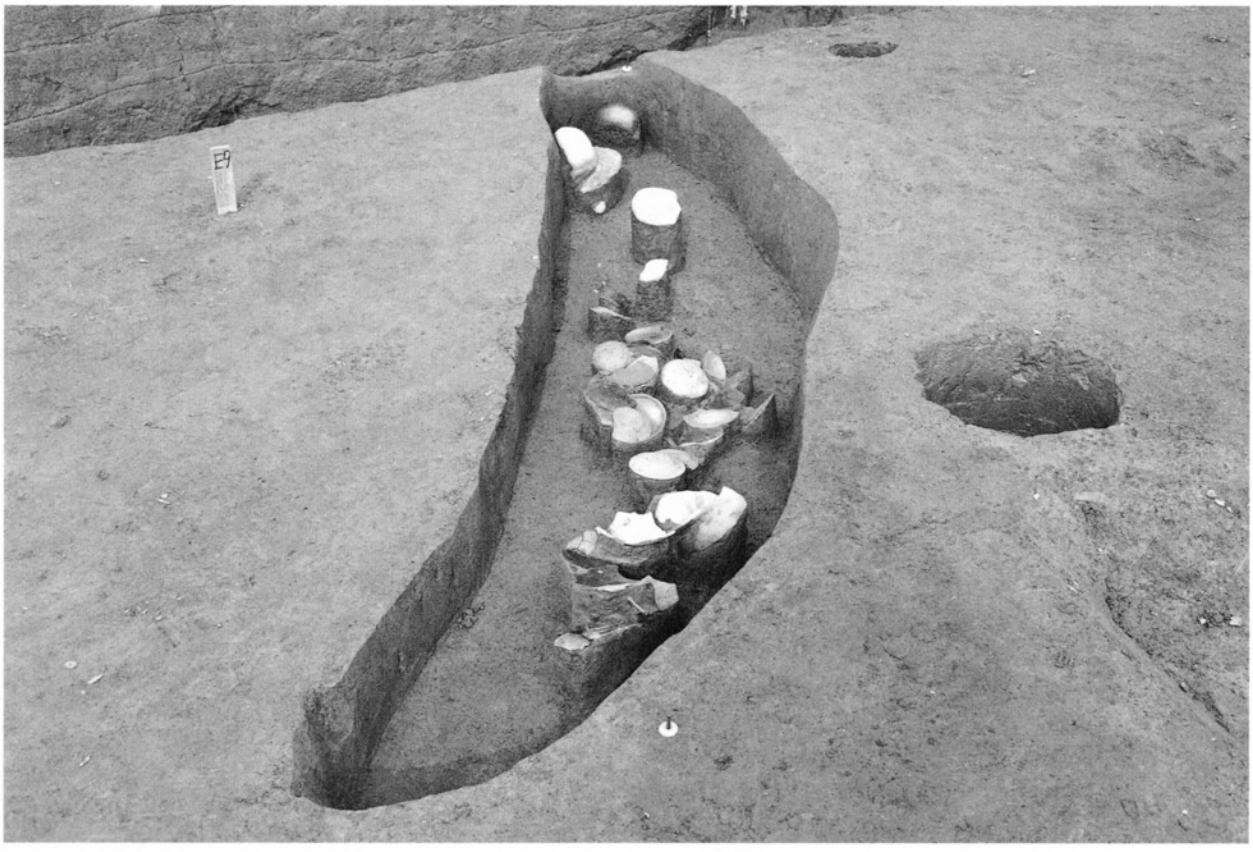
3号墳（西から）



4号墳（北から）



SD13（南西から）



ＳＫ１土器出土状況（西から）

ＳＥ51（南から）

ＳＥ51断ち割り後（北から）

作業風景（西から）

1

2

3

5

4

7

6

8

出土遺物１（１：３）

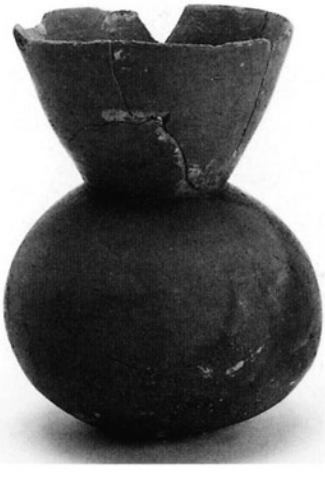
9

13

14

15

17


16

18

出土遺物２（１：３）

22

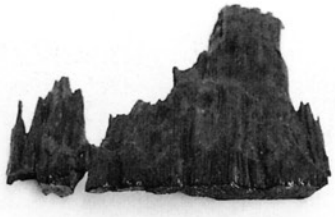
23

24

26

25

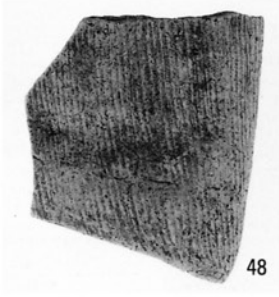
29


28

出土遺物３（28・29は縮尺不同、他は１：３）

43

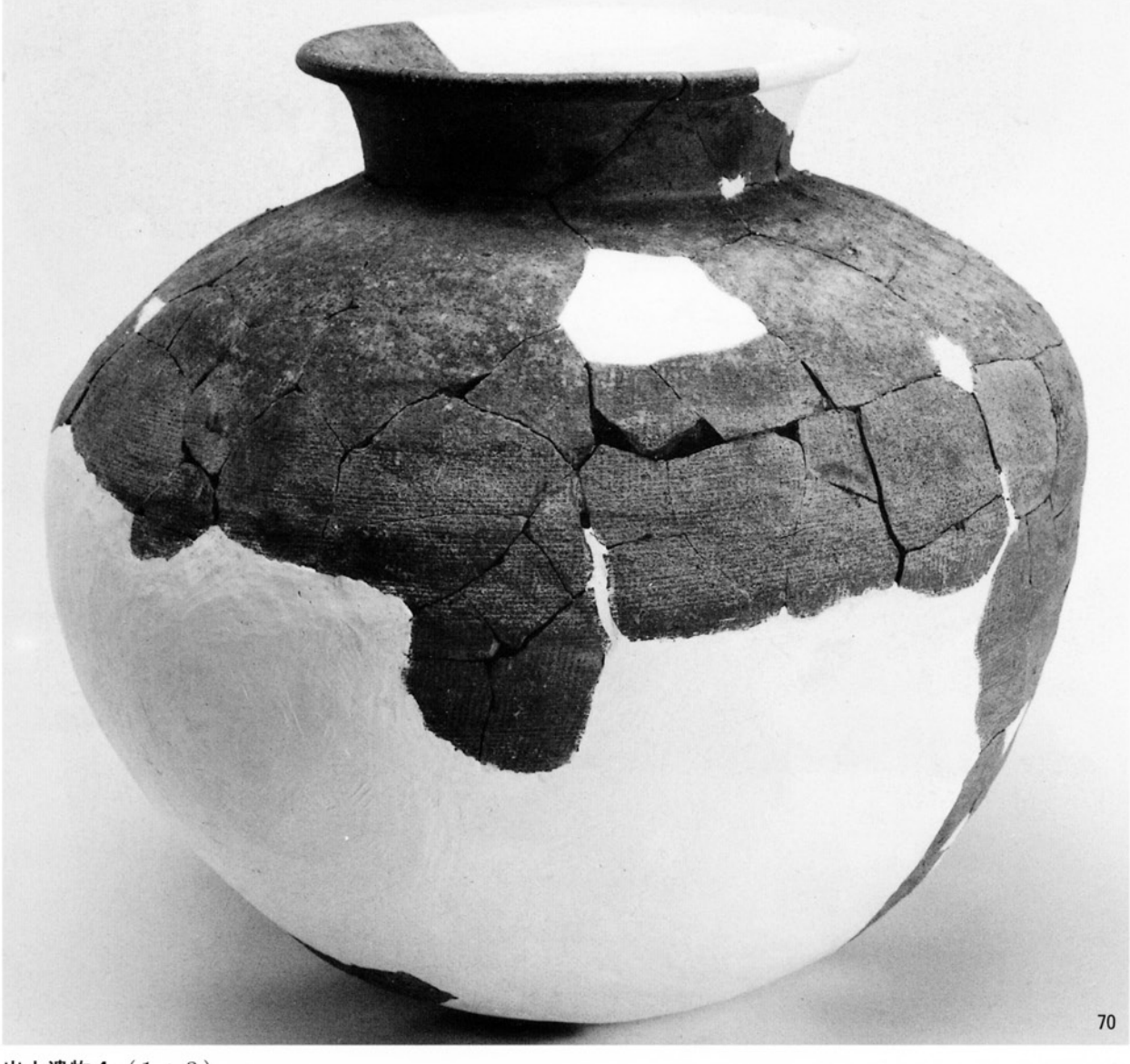
46


48

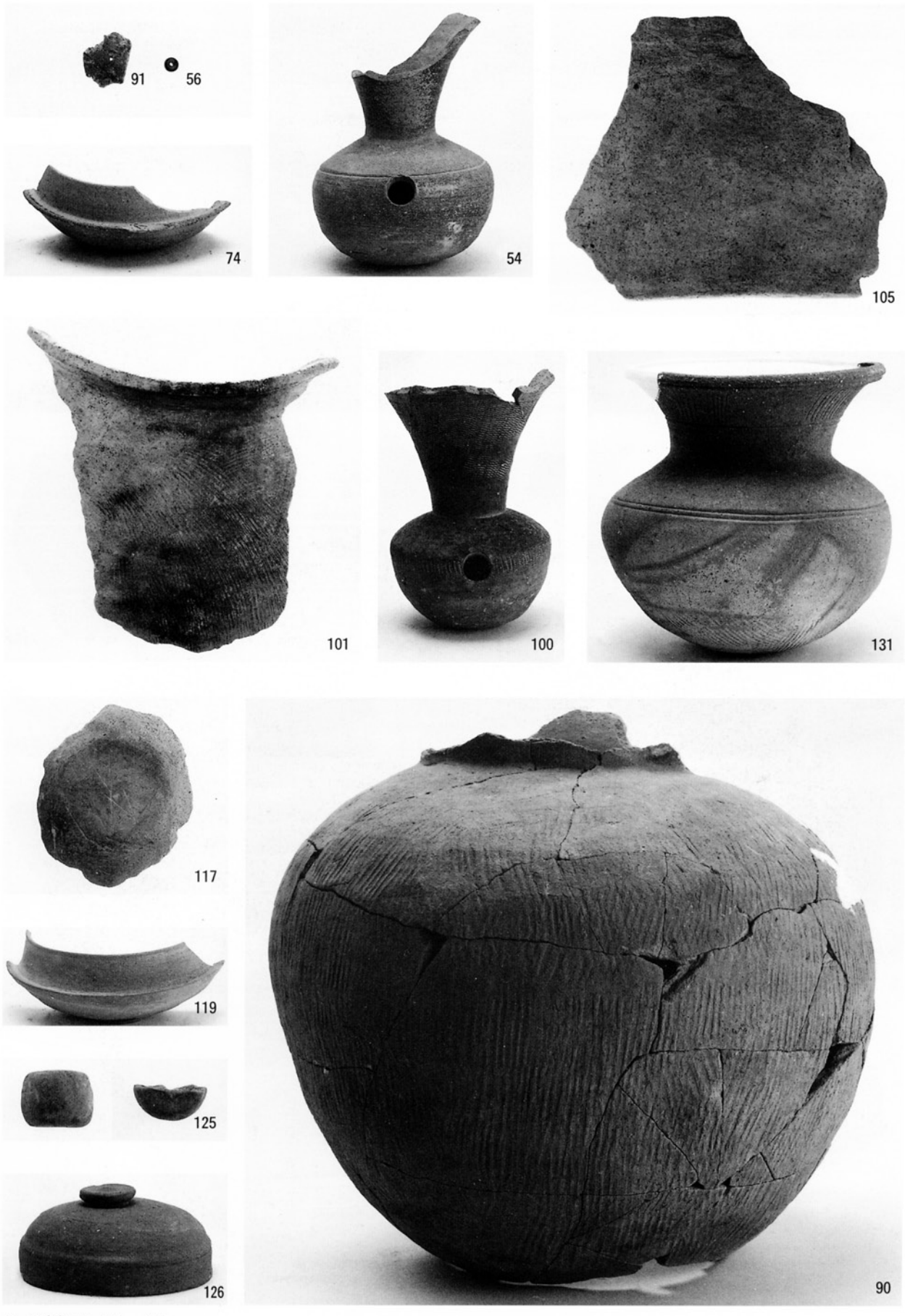
50

53

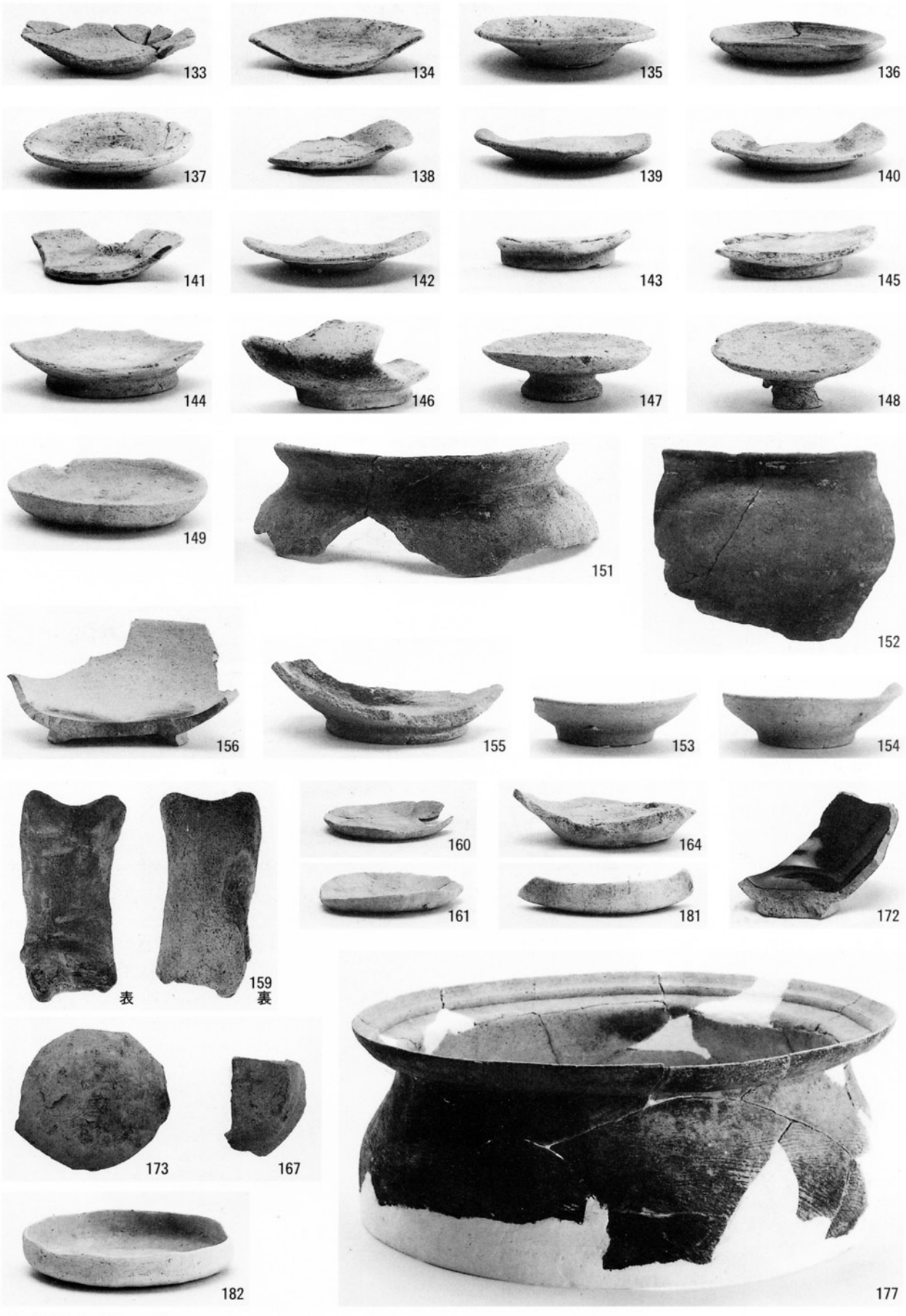
64 83 107


70

出土遺物４（１：３）



出土遺物５（１：３）


133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
145
144
146
147
148
149
151
152
156
155
153
154
160
164
161
181
172
表
159
裏
173
167
182
177

出土遺物６（１：３）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふるぐつわどおりビーいせき・ふるぐつわどおりこふんぐん
書名	古轡通りＢ遺跡・古轡通り古墳群発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２１３
編著者名	奥野　実・田上　稔・坂倉一光
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596－52－1732
発行年月日	西暦2000年9月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
古轡通りＢ遺跡 古轡通り古墳群	三重県松阪市早馬瀬町字古轡通り	市町村：24204 遺跡番号：651	34°32′22″	136°35′20″	１次 1998.9.16～1998.10.29 ２次 1999.5.10～1999.9.20	１次 650㎡ ２次 2,400㎡	平成10・11年度県営ほ場整備事業（漕代地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古轡通りＢ遺跡	集落跡	古墳前期	掘立柱建物 井戸・土坑	古式土師器	古墳時代前期の四面庇の掘立柱建物とセットになるくり抜き井戸
	古墳	古墳中期	土坑	土師器・筒形土製品	
古轡通り古墳群		古墳後期	古墳４基 溝・土坑	土師器・須恵器 土錘・不明土製品	円墳３基 方墳１基
		平安時代	土坑	ロクロ土師器・山茶椀	
		鎌倉時代	掘立柱建物 井戸・土坑	土師器・山茶椀	
		室町時代	井戸・溝・土坑	土師器・陶器	

平成12(2000)年9月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　213

古轡通りB遺跡・古轡通り古墳群発掘調査報告

2000年9月

編　集
発　行　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　光出版印刷株式会社